
殺人鬼は異世界に来てしまったようです

himame

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺人鬼は異世界に来てしまったようです

【Nコード】

N7170Y

【作者名】

himame

【あらすじ】

自分の快樂のために殺し続けた殺人鬼は暇潰しで行なった黒魔術で異世界へと飛ばされてしまった！？魔王という存在と出会いこの世界を知った殺人鬼は魔王と手を組み共に生きていく。剣と魔法の世界の中を殺人鬼はどうやって生き残るのか。これは一人の殺人鬼の物語——だよね？

最近の殺人鬼は異世界にいけないと駄目らしい（前書き）

「殺人鬼？ いえいえ俺はただ殺すのが大好きなだけです」

b y 主人

公

死体はどれも絶望したような表情や恐怖で歪んだ表情ばかりだ。ある者は片腕を失いある者は顔の半分が消し飛んでいる。なかには腹が裂け臓物が出ているものもある。その死体に囲まれた中男は愉悦に染まった顔で笑っている。

「さ、始めようか！この俺の今世紀最大のショーを！！」

男は死体の中を歩きながら叫ぶ。男は殺人鬼だった。今まで何千何万という数の人を殺し続けてきた生粋の殺人鬼。

やがて殺し続けてきた男は退屈しないよう趣向を凝らして様々な殺し方をするようになった。これもその一つ。今では誰もが口を揃えてこう言うだろう。「有り得ない」と。彼が行うものはそう――黒魔術だ。

よく見れば死体は何らかの模様を描くように配置されているのが分かる。直径は恐らく100mを程のもの。それを描くのに犠牲になった村人の数は実に100人を超える。男は別にこれが失敗しても構わない。只自らの退屈を紛らわせる為だけに行なっていることだ。失敗しても場が白けるだけ。

「（いや、それは嫌だな）」

そう考えながらも男はこれをやめることはない。やがて男は魔方阵から出ると鈍い輝きを放つ一つのナイフを取り出す。男はそれを持つと躊躇うことなく自分の指を切る。切り傷からは真っ赤な血が少しずつ流れ男はその流れ出る血をうっとりとした表情で眺める。その様子は誰が見ても気が狂っていると思えないだろう。やがて血は一滴の滴となって方阵へと落ちた。

コオオオ



あー、変な光に巻き込まれた俺だ。取り敢えず現状を把握しようとして動き回ったんだが、どうやら俺の荷物は近くに落ちていたようだ。いやあ、助かったね。今回村一つ潰すのに弾薬と火薬と後食料とだ、いぶ持ってきたからな。

「これ持って辺り散策するか」

不可解なことが起きたら取り敢えず口に出せ。それで結構頭の中が整理されるもんだ。……少なくとも俺は。

「原因は十中八九あの黒魔術」

まさか成功するとはねー。どんなものか知らないけど。本にあったの適当にやっただけだし。

「あんだけ殺した甲斐があったってもんかね」

俺はその時の光景を思い出して思わず笑みを浮かべる。今までの中でも結構面白かったほうかな。興奮したもんだね。

「……」

ま、何にしても現状把握、現状把握っと。まず俺の周囲に広がっているのは草原。まあ、これといったものはなし。さらに遠くに森が見えるな。他は……。何もなし。

「情報なさすぎだろ」

思わずそう呟いてしまう俺は悪くない。……疑問に思いかもしれないが俺はヒトを殺したがる以外は一応まともだぞ？

「まずは森行つて。ほかは後で決めよ」

行動しないと何も始まらねえ。俺は木箱の中にあつた付けそうな火薬と弾薬それに食料をカバンに入れ森へと向かった。数分後に聞こえた置いといた火薬の爆発音をBGMにして。



只今森の中でございます。リポーターはこの俺。

とまあそんな感じで進んでるが、あれだ。草原と森の中違いすぎじやね？なんだか猿だか鳥だかよく分かんねえ声が聞こえる。

「……………今日の晩御飯は何でございましょうか？」

そんな呑気なことを言っている俺の前に現れたのは腕が2m位ありそうな猿なのかゴリラなのかよく分かんねえ生物。見た目は猿っぽいが多分体はゴリラ。何か筋肉がとんでもねえもん。それで俺の記憶で該当するのはゴリラ。何千何万とヒトを殺してきた俺には分かるあいつの異常さが。俺の目は人体構造が人に近けりゃ近いほどそいつの行動、構造が手に取るように分かる。

「ウホッ！キキキ！！」

何か猿ゴリラ（俺命名）がどっちなのか分からねえ鳴き声を上げて俺に飛びかかる・よし、なら

「俺流初対面の方へのご挨拶ー！！」

俺は飛び掛る猿ゴリラの顔面に右ストレートを放った。その拳は驚くほど綺麗に決まり反対に猿ゴリラの拳は俺を外し後ろの木を抉る。殴られた猿ゴリラは顔面を仰け反らせそのまま吹き飛ぶ。因みに猿の速度は常人より遥かに速い。俺がそれを捉えられたものはあるものの御陰だ。

俺は頭のどこか（どこか忘れた）がぶっ壊れてて本来ヒトがセーブしている力を俺は全て引き出すことができる。御陰で小さい頃から俺の体中の骨が折れまくった。だがその肉体を極めればそいつはどうなると思う？ 答えは

「最強の肉体持った人間の出来上がりだー！！！！！」

俺は吹き飛ばされた猿ゴリラの顔に躊躇なく踵落としをする。その衝撃で猿ゴリラの顔面は見事に変形し白目をむいている。あれ食らってまだ生きてるのかよ。

俺はポケットからナイフを取り出し

「お疲れさんっしたー」

首を切り裂いた。猿ゴリラは二、三度跳ねるとやがて動かなくなっ

「・・・見事に地球外生命体です。本当に（ry」

改めて猿ゴリラの全身を見た俺はその姿に此処が少なくとも日本ではないと判断した。というかあの魔方陣の時点で大体予想つくけどさ。

俺は木々の隙間から日が暮れてきたのを確認するとそこらへんから木の枝を持ってきて火をつける。

今日は此処で野宿かね。俺はそう考えながら明日からの行動を考

えていった。

P S .. 猿ゴリラの肉は少し固かったです。

殺人鬼はRPGのラスボスに挑戦したようです（前書き）

「怪しい人に声をかけられたら？ 右ストレートでこんにちはだろ」

b

Y主人公

殺人鬼はRPGのラスボスに挑戦したようです

おはようございます。太陽が憎たらしいほどに輝いてやがる朝でございます。

「・・・・・・・・・・」

まずは周囲の確認。相変わらず周囲は木々で埋めつくされてる。

「・・・・・・・・どうせなら夢であって欲しかった」

俺はそう目の前の現実になんか愚痴りながら立ち上がる。化け物どもは寝る前にピアノ線を周囲一帯に張り巡らせたから一応大丈夫だと思ふんだが。念には念をと言うことでピアノ線を見る。

「わお」

一部のピアノ線が血塗れになって張ってあるのを発見した。そしてそのピアノ線に引っ掛かっているよく分からない獣の死体。チーターのようにも見えるがその死体には目が三つあり角が生えている。さらにそこからすぐ近くにはもう一つの死体。・・・・こいつらって学習能力ないのかね。何かもう一つの死体はゲームで出てきそうなゴブリンの様な死体。

「・・・・・・・・？」

見ればゴ布林が腰に着けている巾着袋から鉱石のような赤い欠片が見える。俺はそれを取り出すと日に照らして眺める。

「・・・・・・・・何だこれ？」

日に照らされキラリと光る赤い欠片。俺は取り敢えずそれをポケットの中に入れる。取り敢えず巾着袋にはもう何もないようなので獣の死体を見る。

「・・・・・・・・朝飯にするか」

俺は獣の死体を掴むと寝床にある木の枝を組み再び火をつけた。これはなかなか・・・・・・・・。



朝食を食^{けもの}べた俺はピアノ線を回収し鞆を持つと歩きだした。

「獣はなかなか・・・・・・・・ただ実際に戦って仕留められるのか」

生憎衝動に駆られて殺すただの快樂殺人者じゃないんでね。先のことも考えて行動しないと後で痛い目を見る。現にそういった奴を何度も俺は見てきた。

俺が暫く歩いていく周囲の草がガサガサと揺れる。俺はその音を聞くと共につい条件反射で

ダァン！！

懷からデザートイーグルを取り出し引金を引いた。それと共に放たれる銃弾と硝煙の臭い。放たれた弾丸は一瞬で目標へ到達し

「ギャ！？」

目標は短い悲鳴を上げ血飛沫と共に倒れた。俺は銃とナイフを構え周囲を警戒する。すると草が揺れると共にピアノ線に掛かっていたゴブリンとよく似た奴らが飛び出してくる。

「・・・・・・・・」

数は10、いや俺に向けられている殺気数は15。まだ何処かにいやがるな……。ゴブリン共の表情にはハッキリとした殺意と憎悪が受け取れる。さっきの一匹を殺したことを恨んでるのか？

「中々仲間思いじゃねえか。・・・けどよ」

ダン！

俺は一匹のゴブリンに向け引金を引く。放たれた弾丸はゴブリンの眉間に穴を開け、また一匹が死んだ。

「俺は優しくねえからよ」

流れ出る血から漂う鉄の臭いと銃口から昇る硝煙の臭い。それは俺を興奮させ殺人鬼としての本能を刺激する。

「精々足掻けや、虫螻があ！！！」

俺は目の前にいた一匹のゴブリン目掛けて駆ける。目の前で突然仲間が死んだことに動揺しているのだろう。ゴブリンはろくな抵抗も出来ず首を切り裂かれ血飛沫を上げながら血の海に沈む。俺は頬に掛かった血を舌で舐める。

「ヒカカカカ！！！脆すぎだろお！？殺る気あるのかあ？」

再び駆ける俺。残りのゴブリン達は状況を理解できたのか俺へ向かって殺到する。振り下ろされる棍棒、俺はそれを片手で受け止めるとそのゴブリンの首を掴みへし折った。骨の折れる鈍い音がしゴブリンの首はぶらぶらと揺れる。

「ギャア!!!」

俺が一匹のゴブリンに集中していると背後からもう一匹のゴブリンが俺の頭に棍棒を振り下ろす。

「んなもん食らうかよお!!!」

俺は飛び掛ってきたゴブリンに先程の首が折れた死体をぶつける。それによってゴブリンのバランスが崩れ後ろにいた仲間達を巻き添えにして転倒する。それを見た俺はそのゴブリンにピンを抜いた手榴弾を投げその場を離れる。背後から俺を襲う爆音と衝撃、俺は転がりながら体制を立て直すとその爆心地を睨む。其処にあるのは小規模なクレーターそして辺りに飛び散っている肉塊と血。俺はそれを見て口笛を吹く。

「随分スッキリ消えたなあ」

あれだけの距離だったんだ当然俺も無事な訳がない。左手に走る痺れと痛み。火傷で済むってのは人間やめてるとしか思えないな。

「残りは5匹。さあて何処にいるんだい？」

手の中でナイフをくるくると回しながら俺は周囲を見渡す。次の瞬間俺の脇腹に刺さる矢とはしる痛み。

「ギャギャギャー!!」

ゴブリンは俺に当たったのが嬉しいのか声を上げる。その行動に俺は口元を歪ませた。やっぱこいつら馬鹿だ。

「死んじまえよお!!」

俺は声が聞こえた場所へ弾丸を連続で放つ。ゴブリンは苦し気に呻きやがて倒れる音が聞こえる。

「あと四匹。さあ次はどいつだあ？」

その言葉と同時にまた引金を引く。そしてまた聞こえる血飛沫と断末魔の声。

「さ、残りは三匹」

ガサガサという音共に聞こえる三つの足音。ただその足音は徐々に遠ざかっている。

「・・・・・・逃がすと思ってるのか？」

先に手え出してはいすみません？んなもん聞いてもらえんと思ってるのか？俺はその足音の下へと駆けていく。

「舐めてんじやねえぞ。小鬼風情が！」

俺は口元を歪め瞳を輝かせながら駆ける。やがて見えてくるのは三匹のゴブリン。奴らは俺の半分程の身長しかないんだ当然歩幅など

俺より遥かに小さい。見えてきた標的を前に俺は舌舐りをする。
良いぜ良いぜ良いぜ。そうだその命を燃え上がらせろ！俺にその命
の燃え上がる様子をみせてくれ！！

俺は手に持ったデザートイーグルを奴等に向け、引金を引いた。炸
裂する弾丸、血飛沫を上げ血の海をつくっていくゴブリン。

「堪んねえなあ！！これだから殺すのは止められない！！」

俺は額に手を当てて顔を覆いながら高笑いを上げる。最早此処が何
処であろうと構いやしない！これが俺が求めたもの。この血風と快
感を感じることができるとこの場所が俺が求めたものだ！！ダイヤの
金の輝きすらも凌駕する人の魂の輝きそれを俺は見続けたい！！！！

「だからどうよ爺さんよお？」

俺の背後に立つ一人の老人。見た目は只の老耄だが中身がまるで違
う。何か巨大なものを無理矢理人という容物に詰め込んだ化け物だ。

「是非とも俺と踊ろうじゃないか。爺は好みじゃないんだがな」

俺が問いかけると目の前の老人は笑う。

「ふふふ、こんな老耄と踊ってくれるのかのお。良いじゃろう」

老人が何処からともなく一本の杖を取り出すと地面にコンとぶつけ
る。それが合図かのように老人の背後に出現するのは無数の方陣。

「たつまんねえ。こんなに昂るのは久しぶりだよ！！俺にもっと生
を実感させやがれえ！！！！」

俺は今までにない程の速度で目の前の老人に疾走する。老人はその姿を見てニヤリと笑った。

「くくく、いいな。この俺『魔王』に挑むとはな」

一瞬老人の姿がぶれ、一人の長身の男が現れる。全身が黒く牙のようなものを生やし、背中には翼が生えている。

こいつは言った。魔王だと。俺は思わず笑を浮かべる。おもしれえ。

「見せてくれよ！魔王様の實力ってやつをよお！！！」

降り注ぐ方陣からの光をくぐり抜け俺は奴の目の前に出る。振りかぶる右腕。相手も俺と同じように左腕を振りかぶる

「ッラァ——！！！」

「フツ——！！！」

ぶつかり合う拳。だがその決着は一瞬だった。

メキヤ

鈍い音を発て潰れる俺の右腕。それは骨が折れ腕から突き出ていた。

「————」

その痛みに俺は顔を歪める。だが——

「くたばれよ」

最後の力を振り絞り放たれた銃弾。それは魔王の眉間を確実に貫いた。

「ムウ——」

魔王は僅かによろめき仰向けで倒れていく。その様子を見て俺の意識は闇の中に落ちていった。



「・・・・・・・・」

あ？ここ何処だよ。俺はそう思いながら起き上がる。既に夜空には満点の星空が広がり大地を照らしている。あの爺は何処に行きやがった。つか何で俺生きてんだよ。

俺は自分の右腕を見る。そこにはあるのは無事な右腕ついでに火傷も綺麗に治っていた。

「む、目覚めたのか」

俺が立ち上がって体の調子を確認していると茂みの奥から魔王とか名乗っていた男が現れる。男は俺の視線を気にせず近くに座ると隣を叩く。・・・・座れと？

聞きたいこともある。俺はそのことを考えると魔王の隣に座る。

「・・・・何で俺を生かした」

「開口一番がそれかのう」

魔王は面倒臭そうに頭を掻く。うるせえよ、俺には重要なことなん

だよ。

「主には興味があったからのう。『門』を開けるものなど何千年と
いなかったからのう。ましてや向こうの者が開けるなど初めてじゃ」

「『門』？」

「主ではないのか？」

魔王は首を傾げる。・・・門。思い当たるのはあの光。

「・・・たぶん俺だ」

「やはりか。門を開けられるなど儂ぐらいじゃからのう」

魔王は頷くと俺に顔を近づける。

「で、どうやって開けた？」

質問ばかりだなこいつは。少しは俺にもさせやがれ。

「大量のヒトの死体を集めて模様を描いたんだよ。そしたら光に包
まれてここにいた」

「人？主はどれだけの人間を殺した？」

「さあ、その『門』ってやつを開けるのに百人近く、今まで全部含
めて何千何万・・・よく覚えてねえよ」

俺にとって殺すのは飯を食うのと同じくらい自然なこと。正確な数

なんて覚えてる訳がない。俺の言葉を聞いて魔王は愉快そうに笑った。

「フハハハハハハハ！！！！主は本当に人間か！？そんな者など聞いたことがないぞ！！？」

「当たり前だ。他にもいたら世の中の人間は殆ど死んでるぞ」

その言葉を聞いて魔王はさらに笑う。うるせえんだよ。

「で、今度は俺の番だ。向こうってのは何だ？」

まず最初に聞きたいこと。此処がどこなのか、向こうとは何なのか。話とあのゴ布林達で大体の予想はつくが・・・

「向こうってのは主が生きていた世界じゃ。この世界は『アリアンロッド』と言ってな。お前達の住む世界とは別の世界じゃ」

・・・さいですか。いや、むしろゴ布林やら魔王やらが地球にいる方が驚きだけどさ。慣れってのはとんでもないな、ここが異世界だと言われてもまるで驚かない。

「で、魔王様は何でこんな所にいるんでしょうかね？」

皮肉を込めて俺は魔王に問う。魔王は腕を組んで悩むと何か思いついたのか言った。

「実は後継者を探していてな。ちょうど門を開いた者がいたから押しつけ・・・もとい継いで貰おうかとな・・・」

「巫山戯んな」

俺はそう吐き捨てて立ち上がる。そして歩き出そうと踏み出し――
―足を掴まれた。

「離せ」

「まあ、待て。主はまだこの世界のことを知らんじやろ？」

確かにそれはそうだ。俺はこの世界の知識がまるでない。当然あんな化け物共についてもこの世界の人間についても……。

「まあ、教える代わりに継げとは言わん。話を聞け」

……ただ教えてもらえるのはありがたい。ただ程怖いものはないとも言いが……。

「座れ、座れ」

そう言って魔王は再び隣を叩く。俺はメリットデメリットを即座に考え、座った。

「いいか、この世界には魔物というのがいる。まあこれはお前が殺していたゴブリン共が該当する。」

あれ本当にゴブリンだったんだ。

「魔物は総じて知能が低い。なかには人間以上の知恵を持つものがあるがそんなのは稀だし。自ら無駄な戦闘というのは行わない……たぶん」

こいつが一気に信用できなくなった。

「我らは姿は魔物に似てるがれっきとした魔族という生き物じゃ」

ふむふむ、翼、角、牙があるやつは魔族Ⅱ信用できない、と。

「今変なことを考えなかったかのう？」

「気のせいだろう。で、他は？」

「まあ、種族は他にもあるが面倒くさいから先に他の説明じゃ」

グダグダ過ぎんだろこいつ。俺は深いため息を吐く。

「この世界には魔法というものがあっての。それぞれ炎、水、風、大地、闇、といったものがあるのう。因みに魔王は全ての属性が使えるんじゃない」

「あ？じゃあ、他の奴は全部は使えないのか？」

「うむ、複数使える者はいるが全ては無理じゃ。」

魔王はそう言って言葉を区切る。

「そもそも、魔法には今の以外にも呪い、聖、召喚、無、と様々なものがあるからのう。」

「ふーん。」

面倒くさいなそりゃ。

「あとは魔導具といつてのう。魔法でも実現不可能なことを可能にするアイテムがあつての。それぞれランク分けされておる」

魔王はそう言うど溜息を吐く。

「他にも色々あつてのう。正直説明すんのは面倒くさいんじゃ」

ぶっちゃけんじゃねえ。

「ど、言うわけでの？主に直接この世界の知識、魔法の扱い方、や魔力を叩き込もうと思つての」

魔王はそう言つて俺の頭を掴む。俺は逃げることも許されずに押さえつけられる。そして流れ込んでくる知識。それは激痛となつて俺を襲う。

「ぐっ・・・が・・・ぎぎぎぎぎ！！！！あ、たまがあ！！！！つう・・・
つてええええええ！！！！！！！！」

頭が割るような痛み。俺は我慢できずに頭を抑えて地面をのたうち回る。

「がああああああ！！！！痛い痛いいたい痛いイタイイタイイタイイタイイタイイタイ！！！！！！！！」

俺は思わず叫んだ。魔王が何か言っているがそれすらも耳には入ってこない。鼻からも血が流れ出てくる。やがてその痛みに耐え切れなくなつた俺は再び闇の中へと落ちていった。

殺人鬼はRPGのラスボスに挑戦したようです（後書き）

感想、批判、ご意見があったらどうぞ送ってください。

どんな奴でも絶対に驚かないなんてことはないそれは殺人鬼も例外じゃなかった

「友に秘密を知られたら？何が何でも口を封じるの……一部を除いて」

b y 魔王

どんな奴でも絶対に驚かないなんてことはないそれは殺人鬼も例外じゃなかった

Good morning 太陽。今日ほどお前を消したいと思った日はねえよ。昨日俺が魔王に流し込まれた知識。俺が意識を失っても激痛で再び意識を覚醒させてきやがった。意識を失っては激痛で目が覚める。地獄のような時間だったぞ。ようやく治まった頃にはもう日の出だ。・・・あの魔王死ね。

「・・・・・・・・」

実際俺はもう口を開く気力すらない。思考は正常だが如何せん体を動かす気にはならん。耳を澄ますが俺の他に動いている音はしないから魔王は何処かへ行っているのだろう。これで放置とか言ったら絶対にあいつを殺す。・・・しかし

くう

俺の腹はまだまだ気力があるようだ。こんだけ元気に空腹を訴えているのだから。



「・・・・・・・・起きよう」

日が地平線から完全に出た頃。俺はようやく気力が戻ってきた。

「^{あれ}激痛で体力を相当もってかれたし服も血塗れになっちまった」

おまけに顔も血塗れだ。不快で堪えない。俺はまだ動きたくない

いう体に鞭を打って立ち上がる。そこで初めて周囲の様子に気づいた。

「・・・・・・・・何処だ此処」

俺の背後に広がっているのは鬱蒼とした森、ここは最初とそこまで違いはないが問題は前。俺の眼下に湖が広がっている。そう眼下、つまり俺は今上から湖を見ていることになる。今、俺がいる場所は湖より遥かに高い崖の上だった。

「魔王がやったのか？」

俺は一步前に出ようとしてバランスを崩す。

「・・・・・・・・貧血か？」

顔面は見えないが服には大量の血液が乾きこびりついている。良く俺死ななかつたな。自分の運に感謝しつつ俺は鬱蒼とした森の中に入ってしまった。



「・・・・・・・・あやつは生きてるかのう」

儂は小さな湖の辺で呟く。やれる限りのことはしたし回復もこまめに行なった。これで死ぬ確率は低いじやろうが絶対ではない。

「後継者を死なすのはもったいないからのう」

あれがただの馬鹿だったら助けようなどとは思わんし継がせる気も

ない。そんなことをしたら僕は恥を晒すことになるからう。

「……………しかしこの姿も疲れたのう」

老人も嫌じゃったが。この姿はごつくて気持ち悪いからのう。威厳は出るんじゃないが…………。

「やはりこれが一番だのう」

我はそう言って元の姿に戻る。うむ、やはりこの姿が一番じゃ。我はそう言って服を脱ぎ湖へと入ろうとし

「おい、ま……………おう？」

その声に思わず我は後ろを振り向く。そこには昨日助けた人間の姿。ヤバイヤバイヤバイ。この姿を、女の姿を見られた！？……………しかも裸。



森の中を歩いていた俺は途中で見つけた小川を辿っていた。たぶんこの水があ湖に繋がっているんだろう。

やがて小川の先に小さな湖が見えてくる。あのでかいやつ程じゃないが十分だ。俺はその湖へ歩いていくと丁度足を水に浸している魔王がいた。

「あ？」

俺が声を掛けようとすると魔王の姿が突然ぶれる。その現象に少し驚きながらも俺は近づこうとすると

「おい、ま」

「やはりこれが一番じゃ」

美女が現れた。

「・・・おう？」

その姿を見て俺は今まで見てた魔王は実は幻なのではないかと思っただ。だってあれだぜ？あの厳つい面して牙生やして翼生やした奴だぜ？それがいつの間にか美女になるって・・・。
俺はその場で頭を抱えながらとうとうイかれたのかと考えていると先程の美女が声を掛けてくる。

「死ね！！」

「うおっ！？」

突然、美女は俺へと飛び掛ってくる。思わず反射的に俺は転がってその場から逃げた。つうか服着ろ、服！！美女は裸を見られたのが余程ショックだったのか涙目になりながら俺を追撃しようとする。しかし、あれだ。いいね。美しいとしか言いようがないプロポーション。それに絹のように美しい黒髪。そして宝石のように輝く紫の瞳。それを見た俺は笑を浮かべる。

いいね、どうしても切りたくなっちゃうじゃねえか。俺はデザートイーグルとナイフを構えると目の前にいる美女へ駆ける。

「ふん！生かそうかと思ったが！！我の姿を見て生きてられると思うなよ！！し、しかも、は、はだ、裸まで見るとは！？継承などど

うでもいい!!ここで殺してやる!!?」

美女・・・というか魔王なのか?は顔を湯気が出るくらい赤く染め俺に腕を振るう。食らってしまえば消し飛ぶような威力。だが、まだ混乱しているのかその一撃は隙だらけで――――

「フッ―――」

俺は紙一重でその攻撃を躲すと魔王(仮)の首を掴み木に叩きつける。

「がっ!？」

その衝撃に魔王(仮)は咳き込み俺を睨む。だが殺すことは出来ないだろう。殺ろうと思えば今すぐにでも俺は魔王の首を切り裂ける。俺より魔王が死ぬほうがどう考えても早い。

「お前魔王なのか？」

「当たり前だ!!」

あ、マジで魔王なんだ。

「で、何でそんな姿になってんだ?つか初だなお前」

「これが私の本当の姿だ!!!そ、それにあ、当たり前だろう・・・」

魔王は叫ぶが徐々にその声は小さくなっていく。

「は、裸を、み、見られたんだから」

魔王は顔をさらに赤くし涙目で言う。・・・止めてくれ、凄いい切りたくなってくる。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

魔王も俺も黙り込む。・・・このまま掴んでても埒が明かない。俺は掴んでいた手を離すと魔王にコートを着せる。俺の服で唯一血の被害から逃れていたものだ。多分魔王が脱がしたんだろう。

「取り敢えずこれでも着とけ。話はそれから聞く」

「・・・・・・・・・・」

魔王は俺をじっと見る。おい、我慢してんだからそんな目で見るなとっとと服を着ろ。

「・・・・・・・・ありがとう」

魔王はそう言うのと湖に置いてある服に着替えに行く。いや、体でも洗うのか？

俺は取り敢えず魔王を見ずにさっきの衝動をぶつけるように木に向けてデザートイーグルの引金を引いていく。そもそも印象変わりすぎだ。前の厳つい状態なら文句で何でも言えるがその状態だと俺がみつともないように見える。傍から見たら俺が虐めているようにしか見えないしな。世間の価値観ならあの魔王の姿（美女）は間違いなく美しいとか綺麗と言えるだろう。それもとびっきりの上玉と。

まあ、俺も男だ。そんなものの裸を見ちまったら……切りたくなるだろう？え、ならない？

まあ、ともかく元々言おうと思ってた文句も言えなくなっちまうんだよね。

「……………腹減ったな」

俺がマガジンに入っていた銃弾を全て撃ち終わり新しくマガジンをセツトしていると丁度魔王がやってきた。

「……………すまない」

何への謝罪かは分からないが俺は無言で渡されたコートを取る。

「構わない。というか俺も服を洗いたいから向こうでいいか？」

俺は魔王の返事も聞かずに湖へと歩いていく。後ろから足音がするからついて来ているのだろう。俺が湖で服を脱いで洗いだすと魔王が隣に座る。

「怒らないのか？我はお前を殺そうとしたのだぞ？」

「別に。むしろ俺の方がすまなかった」

命を狙われるのは慣れてる。今まで散々殺してきたんだ。当然その分恨まれるし命だって狙われる。裸を見られて襲ってきたってことは此奴にとっては重要なことだったんだろう。だったら狙われるようなことをした俺が悪かったのだろう。俺が謝ったことを意外に思ったのか魔王は驚いた様子で俺を見る。

「い、いや。我の方が悪かった」

魔王は慌てたように謝る。……こいつ本当に魔王か？マジで印象が違うんだが。俺は内心でそう訝しがりながら魔王に気になっていたことを聞いた。

「で、何であんな姿になってたんだ？」

別にずっとあの姿でいる必要などないだろう。

「だって、あの姿の方が威厳があるし、それに魔王として舐められないだろう」

……成程。ようはあの姿の方が魔王っぽいと。けどよ……

「その姿でも十分過ぎるほどのカリスマを感じるんだが」

何というか。正直厳つい姿の時よりも俺はビビった。感じる力も迫力もこの姿の方が凄かったしさっきの一撃も冷や汗が止まらなかったからな。俺の言葉に魔王は僅かに顔を上げる。

「………本当か？」

「ああ、とんでもないほど感じた」

今の落ち込んでる姿からは全く感じないがな。そんなことを言っただけ以上落ち込まれるのも面倒くさいから言いはしないが。魔王は俺の言葉を聞いてブツブツ言いながら頷く。あ、くそ。流石にズボンは落ちねえよなあ。服も血がこびり付いて落ちねえよ。俺は傍に置いておいた鞆からシャツを取り出し着替える。

「よし!!」

「あ？」

俺が着替え終わると魔王は勢いよく立ち上がる。そして目を輝かせながら俺を見る。……今度はなんだ？

「人間よ！我もついて行くぞ!!」

「は？」

此奴何だったよ。ついて行く？俺に？

「うむ、主には世話になったしの！それに主には教えねばならぬことがあるからの!!」

魔王はそう言って俺に飛びついてくる。やめろ！離せ鬱陶しい!!

「人間よ、主の名前は何というのだ？」

魔王は離れると小首を傾げながら聞いてくる。たぶん文句言っても此奴は聞かないのだろう。昨日と今日で何となく此奴のことは分かってきたし……認めたくないが。

「響夜、鳴神響夜だ」

「うむ、我の名前はマオ。マオ・オメテオトル・ヘーラー。マオと呼ぶがいい!」

そう言って魔王、マオは手を差し出す。取り敢えずはまだ世話になることもあるんだ。俺はそう考えて差し出されたマオの手を握りつつた。

「よろしくな響夜!!」

「ああ、よろしく」

これがこれからも続いていく殺人鬼と魔王の出会いだった。



あの後から暫く経ち今俺達は焚き火を挟んで向かい合って話している。

「いいか、響夜。知識を与えたから大体のことは分かるはずだ。まずは魔法の属性についてだ。言ってみるがいい。」

なんとという高圧的な態度。いや、教えてもらうのは俺だから強くも言えないが

「あゝ、炎、水、風、大地、闇、聖、呪、無、空、時、だっけか」

「ああ。魔法が使えない者もいるが大抵は少なくとも初級の魔法は使えるな」

「で、俺の魔法ってのは？」

「うむ、それだがの・・・まあ何というか。我は主と繋がっておるから分かるのじゃが」

「？」

マオは少し難しい顔をする。俺はマオのその様子に首を傾げた。

「主が扱えるのは炎、呪、空の三つじゃ」

「炎は一般的だっけか。で、空はレアなので・・・。」

「呪を使えるという者はいないと言っても過言じゃなの。」

「何でだ？」

俺が与えられた知識の中には呪については能力の特徴だけでそんな情報はなかった。

「呪は使えるものは相当限られるんじゃ。まず上手く操れなかったら自分にその反動が返ってくるし、それが使えるのは余程の罪深きものや恨みなどがあるものじゃからな」

それも大抵操れずに自滅するんじゃが。とマオは言う。

「しかし、主にはピッタリかもしれんな」

マオはそう言って笑う。それは厳ついときのような豪快な笑いではなく女らしい・・・お淑やかとでも言えば良いのだろうか。そんな笑いだった。

その姿を見ながら俺はずっと疑問に思ってたことをマオに聞く。

「なあ、俺の手にあるのは何なんだ？」

そう、俺の手の甲。そこにはよく分からない刺青がはいっていた。翼を生やした……これは天使だろうか。一本の剣を両手に地面に突き立てるように持つ天使の上半身の姿だった。それは黒く描かれていることから墮天使のようにも感じる。

「…………それは……あれじゃ」

それを見たマオは齒切れが悪くなる。

「あれって何だ」

「その……我との契約の証じゃ」

「証？」

魔力を受け取った時のか？

「うむ、我が死んだとき主は私の代わりに魔王になるという魔王の後継者としての証じゃ」

「……………は？」

「だから魔王の後継者の「ちょっと待て、お前これいつやった」……知識と魔力を与える時じゃ。」

「巫山戯んな！お前シャレになんねえぞ！！」

「良いではないか！魔王になれば最強ともいえる力と全ての属性を使うことができるのじゃぞ！！それにその紋章は我を召喚すること

も出来るし、制限があるとはいえ通信も可能にするのじゃぞ!!」

「そういう問題じゃねえ!!」

畜生やられた! やっぱりタダより高いものはねえのかよ!!?

「…………ハア」

「そう落ち込むでない。それに知識と魔力を与える以上それはどうしても必要なんじゃ」

「……………」

「そ、それにあれじゃ、ええと別に、我を殺さなくとも婿になれば・
・じゃなくて!! ある意味主は家族以上の繋がり・でもなく
て…………」

マオ、必死に弁解しようとしてるが話がどんどん変わっているぞ。
俺はその衝撃の事実凹む。そんなものになったら敵ばっか増えて
休む日すらなくなんじゃね? 殺人鬼だって休みたい日はあるんだぞ?

「……………寝よう」

俺はそう言って横になる。何かマオが慌ててたがんなもん知らん。
やがてマオも寝ることにしたのか。静かになった。聞こえてくるの
は木々がや草花が風で揺られる音と火が枝を燃やす音だけだった。
不思議といつもよりも静寂が心地よく感じた。

「……………響夜」

「・・・・・・・・」

「すまなかった。勝手にそんなことをして」

マオの声は少しだけ震えていた。俺はその声を聞いて静かに溜息を吐く。本当に此奴は・・・・・・・・。

「構わねえよ。こんな結果になったとはいえ、魔力といい知識といい世話になったからな」

実際もしマオ以外の奴らに出会っていたらこんな素直に話が通じたかどうかとも分からねんだ。その点でいえばメリットの方が遥かに大きい。

「だから謝んじゃねえよ」

「・・・・・・・・ありがとう」

俺はマオのその声を聞きながら眠りについた。



「・・・・・・・・」

まだ日の出か。俺は太陽の光を感じながら起きようとし、動けなかった。

「・・・・・・・・」

俺にしがみついているマオ。心無しか随分心地よさそうに寝ている。

「……マオ」

俺はしがみついてくるマオの肩を揺らす。だがマオは離れるどころか逆に力いっぱい俺の胴体を締め付ける。

「————ッ」

い、痛い。仮りにも魔王。なかなかの力だ。普段から力は抑えているのだろう。でなかったら俺の肉体など即座に潰れちまう。

「ま、マオ……起きろ。おい、マオ」

俺は少し強くマオの肩を揺らす。早くしろこのままだと潰れるから！

「……ん……」

俺の祈りが通じたのかマオはもぞもぞと動く。薄く目を開ける。

「おい、目を覚ませ」

「……ふわ……響・夜……おはよう」

そう言って俺から離れるマオ。助かった。なんとか俺の胴体はまっぷたつにならなくて済む。俺は内心でホッとしつつ起きようとする。

「……ん」

起きようとする俺にキスをしてくるマオ。………What？
その突然の行動に思わず思考が停止する。

触れ合う唇。触れ合っているほんの数秒がまるで何時間のように感じる。

「・・・・・・・・・・」

やがて唇が離れると共にマオは再び眠り出す。先程の光景に呆然とする俺。いや、別にキスが初めてなのだから言うわけじゃない。ただ会ってそこまで経たない奴に突然されたことは初めてだ。やがて意識が戻ってくる俺。マオの顔を見るがマオはまた心地よさそうに寝てるだけだった。

「・・・・・・・・・・意味わからん」

寝ぼけてたのか？俺は取り敢えず起き上がり荷物から朝食の準備をする。マオがいる分量も多いからな。やがて起きたマオは何もなかったかのようにまたはしゃいでいた。きっとあれは寝ぼけてやったのだろう。

俺はそう結論づけ荷物を整理するとマオと共にこの世界に来て初めての旅に出た。

マオがやけに元気だったのは余談だ。

どんな奴でも絶対に驚かないなんてことはないそれは殺人鬼も例外じゃなかった

感想、批判、ご意見があったらどうぞお願いします。

殺人鬼から見てもとても魔王には見えん（前書き）

「無性に切り殺したくなることってあるよね？」

b y 響夜

「我を見てそんなこと言うでない!!」

b y マオ

殺人鬼から見ても魔王には見えん

この世界にはスキルってのがあ^ルらしい。何でも通常ス^{キル}、特殊ス^{キル}、固有ス^{キル}ってのがあるらしい。右へいくほど珍しくその力も協力になるとか・・・。

何故突然こんなことを言ったのかそれは俺のスキルが分かったからだ。

固有スキル…想像形成

固有スキル…魔神の観察眼

固有スキル…鬼神の武勇伝

特殊スキル…魔王の加護

通常スキル…属性付加

ってのが俺のスキルらしい。上から説明していくと想像形成ってのは想像したものを魔力で創るってものらしい。ただしイメージが明確でない^と形があやふやになったり効果も小さくなるようだ。で、魔神の観察眼ってのは俺の殺人鬼としての能力、対象の筋肉の動きや体の構造が分かるらしい。鬼神の武勇伝は俺の身体能力のことだ^と思う。持ち主の能力をすべて底上げするらしい。魔王の加護は言うまでもなくマオが俺につけた後継者として証のせいだ。いちおう能力増強やら回復力増強の効果があるらしい。で、属性付加は持ち主の属性を武器やらに纏わせることが可能らしい。

スキルってのは経験で獲得するのもあれば最初からもっているもの、

あとは魔導具や神器で得られたりとか・・・。

そうそう神器ってのは魔導具のさらに上らしい。何でも神が作ったもので誰も造ることが出来ないものだとか・・・。これには特殊型と形状型しかなくマオ曰く

「神の創ったものに人間が格をつけるなどおこがましいと思ったのじゃろう。」

とのこと。

ま、これは俺が生きる上での知識の確認といったところだ。



「響夜く。まだなのか？」

俺達は今山の上を登っている。マオは知識を与える際に俺に不要だと思ったものは与えなかったらしくこの世界にはまだまだ知らないことがあった。例えば村や街の情報、魔物についてなんてのはマオは何を考えたのか俺に与えなかった。

「うるせえよ。だったら自分で歩け。」

マオはずっと本来の姿のままだが黒いドレス(?)しか持っていないらしく歩きづらいとかほざき俺が背負っている。山の中をドレスとか此奴は何を考えてやる。

「む、響夜。」

「分かってる。」

俺のスキルと普段から鍛え上げている聴覚は近付いてくる敵の足音を察知していた。俺は背負っていたマオを降ろす。それと同時に現れる魔物。虎、いや狼・・だろうか。額には一本の紅い角を生やし虎のような牙に狼のような体軀ただその大きさは恐らく4、5m程もあるだろう。その体は見るからに強靱で、恐らく銃は効かないだろう。

「気を付けるのだぞ響夜。あれはゴブリンどもより遥かに強いぞ。」

「あいよ。」

丁度良い。此奴で魔法つてのを試してやるか。俺は魔物の注意を引き付けながらマオから離れる。

「遊ぼうぜ猫スケ。まあ人語を理解できるのかは知らねえが。」

俺は魔物を試しにナイフで切り付ける。だがやはりその体に傷を付けることは出来ず魔物は自らの力を誇示するかのように吠える。うるせえんだよ。耳がいてえだろうが。取り敢えず注意は引き付けたので良しとする。

「集中・・・集中・・。」

「力とは支配するもの。」マオはそう言っていた。魔力を俺の意思通りに操り構成する。

「形成・・・呪・・・炎・・・空。」

三つの魔法と想像形成、属性攻撃を使う。想像形成で形を創る。そ

れに呪の属性を付加させる。さらにそれに炎の属性を被せて付加させる。あとはそれを空の魔法で操る。

「地獄車。」

ま、こんな感じか。空中に現れたのは刺を生やした二つの車輪。呪で癒せない傷をつけるという呪いを付け炎で車輪を包む。あとは空でそれを俺の意思で操る。空を使わずともできるが此方の方が敵の攻撃を躲せる。

「殺れ。」

あとはそれを放つだけ。車輪は目の前にいる魔物へと向かう。魔物はその車輪を迎撃しようとする。だが二つの車輪は魔物を挟撃するように立ち回る為魔物は必ずどちらかの攻撃を受けていく。魔物に刻まれていく傷跡そして傷は徐々に増えていき。

「・・・ガア・・・。」

魔物はもはや虫の息と言ってもいい状態だった。俺は懷からデザートイーグルを取り出す。確かに只の銃では傷付けられない。・・・なら魔法での銃ならどうよ。

「・・・。」

俺は銃弾を想像形成で構造を組み換え呪の属性を付加させる。そしてその銃弾を魔物に向けて放つ。放たれた銃弾は車輪に注目していた魔物に当たり。・・・爆発した。

「・・・これは中々良いものだな。」

俺はその結果に満足し車輪を消す。魔物の腹は爆発で飛び散り。傷跡からは焼け焦げた匂いがする。俺はその死体を観察して効果範囲を把握しておく。次使うとき自分ごと巻き込まれたら堪ったもんじやない。

「随分と上手く扱えたの。」

マオは俺に近づいてそう言ってくる。

「まあな、何か創るときに重要なのは腕だ。この場合何かを創るってのは要は想像すればいいんだろ？」

今まで退屈を紛らわせるのに色々やってたんだ。これぐらいは何とかが出来る。

「ただ、魔力を少し使いすぎじゃな。あれぐらいなら其処まで魔力を使わなくとも出来るぞ。」

「そこはこれからの練習次第だろ？」

「まあ。我に頼るがいい！」

そう言って胸を張るマオ。此奴は魔王よりも子供みたいな感じだな。

「……………」

俺は騒いでるマオを無視して先へ進む。マオも俺の後を慌てて付いてきた。

「街はまだかのう。」

「お前知らねえのか？」

「詳しい土地など我は知らん。」

マオはやけに誇らしげに言う。・・・それは自慢にはならねえぞ。俺は呆れながら先を歩いていく。

「響夜〜!!」

「うゝっ!？」

今何か人間が発するようなものじゃねえ言葉が出たがそれは無視だ。突然マオが俺に首に手を回して抱きついてくる。首が、首が苦しい。俺はこれ以上首が絞まる前にマオを支える。

「いきなり抱きついてくるんじゃねえ!」

「良いではないか。歩くのが辛いんじゃ。」

マオは頬を膨らませて言う。何だ此奴は。俺はマオを背負いながら山をさらに歩いていく。やがて森が広がり俺達は森から出た。

「・・・・・・・・。」

「お・・・・・・・・。」

マオは瞳を輝かせながら感嘆の声を上げる。俺も目の前に広がる光景を見る。そこに広がっているのは太陽の光を受け輝く海。そして

そこには港と街が広がっている。街は中々大きく多くの建物が見える。

「ほら！行くぞ響夜！！」

マオは俺の手を掴んで引っ張る。

「おい、待てそんな急に走ったら――」。――」

「ひゃっ！」

俺が言おうと思ったら案の定はマオは転んでしまった。見ればドレスも破けてしまいマオは涙目になっている。

「……ハア。」

泣きたいのはこっちだ。俺はコートを脱いでマオに渡す。

「ほれ、ついでに鞆の中の服やるからそれに着替えろ。」

こんな姿で街に行ったら絶対に目立つ。只でさえ此奴は容姿がいいんだ。余計に目立つちまう。マオは俺から衣類を受け取ると木の影へ入り着替える。

「……何でこんな疲れなきやいけないんだ。」

俺は深い溜息を吐いて空を見上げる。ああ、太陽がうざってえ。



「…………でかいな。」

着替え終わったマオを連れて俺達は街に入った。こうやって街の中を見るとやはり此処が異世界なのだと実感させられる。周りには耳や尻尾を生やした獣人、翼や牙を生やした魔族、長い耳が特徴のエルフ、それに毛むくじらのドワーフ、人間もいる。皆やはり俺の世界とは違うものを着て鎧や、冒険者のような服装の奴もいる。その多くが武器を装備している。おそらくこれが知識の中にあつた冒険者って奴なのだろう。

「響夜！あれは何だ？」

マオは街の中は初めてなのかそこら中に目移りしている。これだけなら御令嬢とかで済むんだろう。

「あ？……ありゃ街灯……か？」

この世界に該当なんてあつたんだな。魔導具か何かで制御してるのか？ただその数も少なく恐らく限りがあるのだろう。

「……………」

さっきからどうも視線が俺たちに来る。服装に問題があるんだろうが、こればかりは仕方がない。まずは金をどうにかしないとな。

「マオ。お前は金持ってるか？」

俺はマオに聞く。ここでもってないと言ったら……どうしようか。俺のスキルで創るか？

「一応持っているぞ!!」

元気よく言うマオを見て俺は負担が減ったことに内心喜んだ。

「そんじゃ先ずはお前の服を買うか。」

知識を与えられてなかったらこの世界の字なんて分かんねえし。硬貨の基準も良く分かんなかっただろう。マオには一応感謝しねえとな。

「いいのか？」

「構わねえよ。」

不安そうに俺を見るマオの頭を撫でて言う。今更俺の迷惑とか考えんじゃねえ。

マオは撫でられたのが照れ臭かったのか少し俯いて顔を赤くする。

「そうと決まれば先ずは服屋か・・・。」

どこにあるのかな。俺とマオは人混みの中を歩きながら探す。

「きよ、響夜。」

「あ？ ああ、悪い悪い。」

どうやらいつの間にか歩くペースが早くなっていたらしい。俺はマオとはぐれないよう歩くペースを落とす手を繋ぐ。

「響夜？」

「はぐれたら面倒臭いだろう。」

その行動を不思議そうに見てくるマオに俺は言う。何時の間にか随分お人好しになっちまったな。

「ほら探すぞ。」

「うむ！」

マオは満面の笑みで頷くと上機嫌で歩き出す。俺もその手を握りながらマオの隣を歩いて行った。



「♪」

満足そうな様子で歩くマオ。そして隣でマオの服を持ちながらぐったりとした様子で歩く俺。女の買い物というものをどうやら甘く見ていたらしい。マオは真剣な顔をして何着も試着し俺や店員に感想を聞いたりし、納得したら新しいものを探し出す。それが何時間もある。

「・・・疲れた。」

もうとつとと宿を探して休もう。俺はそう考えてマオに言う。

「マオ、そろそろ宿を探すぞ。」

確かこれだけ買い物してもまだ余裕があったな。お前の一応ってど

れ位だ？

「うむ、何処がいかのう。」

新発見だがマオの勘は異常なほどに当たる。服の時もそれを存分に発揮していたからな。

「むゝゝ、響夜！あそこじゃ！！あの宿がいいぞ！！」

マオは元気よく俺に言う。マオの指さす方向を見ればそこには一軒の宿屋。外装もそこまで悪くなく混んでいるわけでもない。俺はその宿屋へと歩いていくマオの後ろについて行った。

「すみません。」

対人関係はマオでは不安があるので俺が人を呼ぶ。こういうところでは一応敬語を使うぞ？これで外に閉め出されたら堪ったもんじゃない。

「あら？お客さんかしら。」

俺の呼び声で一人の女性が奥から現れる。・・・若いな、20代つてところか。

「どうしました？」

俺がそんなことを考えていると目の前にいる女性は首を傾げる。

「ああ、いえ、美しいものですから。」

「あら、そんなまた。そんなこと言っても負けてあげませんよ？」

俺の言葉に女性は笑って答える。っち、ダメだったか。勿論そんなことを声に出して言うわけもな、俺は肩を竦めて微笑した。

「.....」

痛い。足を踏むなマオ。止めろ。マオは不機嫌そうな表情で俺の足を思い切り踏み付ける。

「あらあら、彼女さんが御立腹ですよ。」

女性はマオのそんな表情を見て笑った。いや、こっちからしたら全然笑えないんだけどさ。

「ははは、済みません。一部屋お願いしたいんですけど。」

「はい。どれ位の滞在になりますか？」

「あゝ.....」

決めてねえな。俺が悩んでいるのを見て女性は言った。

「決めてないなら取り敢えずだけで、後から延長することもできますよ？」

「あ、じゃあそれで。えっと取り敢えず十日間程。」

「三食お付きになさいますか？」

「あ、はい。」

「でしたら銀貨七枚になりますね。」

女性の言葉に俺はマオの持っていた硬貨を支払う。すると女性は差し出された硬貨を取り代わりに一つの鍵を差し出してきた。

「ではお部屋の鍵になります。」

俺はそれを受け取ると未だに不機嫌そうな顔をしたマオを連れて部屋へと向かった。

「おい、何でそんな怒ってるんだ？」

「ふん、響夜など床で寝ればいいのじゃ。」

マオは俺の質問に答えず手から鍵をひったくると早々に部屋へと入っていく。

「……意味わかんねえし。」

俺はその行動に溜息を吐きながらも部屋へと入りマオの荷物を置く。中はそれなりに広く、綺麗に掃除されていた。こう考えてみるとこの世界に來ての初めてまともな寝床だな。俺はベッドで横なろうと近づくと

「ふん！」

ベッドの上にマオが乗って邪魔してきやがった。俺はもう一つのベッドへと向かおうとするが

「おい。」

そのベッドは先ほど置いたはずの荷物で占領されていた。此奴魔法使いやがったな……。マオは相変わらず不機嫌そうな面をしぷいっと顔を背ける。俺はその行動にこの日何度目になるのかの溜息を吐くと壁を背にして床に座り込む。

「……………疲れた。」

今までの疲労のせいか目を瞑ると強烈な睡魔が俺を襲う。俺はその衝動に抗えず深い眠りに落ちていった。

殺人鬼から見ても魔王には見えん（後書き）

感想、批判、ご意見がありましたらどうぞ送ってください。

殺人鬼と魔王は色々と初めてのことに戸惑った（前書き）

「予想した通りの所だな。」

b y 響夜

「賑やかなのじゃー!!」

b y マオ

殺人鬼と魔王は色々と初めてのことに戸惑った

おはよ・・・太陽が見えねえ。目覚めて最初から躓くとは如何なものか。ちよつと太陽に文句を言いたくなった。余計な事を考えていたら俺の意識は完全に覚醒し大きな欠伸と共に起き上がろうとし、止まる。

「・・・・・・・・デジャブ。」

もういいよこのネタ。俺に抱き着いて眠っているマオ。お前は餓鬼か。そう思ってしまう俺は悪くはないだろう。

「・・・・・・・・ベッドがあるのに何故俺と同じ床で寝るんだか。」

寒いし硬いし良いことなんて一つもないぞ。それとも人肌が恋しいのか？俺はそんなことを考えながらマオを見る。

「安心しやがって・・・。」

もしこれが他の奴なら襲われていたかもしれないというのに。俺はそんなことを考えてマオの頬を引っ張る。

「・・・・・・・・柔けく。よく伸びるな。」

俺は柄にもなくマオの頬で遊ぶことに夢中になってしまっていた。思わずハッと意識を取り戻しながらも手はその行動を止めない。

「・・・・・・・・平和だな。」

よく考えればここまで平和に過ごせたことなんて一度もなかった。普段からヒトを殺し、恨まれ追われの俺に休息など一日あれば良い方だった。俺はそう考えマオを一瞥する。

「ホント・・・いい寝顔だよ。」

二度寝なんてのも良いか。俺はそう考えて横になる。不思議と睡魔はすぐに俺を襲い、俺はまた直ぐに眠りに落ちた。



「・・・・・・・・ん。」

もう朝か・・・・？我は眩しい朝日を浴びながらその目を開く。しかし温かいな・・・・。我はその温かさが心地好くとても起きる気にはならなかった。

「・・・・・・・・響夜？」

そういえばあやつは何処におるのじゃ？普段から我よりも早く起きている男の名を呼ぶ。しかしその声に答える返事はなく、ただ静寂だけが広がっている。・・・・もしかして何処かに行ってしまった？そんなことを考えてしまった我は突然不安に襲われた。我の姿を知っても態度を変えず、励ましてくれる男。何だかんだと言いながらも私の頼みを聞いてくれる御人好しな男。あやつがいなくなるなと嫌じゃ！！眠気など吹き飛び我は堪らずに起き上がろうとし、止まった。

「・・・・・・・・響夜。」

目の前にあるのは先程まで考えていた男の顔。朝日を浴びながらその顔は心地良さそうだった。

「・・・・・・・・ハア。」

それを見た瞬間我は安堵する。それと同時にそれ程にこの男のことを想っていることに自分自身驚きを隠せなかった。

「・・・・・・・・。」

白髪赤眼というこの世界でも珍しい容姿の男。思わずその髪を撫でていると、そういえばこやつのことなど我は何も知らないということに気が付いた。

「・・・・・・・・殺人鬼のう。」

とてもではないが今のこやつ顔を見ているととてもそのようには見えない。・・・・・・・・戦闘中はそう思えるだけのものがあるが。現にこやつが我に襲ってきた時など、正に鬼気迫るものがあった。我が人間に気後れするなど初めてのことじゃ。・・・・・・・・それだけこやつの実力が高いということなのかもしれないが。

閑話休題

兎に角我はこやつのことなど全く知らない。

「・・・・・・・・よし。」

こやつのことを本人に聞いてみよう。ただしその為には今よりもず

っと親密な間柄にならなくては。我はそう決心すると起き上がろうとする。

「・・・・・・・・・・。」

やはり無理じゃ。他の生物との触れ合いなど長らく感じなかったしこやつ的心声は聞いてて落ち着く。我は再び響夜に抱きつくと目を瞑る。もう少しだけこの至福の時を感じたいと思いながら。



「・・・・・・・・・・。」

こんにちは太陽。今度はちゃんと見えたか。俺はそんなことを考えながら未だに抱き着いて寝ているマオを引き剥がす。今度は抵抗しなかったので良かった。もうあんなことは避けたいからな。

「・・・・・・・・・・腹減った。」

そういえば飯も付くんだったか。俺はそれを思い出すとシャツをとズボンを着替える。一応書置きを置いておくか。俺は部屋に備え付けてあった羊皮紙とペンを取ると書置きを残す。この世界の文字は初めて書くから少しぎこちないが問題はないだろう。マオから知識を貰って良かった。これならあの痛みと引換えだったとしても許容範囲内だ。俺は床に眠っているマオをベッドに運び部屋を出る。

「・・・鍵はいいか。」

仮りにも魔王。何かあっても心配するのは相手の安否だろう。俺はそう結論づけ階段を降りて一回のバー（というか飲食店？）に顔を

出す。

「あら？今起きたのかしら？」

俺が降りると偶然にも昨日の受付の女性が丁度食器を運んでいた。

「あ、はい。少し疲れが溜まっています。」

主に魔王の世話で。そんなことは口が裂けても言えるわけがなく俺は愛想よく笑って誤魔化す。

「あら、夜の方でかしら。」

この人は笑顔で何つうこと言ってんだ。俺はその言葉に思わず苦笑する。

「違いますよ。俺と彼女はそんな関係じゃありません。」

俺がそう言うのと女性はふふふと笑う。

「ふふふ、そうでしたか。お似合いだったのでついそうなのかと。」

このヒト商売上手いなあ。などと考えながらも俺は再び苦笑する。

「それじゃお昼にしますか？」

「ええ、お願いします。」

俺は愛想よく笑って返事をする。女性もその言葉を聞いて厨房へと入っていった。

「……何か職でも探した方が良いのかねえ。」

俺はこれからのことを考えて頭を悩ませる。適当に街の外にいる奴らから路銀を筆記取るのも良いがそれだと来る日と来ない日があるから却下。だとすると何か依頼でも受けて働くかねえ。マオの知識にはそういうのがないから詳しくは分からない。

「……………どうするべきか。」

俺の横に置かれる水の入ったコップ。見ればさっきの女性が微笑みながら持ってきていた。

「どうぞ。」

「ああ、済みません。」

「いえいえ、それよりも何やら悩んでいるようですが。」

この店のことだとも思ったのか女性は少し心配そうな表情をする。

「いえ、ちょっとこれからについて——」

そこで俺は気付いた。このヒトに聞けばいいんじゃないかね？と

「すみません。何か良い働き場所ってありませんか？」

俺の言葉が意外だったのか女性は少しキョトンとする。

「働き場所、ですか？」

「ええ、何分旅人でして。今までは何とか頑張ってたんですがそろそろ路銀も尽きかけてきてしましまして……。」

「冒険者ではなくてですが？」

「？ええ。」

俺は少し首を傾げる。

「ああ、いえ、その身のこなしというか、隙がないようだったので。」

「……この女性何者だ？いくら冒険者達が泊まるのが多いとはいえ隙とかつてのはそうそう分かるもんじゃねえだろ。」

「……まあ外は危険でしたから。それなりに実力がないと旅なんて出来ませんよ。」

取り敢えず怪しまれたくはないからな。俺は肩を竦めて答えた。女性も何処か納得したのか頷く。

「そうでしたか。……ああ、それで働ける場所ですよね？」

女性はそう言って少し悩む仕草をする。

「……そうですね。やはり一番メジャーで簡単なのはギルドに冒険者として登録することじゃないでしょうか。」

「ギルド、ですか？」

「ええ、やはり依頼が普段から数多く来ますし、ランクが上がれば知名度や依頼の報酬も大きくなりますから。」

「……ん。」

ギルドか……。まずはマオと相談した方が良いか。……よく考えればあいつのことをここまで気に掛ける必要もないよな。

「有難うございます。連れと一緒に考えてみますよ。」

「ええ、頑張ってください。」

女性はそう言うのと厨房へと戻った。この宿は中々いいな。やはりマオの勘は伊達じゃない。俺はそう考えながらコップに手を伸ばす。

「きょ〜や〜〜!!」

「……またうるせえのが。」

俺はその声に肩を落とす。

「五月蠅いぞマオ。」

俺は階段を騒々しく降りてくるマオを注意する。マオは俺の顔を見た途端に笑顔を見せる。そして俺に集まる視線（主に嫉妬6割殺意7割）。見た目だけなら美女なんですがねえ。俺は思わずため息を漏らす。

「響夜！酷いではないか！？昼食に行くなら何故我を起こさない！

「！」

「・・・あゝ？あんまりにも良い寝顔だったんでな。起こすのが忍びなかったんだ。」

俺は適当な言葉を口にしてその場を乗り切る。マオはまだ不服そうな表情をしていたがそれも一時、飯が運ばれてくればまた笑顔になるだろう。

「はい。出来ましたよ。」

マオの愚痴に適当に返事をしていると先程の女性が料理を運んでくる。

「済みません。」

「いえいえ、これが仕事ですから。」

俺は運ばれてきた料理をマオの前に持っていく。

「？」

「ほれ、先に食っとけ。」

「でも・・・。」

「文句言うな。」

「そうですよ。こういう時は素直に受け取らないと。」

女性の援護射撃にマオは料理に手を伸ばす。

「……………おいしい。」

「そう言ってくれると嬉しいです。では貴方の分も・・・」

女性はそう言って一礼すると再び厨房に戻った。

「……………いい人だな。」

「うむ、優しいのだ。」

流石にあのヒトは人として見るか。中々面白いしな。

「…………響夜も、ありがとう。」

「どういたしまして。」

頬を僅かに赤らめて言うマオ。だから切りたくなっちまうから止める。

「マオ、この後なんだが。」

「む？」

マオは手を止めて俺の話を聞く。

「ギルドって所に行ってみるぞ。」

「ギルド・・・ああ、冒険者の。」

「金は必要だからな。」

マオは納得したのか頷いて再び料理に手を伸ばす。俺はその様子を眺めながら自分の料理が来るのを待っていた。



あの後ロシエル——あの女性の名前だ。あの後聞いた——によるとギルドはすぐ近くにあるらしいので俺とマオは今ギルドに向かっていた。よく分かんがロシヤルから招待状を貰ったのでこれを渡せば良いらしい。ロシエル、お前はマジで何者だ？

「響夜！見えてきたぞ！！！」

マオははしゃぎながらギルドを指差す。ここに来るまでも大変だった。マオの容姿が目立つから自然と人々の視線が集まる。そしてその視線は隣にいる俺にも向かうわけで……。切り殺したくなつた。

「あんまりはしゃぐな。」

俺はマオにそう言いながらギルドの扉を開ける。ギルドの中は沢山の種族の奴らがおり賑やかだった。真っ直ぐ受付を目指す俺たちに注がれる好奇の視線の数々。俺はこの世界じゃコートは外套として誤魔化せられるかもしれないがそれ以外は这个世界じゃないものだ。それにマオは貴族といった方が言いからな。いや、貴族じゃなくて王か。・・・一応。

俺はそんなことを考えながら受付嬢の下に行く。

「すみません。」

「はい、本日は当ギルドにどのような御用でしょうか？」

「実は冒険者として登録したいんですが、どうすればいいんでしょうか？」

「あ、はい。それでしたらこの用紙にお名前とご年齢、後は現在の住居の番号をどうぞ。」

住居の番号・・・要は住所か。

「済みません。招待状を貰ったんですが。」

俺はそう言ってロシエルから貰った招待状を渡す。受付嬢は差出人を見た後中に封筒されている手紙を取り出すと一言断って奥へ入っていた。

「・・・・・・・・。」

「あれは何なんじゃろうな？」

マオはそう言って受付嬢の入っていった扉を見る。いや、それはいいが。

「何故手を繋ぐ。」

俺はマオの行動に少し混乱していた。ここは混んではいいえ別にはぐれるような所ではないし何も手を繋ぐ必要はないだろう。

「良いではないか。」

そう言って更に密着してくるマオ。止めろ暑苦しくなる。俺が露骨に嫌そうな顔をしてマオの接近を防いでいると奥から受付嬢が戻ってくる。

「済みません。」

「ああ、いえ。問題ありません。」

俺は外面で愛想良く笑う。

「実はギルドマスターに御会いしていただきたいんですが……。」

「……は？」

何？もしかしてマオが魔王だとバレたか？それともそれ以外で何かやっちゃったか？

「いえ、特に何か問題があったわけではないんですが。只あの招待状のことで……。」

ロシエル、テメエ何渡しやがった。俺はロシエルへの恨み言を吐きながら受付嬢の後を付いていきギルドマスターの元へと向かう。

「マスター。お連れしました。」

「うむ、入ってくれ。」

ドアの向こうから老人の言葉が聞こえる。受付嬢はドアを開け俺達

を招き入れると早々に出ていった。残された俺とマオの二人は取り敢えず椅子に腰掛けている老人をみる。

「む、主達が紹介にあった。」

「響夜です。」

「マオだ。」

「そんな畏まらなくとも良い。」

その一言で俺は敬語をやめる。

「そんじゃ、この口調でいかせてもらおうわ。」

俺の態度の豹変ぶりにマスターは少し驚き声を上げて笑う。

「ホホホホ！！中々面白い奴じやのう！」

老人は俺たちに席を勧める座ったのを見ると話し始める。

「まずはロシエルからの招待状じやのう。あやつには所謂審査員というものをやってもらっているのじやよ。」

「審査員？」

マオは首を傾げて言う。

「うむ、ギルドとして十分な実力があるであろう者たちを見定めるのじや。これは各宿屋に一人はいるのう。」

成程。どうりで身のこなしがどうか言ってたのか。

「それで大丈夫と判断されたものに招待状を渡すのじゃ。希望次第ではある程度のランクから始められるぞ？」

「・・・いや、最初から地道に進めていくから良い。」

「いいのか？」

「ああ。」

この世界の基準を図るのに良いし魔法の練習台になるからな。俺の隣でマオも頷く。どうやら俺に同意らしい。

「では、あとは受付嬢から聞いてそれで登録完了じゃ。それ以降はランクに応じた依頼が受けられるぞ。・・・そうそう、たまには僕からも頼むことがあるかもしれないからその時は頼むぞ？」

老人のその言葉を聞きながら俺達は部屋を出る。受付でギルドカードを貰うと俺達は依頼を探し始めた。

ランクにはEとAがあり、その一つ上にS、SSとランクがある。Sというのは殆どいなくSSなどそれこそ両手で数えられるかどうからしい。

「響夜。これはどうじゃ？」

そう言って俺に見せてくるのは一枚の依頼書。そこに書かれているのはゴブリン達の討伐というものだった。

「数は・・・13か。」

まあ、練習だしな。俺が頷くとマオはそれを受付嬢に渡してきた。

「ほら！行くぞ響夜！！」

元気いっぱいと言うマオ。その様子を眺めながら俺も後に続いていく。こうして俺達の初めてのギルド生活が始まった。

殺人鬼と魔王は色々と初めてのことに戸惑った（後書き）

感想、批判、ご意見があったらどうぞ送ってください。

殺人鬼に出来ず魔王に出来ること（前書き）

「…………ああ、おもしれえ。最高にハイな気分だクソ野郎。」

b

V
響夜

「我の邪魔をするな!!」

b y
マオ

殺人鬼に出来ず魔王に出来ること

ギルドの依頼で俺達は今ゴブリンの討伐に来ている。そこまで苦戦することは無いと思うが油断すれば何があるか分からない。既に俺は此処に来てマオという規格外と会っているのだから。俺は適度な緊張感をもって目的の場所へと歩いて行く。・・・マオを背負って。

「・・・・・・・・おかしいだろ。」

「何がじゃ？」

俺に背負われた状態でマオは首を傾げ聞いてくる。

「・・・・・・・・ハア。」

「？」

俺の様子にマオは相変わらず首を傾げたままだった。地面に落とすてやろうか？

「マオ。そろそろだから降りろ。」

「・・・・・・・・うむ。」

マオは少し不服そうな顔をしたが素直に俺から降りる。

「ゴブリンは穴の中にいるんだっけか。」

「うむ、奴らの住処は大体掘って作られた穴の中じゃ。狩りにでも行かない限りは大抵住処にいるの。」

俺達がそんなことを言いなが進んでいくと拓けた場所に出る。そこから見えるのは一つの大きな穴。・・・が5つ。

「・・・・・・・・13、だよな？」

「・・・・・・・・13・・・の筈じゃ。」

俺の言葉にマオも自信を失う。・・・だよな。あれ、どう見ても40は超えてるよな。俺達はゴブリン達の様子を見る。

「・・・・・・・・？」

「どうしたのじゃ響夜？」

「いや・・・奥の方に何か建物が見えるからよ。」

俺の指さした方向。そこに見えるのは神殿のような建物。だが半壊して建物の殆どが土砂に埋まっていて生物が住んでいる様子もない使われているようにも見えない。

「・・・・・・・・。」

「響夜。気になるのは分かるが今はゴブリンが先じゃ。」

「ああ。」

俺は神殿からゴブリン達へと視線を戻す。ま、さっさとやるか。

「・・・・・・・・。」

俺のスキル想像形成。これはよく考えればこの世界の常識を覆すようなものだ。マオから聞いた。この世界は魔法を唱えるとき詠唱が必要になる。上位の奴らは詠唱破棄で無詠唱のまま魔法を使えるがそれも限度——マオのような規格外除く——がある。そして最初から存在している魔法に従った構成で魔法を放っている。

だが俺の想像形成は詠唱を必要とせず俺の想像で創られるからこの世界には存在しないものだ。ようは・・・

「俺にしか創れないただ一つの魔法だ。」

俺は火の魔法で巨大な炎の蛇を創る。

「いってこい。」

俺の合図と共にゴブリン達へ向かっていく。一匹のゴブリンがその姿を見て敵襲と悟るがもう遅い。目の前にいるゴブリン達を飲み込む。そこに来て漸く他のゴブリン達も動き出す。

「行くぞマオ。」

「うむ。」

炎の蛇によって焼け焦げた大地の上に俺達は降り立つ。

「中々のものじゃな。」

マオは周囲を見てそう呟く。

「まあな、今回は炎と追尾性だけにしたからな。」

俺達がそんなことを言っていると炎の蛇が突然凍り、砕け散る。

「……ゴブリンメイジ。」

「どれくらいだ？」

「身体能力はそれほどじゃないの。ただ知能が高く魔法が使えるの。」

身体能力がそこまでじゃねえんなら奴に魔法を撃たせなければいいか。俺はそう考えるとゴブリンの群れへと駆ける。

「半分任せた。」

「了解じゃ。」

その言葉と共にマオはゴブリンの群れへ次々に魔法を放つ。

「……容赦ねえな。」

天高く吹き飛ぶゴブリン達を見て俺は思わず同情してしまう。

「ギャギャッ!!」

「邪魔。」

飛び掛るゴブリンの顔面に拳を入れると横たわるゴブリンの頭を踵

落として砕く。広がっていく血の臭い、俺はその臭いで自分が興奮していくのが分かる。

「・・・堪んねえ。堪んねえよ。」

俺は懷からデザートイーグルを取り出す。

「オラオラオラァ！！派手にブチまけろやぁ！！」

放たれた銃弾は針となってゴ布林達を襲う。だが俺がそれだけで終わりにする訳がない。針が刺さったゴ布林達は叫びだし次々に仲間を襲う。幻覚作用。それがこの針に掛けた呪の効果。仲間を未知の敵と錯覚させ混乱させる。仲間同士で殺し合うゴ布林。それを見た俺は思わず肩を震わせて爆笑する。

だからだろう、俺はゴ布林メイジからの攻撃に気付けなかった。

「――」

俺はその攻撃で手に持っていたデザートイーグルを弾かれる。そして同士打の中を抜けて俺に飛び掛ってきた5匹のゴ布林。

「――しまっ！」

俺はそう言って左手に持った黒い塊をゴブリンの額に押し付ける。

「た訳ねえだろ？」

俺は笑いながらグロックの引金を引く。放たれた銃弾は眉間を撃ち抜き。俺は向かってきていたゴ布林共を次々に撃ち殺していく。

「ほらほらどうしたあ！？もっと死ぬ気で来いやあ！！」

俺は次々に倒れていくゴブリンを見て叫ぶ。

アイアンメイデン
「鋼鉄の処女」

その言葉と共にゴブリンメイジの背後に鋼鉄の拷問器具が出現する。ゴブリンメイジはそれに気付く暇すら無く中へと押し込まれ閉じ込められる。その瞬間ゴブリンメイジの絶叫と血が漏れ出だした。

「……………堪んねえ。」

俺はその光景を見て満面の笑みを浮かべる。最高だ。まさかこれも再現可能とは…………。

「……………っち、もう終わったか。」

辺りを見れば周囲にあるのは屍ばかりあと数匹程残っているがそれもやがては同士打で死ぬだろう。…………念には念を入れるか。

「燃やせ。」

俺は周囲一帯に炎の矢を降らせる。残りもこれで焼け死ぬだろう。俺はそれを確認するとマオを見る。

「……………まだ終わってないか。」

魔王ってのは滅多に戦えないのか？随分顔が輝いているが。

俺はそれを見ると気になっていた神殿へと足を運ぶ。何かありませんかねえ。

「しかし随分古びてるな。」

どれだけ昔のものなんだか。俺は何時でも戦闘が出来るようにグロツクとデザートイーグルを手にとっておく。

「玄関でも作るか。」

俺は崩れないように調節して弾丸を放つ。弾丸は神殿の外壁にぶつかる。と大体俺の予想通りの規模で爆発する。

「お邪魔しまーす。」

俺は出来た玄関を通して中へと入って行った。



「ふはははは！！逃げ回るがいい！！」

我は手当たり次第に近くにいる敵を吹き飛ばしていく。久しぶりに手加減無しで戦えるのだ。これぐらいは許してもらいたいものじゃ。

「さあ、次は何で吹き飛ばそうか。」

闇で影を操るのもいいの。自分の影に刺されて死ぬ姿というのは酷く滑稽であろうな。我はそう考えながら魔法を発動させる。だが――

「GYAAAAAAAAA!!!!!!」

「む？」

突然空から咆哮が聞こえる。そして突風が吹き荒れると共に聞こえる翼を羽ばたかせる音。

「G R A A A A A ! ! ! !」

空を見ればそこには先程まではいなかったはずの———というかこんな所に現れないはずの———巨影。それは全身を覆う赤い鱗、二枚の翼、そして鋭い目付き。恐らく種としては代表格と言っても過言でない生物。

レッド・ドラゴン
「赤竜」

我はその姿を見て不敵な笑みを浮かべる。まさかこんな所で出会えるとは……。

「……響夜は何処にいるのかのう。」

我は響夜の姿を探す。けれど何処を見ても響夜の姿はなくあるのはゴブリン共の死体だけ。

「む……置いてかれたかのう。」

我は証を使って響夜が何処にいるのか探す。……神殿？

「あやつ先に行きおったな。」

我は頬を膨らませて言う。だがそれも束の間だった。

「もう一体ドラゴンの魔力を感じるの。」

感じるのは・・・神殿。響夜がいる場所も・・・神殿。

「不味い！」

幾ら響夜でも人間。それもこの世界に来たばかりでドラゴンと戦うなど無謀以外の何物でもない。我は真剣な表情になると目の前の赤竜を睨み付ける。

「悪いが、早々に死んでもらおうぞ。」

我はその言葉と同時に魔法を放った。



「オオオオオオオオオオ！！！！！」

俺は目の前にいる化け物に弾丸の雨を浴びせる。だが化け物は多少怯んだものの俺へ突進してくる。

「クソっ！」

俺はその突進を何とか躲すと今度は背中へ弾丸の雨を浴びせる。だが化け物はその攻撃も物ともせずに俺を向く。そこで漸く俺は目の前にいるのが何なのか分かった。

「・・・竜・・・の骨？」

そこにいたのは全身が骨で出来ている竜の形をしたもの。肉や皮も

なく僅かに浮遊しているがその正体は分からない。

「GRUOOOOOOOOOOOOOOOOOO!!!」

竜は吠えるとその口から黒い光線を放つ。

「うおっ!？」

その攻撃を何とか躲すものの俺の足場は崩れ身動きが取れなくなる。
竜はその俺に向かって右の爪で引き裂こうとする。

「—————」

その攻撃を俺は全身を使って受け止める。その衝撃でピキッち嫌な音がするが今は構いやしねえ!!

「————ッ!」

竜の手を受け止めていた俺に突然衝撃がくる。

「…………ガッ…あ…。」

よろめきながら俺が見たものは尻尾。竜はその尻尾を使って俺を叩いたらしい。それにより体制を崩した俺を竜は一気に圧潰す。

「ぐ…………お…………。」

俺は想像形成でオブジェクトを竜と地面の間に創り出すと隙間から抜け出す。それとほぼ同時に竜はオブジェクトを破壊する。

「あ・・・ぶねえ。」

ひしゃげたオブジェクトを見て俺は冷や汗を拭う。今のは今まででもベスト5に入る程の恐ろしさだった。俺は鞆から手榴弾を取り出すと竜へと投げる。

ドゴォォン！！！！

手榴弾は見事に竜へぶつかり爆発した。俺は土煙の中にいる竜を睨み付ける。・・・流石に少しは傷が付いたよな？やがて土煙が晴れたそこには顔の半分を破壊された竜の顔。その瞳には確かな憤怒の色が見えていた。

「・・・ざまあ。」

俺は口元に笑みを浮かべて言う。それが気に障ったのか竜は尻尾で俺へと強烈な一撃を放つ。俺は躲そうとするが肩にはしった激痛で動きが鈍る。

「-----か、はっ！！！！」

その一瞬の隙を逃すことなく竜の尻尾が俺の腹に直撃する。骨の折れる嫌な音と共に俺はその衝撃で壁へ吹き飛ばされる。

「ゴボツ・・・」

壁に叩き付けられた俺は思わず咳き込む。口のなかには血の味が広がり床を赤く染めている。

「・・・舐めてんじゃねえぞ。」

俺はその痛みを無視して立ち上がる。

「ぜってえ殺してやるよ。」

俺は再び銃弾の雨を降らせる。今度は只の銃弾じゃねえぞ糞が！放たれた銃弾は次々にその効力を発揮する。あるものは爆発し、あるものは針となって竜を襲う。

「死ね死ね死ね死ね！！！」

俺の銃弾を浴びながらも竜はその闘志を燃やして突撃してくる。既に竜の体は半分近くがボロボロになり普通なら幾ら骨の体といってもとても動けるようには見えないだろう。

「……ファック畜生。」

俺の体はもう動かねえ。最後の悪足掻きで引金を引き続けているがもうこの距離までこられたら倒しても俺に突っ込んでくるだろう。俺は最後に不敵な笑みを浮かべ竜に叩き潰された。



「……」

体が……動かねえ。竜に叩き潰された後、俺は地下へと落下した。上からは勝ち誇ったような竜の咆哮が聞こえる。

「……けんじゃねえぞ。」

俺は気力で床を這い蹲って動く。

「・・・ヤロウ、絶対痛い目みしてやる。」

ぼんやりと俺が進む方向に二つの光が見える。

「・・・あ?・・・。」

俺は這い蹲りながらもその光がある台のへと上り、光に手を伸ばした。

「-----」

その瞬間、俺は確かに何かを掴んだ。

「・・・十字架?」

俺が掴んだものは漆黒に輝く十字架。それは突然光だしやがて光が収まると共に十字架は消えていった。そしてその次の瞬間俺から溢れ出る何か。それは俺の全身を駆け巡りその効果を表した。

「・・・は?」

俺から消える痛み。みれば全身にあった傷も綺麗さっぱり消えていた。

「・・・。」

これは治ったと思って良いのか?俺は取り敢えず全身を確かめるように動かす。

「五体満足。・・・魔導具か何かか？」

後でマオに聞いておく必要があるな。俺は立ち上がると隣にあった台の上で光るものを見る。そこには一本の銀の鎖があった。

「・・・これも魔導具か？」

俺はそれへと手を伸ばす。するとさっきの十字架同様鎖も光だし今度は俺の右手に巻き付く。

「・・・・・・・・。」

俺はスキルの魔神の観察眼を発動させる。これは鬼神の武勇伝と違い常時発動ではないからいちいち発動させる手間が掛かるのが面倒だ。

神器…グリモア・ハート悪魔の心臓

神器…グレイブニル神殺しの鎖

・・・神器ですか。もしかして上にいた竜ってのはこれの門番か何かか？

「・・・・・・・・これはひどい。」

思わず効果を見た俺は頭を悩ませる。

悪魔の心臓…グリモア・ハート所有者に超再生能力を身につける。肉体が一部でも残

っていれば再生を可能とする。

神殺しの鎖^{グレイブニル}：対象へと鎖を放つ。鎖は自由に操ることができ、本人の魔力の分だけ数を増やすことが可能。

神殺しの鎖は兎も角、悪魔の心臓^{グリモア・ハート}って、俺強制的に人間止めさせられかけてる？これなんて呪い？

「……ジーザス。」

俺はそう言いながらも上へと神殺しの鎖は飛ばす。もしかしたらマオがどうにか出来るかもしれないからな。神殺しの鎖^{グレイブニル}が天井に突き刺さると俺はそれを持って一気に壁を駆け上がる。

「よう、蜥蜴野郎。」

俺は目の前にいる竜に声を掛ける。竜は俺が生きていることにキレたのか。宝を取られたことにキレているのか知らないが一際大きく咆哮を上げる。俺はそれを見て笑った。

「上等。今の俺に勝てるもんなら殺ってみやがれ。」

「今の俺は……最高にハイな気分だぞ。」

その言葉と共に俺と竜の第二ラウンドが始まった。

殺人鬼に出来ず魔王に出来ること（後書き）

感想、批判、ご意見がありましたらどうぞ送ってください。

殺人鬼だって傷つく時はある……たぶん（前書き）

「……人間は止めたくなかったな。」

b y 響夜

「我から見れば主はまだ人間じゃ!!」

b y マオ

この程度の炎で！

「ハアッ！」

我は向かってくる炎へ黒い閃光を放つ。それは向かってくる炎を飲み込み赤竜へと迫っていく。赤竜もそれを見て無理だと悟ったのだろう、回避行動にでるがすぐそこまで迫っていた閃光を完全に躲せるわけもなく赤竜は脇腹を挟まれた。その痛みからか赤竜はこれまでもよりも一際大きな咆哮を上げると我へ次々に火炎弾を放つ。

「ふん！貴様程度で我を殺せると思うな！！」

我はそれを黒い閃光によって消し去る。竜もそれには警戒していたのだろう余裕をもって躲す。

「……無駄じゃ。」

だが竜は一つ勘違いをしていた。それは――

「我が連続で放てないとも思ったか。」

我は竜の回避した場所へ次々に閃光を放つ。それは竜の体を次々に消し去っていく、やがて竜は塵すら残さずに消えていった。

ドガァン！！

その音を聞いた我が神殿を見れば外壁の一部が破壊されていた。そしてやがて聞こえてくる咆哮。気づけば我はその場所へと走っていた。

「・・・・！？」

だが我の行手を阻むように何体ものゴーレムが土から現れる。

「くっ！何故ゴーレムが！！」

こやつらは魔法使いが造るもので自然発生するようなものではない。
まさかあの神殿に魔法使いが！？

一瞬その考えが頭を過ぎったがその考えを放棄する。竜を従える魔法使いなど聞いたことがない。

「人形の分際で！」

我は目の前にいるゴーレム達を次々に泥へ還していくが数が多い。
奴等は再び泥から現れると此方へ殺到する。

「くっ、響夜が心配だというのに！」

我は目の前のゴーレム達に最大級の魔法を放った。



「・・・・。」

外が五月蠅い。マオはまだゴブリン共と遊んでるのか？

「GURROOOOOOO！！！！」

「おっと、悪いな。お前が先だった。」

俺は目の前にいる竜を見て笑う。

「出来る限り長持ちしてくれよ。・・・実験が出来なくなる。」

俺はその言葉と共に竜へと駆ける。竜はその右手を振り上げ俺を迎撃しようとするが――――

「グレイプニル！」

その振り上げた右手に絡みつく何十本もの鎖。それは竜の動きを阻害し隙をつくる。

「オラァ！！」

さっきの戦闘。此奴は異常なまでの防御力を誇っている。恐らくそれが此奴の強みなんだろうが。

「至近距離の爆撃はどうだ？」

俺は想像形成で創り出したパンツァーファウストを竜の胴体へ放つ。それは奴の骨を砕き俺をも巻き込んで爆発した。

「――――ッ」

俺を襲う火炎と激痛。俺の右腕は爆発に巻き込まれ吹き飛ぶが瞬時に再生した。それだけじゃない俺にあった火傷の痛みも直ぐ様癒えていく。

「・・・やっぱり死なないか。」

恐らく俺の体は一瞬で全身を消し飛ばされない限り復活するのだから。俺は自分の体を冷めた目で見る。

「……人間は止めたくなかったな。」

ポツリと呟く言葉。それは復活した竜の咆哮でかき消された。

「今遊んでやるよ。」

俺はそれを見て再び笑みを浮かべる。竜は俺へと勢いよく迫るがそう簡単に通すかよ。

「これでもちっと冷静になれや。」

俺は竜の頭上に何十個という巨大な石を創り奴の頭へ落下させる。その衝撃によって奴は思わず頭を床へ打ち付け転がりながら止まった。

「続いてはこれだ。」

俺は再びグロックとデザートイーグルを取り出す。奴は起き上がるうとするがそれを俺は神殺しの鎖グレイブニルで封じた。

「俺は足が遅くてよ。皆に置いてかれちまうんだ。—————テメェもその苦しみを味わえ。」

俺はその言葉と共に銃弾を放つ。放たれた銃弾は竜の骨へ突き刺さっていく。すると竜は苦悶の声を上げた。見れば竜の周囲には紫色の何か文字が書かれた帯状のものが幾重にも纏わり付いていた。

「消え失せろ。」

放った。放たれた槍は黒い輝きを放ちながら竜へと刺さり

カシャアアン

砕けた。それと同時に竜に異常が起きた。竜を構成していた骨に亀裂が入り塵に変わっていく。

「G U G A A A A A A A A A A A A A A A A ! ! ! ! !」

竜の咆哮も次第に小さくなっていき、やがてそこには何も残らなかった。

「盛者必衰の理ってな。」

今にはその生物の持つ魔力の分だけその体を塵にする。という呪いが掛かっていた。効くかどうかも怪しかったが、何とか効いて良かった。実際あれはあそこで碎けるようには創っていなかったんだが・・・

「魔導具の生成ってのは難しいな。」

正確には神器に近い魔導具だが。俺が竜のいた場所を眺めていると

ドガアン!

「うおっ!」

突然壁が壊れへんてこな・・・ロボット？の様な物が飛び込んでくる。俺はその光景に呆然とし・・・

「・・・・・・・・ぶおっ!!」

よく分からない声を上げて潰された。そして誰かが飛び降りる音。

「響夜ー！ー！！何処におるのじゃー！ー！！！！」

・・・・・・・・マオ、これはテメエがやったのか。俺は何かロボットのような物の下から抜け出すとマオを見る。

「響夜！無事じゃったのじゃな!!」

「テメエのせいで死ぬかと思ったわ。」

俺は笑顔のマオの頭を掴むと思い切り力を込める。

「痛い、痛い！痛いのじゃ響夜！」

マオは俺の手から抜け出すと頭を抑える。っち、これからだったのによ。

「で、テメエは今までずっとゴブリンと遊んでたのか？」

「いや、突然赤竜に襲われての。消し飛ばして響夜の下に行こうと思ったらゴーレム共が・・・。」

ゴーレムってのは多分あのロボットもどきだよな。・・・赤竜ってのはそのまま赤い竜か？

「響夜！ドラゴンはどうしたのじゃ！？」

「ああ、その骨か。」

「……骨？」

マオは首を傾げる。というか何故それを知っている。

「ああ、骨で出来た竜だ。」

「……多分それは骸竜がいりゅうじゃな。」

「骸竜？」

その言葉に俺は首を傾げる。

「うむ。死んで骨になった竜が空気中に漂うマナを大量に吸収してなるものじゃ。」

マナ……魔力の回復等の魔力の元になるものだったか。

「奴等は魔法の耐久が低い代わりに物理攻撃の耐久が他のドラゴンよりも高いのじゃ。」

「ふん。」

「で、そのドラゴンは？」

「殺した。」

「……………は？」

「いや、だから殺した。」

俺がそう言うのとマオは俺に詰め寄ってくる。……顔が近い。

「ほ、ほんとに倒したのか!？」

「あ、ああ。」

その迫力に押され思わず俺は頷いた。

「だ、大丈夫じゃったのか!!？」

「……………死にかけて人間やめた。」

「？」

隠していてもいつかはバレる。だったら今のうちに言っといたほうが良いだろう。俺はそう思ってマオに神器も含めて今回のことを話した。



「……………大丈夫か？」

「ああ。」

マオに説明をしてどうにかして悪魔の心臓グリモア・ハートを外せないか聞いてみた。

・・・そしてその結果が

「すまぬ。」

「お前が謝ることじゃねえよ。」

これだ。俺から神器を取り出すことは出来ず、やるには俺を殺すしかない。死にたくはないから当然の如くそれは却下。俺はこのまま半不死的な能力を得た。しかも下手をするとこれ、不老にもなるのではないかとの悪い知らせ付きで。

「まあ、死ななかつただけ良しとするか。」

あそこでこれがなかったら俺は今此処にいないことになる。助かったのだから多少の不満は我慢するでしょう。

「・・・それじゃギルドに帰るぞ。」

「うむ。」

俺達は頷き合うとその場を離れようとする。鞆が消されたのは痛かった。あの中には色々入ってたんだが・・・。

俺は立ち上がり辺りを見回し・・・気付いた。

「・・・・・・依頼達成の証拠どうしよう。」

「・・・・・・あ。」

その言葉に立ち止まるマオ。ドラゴンたちは二匹とも消えちゃった。ゴーレムは持って行っても性がない。

「・・・・・・・・。」

俺達はその後何とか依頼達成の証拠であるゴブリン13匹の片耳を探し出した。戦うよりも探すほうが疲れるってどういうことだよ。こうして俺達の初めての依頼はまさかの結果で終わった。

殺人鬼だって傷つく時はある・・・たぶん（後書き）

感想、批判、意見がありましたらどうぞ送ってください。

殺人鬼は魔王に影響されたようです（前書き）

「・・・・・・・・勘弁してくれ。」

b y
響夜

殺人鬼は魔王に影響されたようです

あの竜というイレギュラーが出た初めての依頼から既に一週間が経とうとしていた。あの後帰ってきた俺達は色々と驚かれた。マオはそこまででないが俺は服が血塗れでコートやシャツもボロボロで服としての機能を果たしていない状況だった。それを見たギルドマスターと受付嬢が騒ぎ出したのだ。そのうえ帰ってきたら今度はロシエルが俺達を見て騒ぎ出す始末。依頼よりもよっぽど疲れた。

今は依頼も着実にこなしてランクも一つ上に上がった。それなりに平穏な日々でもあるだろう。窓から街の通りの様子を見れば相変わらずの喧騒が聞こえてくる。最初は慣れたと言っても多少の現実との違和感があったが今では此方の方が現実味が出てくるから不思議だ。それこそ俺のいた世界が夢であったかのように。

「……………服でも買いに行くか。」

俺は読んでいた本を閉じてメガネを取る。このメガネ、書物などを読むとき時間を短縮するのによく重宝されているらしい。何でも思考が何時もより早く回転し読む速度が通常より3倍程の速さで読めるらしい。……………少し高かった。

「……………流石に二着は不味いよな。」

マオに貸していたものがあったから何とか一着だけは残っていたがそれ以外は緊急用でギルドから貰った服だけだ。ギルドから貰ったのは堅苦しくて着てられない。

俺は取り敢えず財布の中の硬貨を確認する。…………よし問題ない。それだけ確認すると俺は部屋の扉を開け施錠する。マオは何処かに出掛けてるがまだ戻って来はしないだろう。

「先ずはギルドか。」

取り敢えずこの服返そう。俺は宿の階段を降りていく。

「あ、響夜さん。」

「・・・ロシエルか。」

俺は受付にいるロシエルから声を掛けられる。何か降りる度に此奴は此処にいる気がするが休憩もしてないのか？

俺は思わずそんなことを思ってしまったがそれを早々にやめて目の前にいるロシエルの話に集中する。

「マオちゃん。今日のご機嫌でしたよ？」

「あ？マオが笑顔なのは何時ものことだろう。」

俺は何時もの口調で話す。この一週間で此奴に丁寧な口調を使うのはやめた。というのもマオが此奴と仲良くなったことにより必然的に会話することが増えるのだ。御陰で俺は誰に対しても敬語を使うことは止めた。

「いえ、そうじゃなくて何か何時にも増して元気なんです。響夜さんが何かしたのかと思ってたんですが。」

「・・・ああ、多分今日は服の割引があるとか。」

ギルドに入ったからといって俺達にはまだそこまでの金銭的余裕はない。俺のメガネも他の物を買うのを我慢して購入したものだ。マ

オもそれを考えてなるべくセールのある日に買い物に出掛けてる。

「・・・そういえば。」

不意にロシエルの声が小さくなる。

「マオちゃんってやっぱり何処かの貴族なんですか？」

ああ、やっぱりこの質問はくるのか。だが素直に魔王と言える訳もない。俺は肩を竦めて言う。

「まさか、そんな訳ないだろう。」

「・・・ホントですか？」

「ああ。というかそんなに気にするんだったら本人に聞け。」

「いや、もしかしたら複雑な事情があるかもしれないじゃないですか。」

単に魔王が面倒臭いからです。

「そんなものあるかよ。」

俺はそう言ってロシエルに出掛ける旨を告げてギルドへ向かった。



「よう。」

「ああ、響夜さん。」

俺は何時もの受付嬢に声を掛ける。

「今日も依頼ですか？」

「いや、この前借りた服を返しに来ただけだ。」

「あ、はい！分かりました。」

受付嬢は元気に返事をする。服を受け取る。

「・・・・・・・・。」

俺はギルドの周囲を見渡す。何時も通りだが何処もおかしい、そんな感じがする。

「なあ。」

「？」

俺は受付嬢に声を掛ける。

「何っーか。今日おかしくねえか？緊張してるといっか浮き足立ってるっーか。」

「・・・・ああ、今日は視察の日ですから。」

「視察？」

俺は何のことか分からず首を傾げる。

「はい、今日は戦乙女ヴァルキュリアと千武せんぶの二人が来るんです。」

「戦乙女と千武？」

「知らないんですか!？」

俺の言葉を聞いた受付嬢は驚いたように顔を近づける。・・・こりゃ失敗したか。

「いいですか? 戦乙女っていうのは二つ名で本名はエルザ・アルリツヒゲン。『クラウン』の序列7位で凄く凛々しくて優しくて、本当に綺麗な人なんです! 二つ名は彼女の戦う姿からそう呼ばれるようになったそうです!

それで千武っていうのは同じく二つ名。此方は本名をガルラ・アルフレッドと言いまして今まで幾つもの戦場でたたき武勇からこう呼ばれるようになりました!!

二人とも凄く有名で! 皆その二人が来るってもんですから大騒ぎですよ!!!」

・・・ようはあれか。有名人を見て騒ぎ出すのと同じか。それより

「『クラウン』って何？」

「・・・ハア。」

俺の質問を聞いて受付嬢は呆れたように肩を落とす。どうやらもう驚く気力すらないようだ。

「いいですか？『クラウン』って言うのは国家や世界への貢献を認められて勲章を貰った人たちです。ただそれだけじゃなくて『クラウン』って言うのには13人がいて皆その力はSSクラスだそうです。後は『クラウン』の人達は基本的に世界中を旅していて全員が集合することなど滅多にはないですよ。……まあ国家や世界の代表ですかね。」

「……はゝ。」

俺の間抜けな声を聞いて更に呆れる受付嬢。何だその目は文句はマオに言え。

「ま、ありがとよ。」

俺はそう言って受付嬢との会話を終わるとギルドを後にする。こう考えるとマオが俺に渡した知識っていうのは本当に生きるのに必要な物の一部だということが分かる。自分でも確かめてみるということなのか？

「……そんな訳ないか。」

どうせその方が面白いからとかいう理由だろう。俺はそのまま服屋へと向かった。



「……」

只今俺は街を全力疾走している。理由？

「コラ、その貴方！待ちなさい！！」

何か変な奴が追っ掛けてくるからだよ。何でこんなことになったのかは俺もよく分らん。服屋に行って外套やらシャツに似た何かだかを買った後、泣いている子供が五月蠅かったから風船を想像して渡したら何かエンカウト。そのまま横を通り過ぎようとしたら突然追い掛けてきた。以上。

「待ちなさいと言っているでしょう！！」

待てと言われて待つ奴は中々いないと思うぞ？俺はその声を無視して路地に入り込むと一気に家の屋根へ登る。

「・・・・面倒臭い。」

俺は後ろを振り返らずに走るが再びあの声が聞こえる。追い掛けてきたのかよ。

俺はその行動にうんざりしながらも走ることを止めない。やめたら絶対に面倒事があると俺の直感が告げている。

「・・・・・・。」

俺は後ろを確認しようとして振り向く。だがその首は横に来た瞬間に止まった。ここよりも離れた場所。ギリギリその顔が確認できる辺り。そこから俺に手を振っているマオの姿が見えた。

「・・・・・・ハア。」

それを見て俺は深いため息を吐く。・・何であいつはこんな厄介な時に。あいつがこっちに来たら間違はなく面倒臭いことになる。そ

れだけは回避したい。

「すこし強行手段に出るぞ。」

悪いのは俺じゃない。悪いのは俺じゃないんだ。

グレイブニル
「神殺しの鎖」

俺の言葉と共に背後にいる女性へ鎖が向かう。取り敢えず拘束した間に逃げよう。俺はそう決断して一気に加速する。だが――

「はっ――」

その声が聞こえたかと思うと俺の目の前に先程の女性が現れた。

「は？」

思わず間拔けな声を上げてしまった俺は後ろを振り返る。そこに先程まで俺を追いかけていた女性の姿はなく代わりにあるのは引き返してくる神殺しの鎖グレイブニルの姿。

「・・・・・・・・。」

何しやがった。俺は油断なく構えると魔神の観察眼を発動する。

「待ってください！貴方に聞きたいことがあるだけなんです！！」

「んな初対面の奴に怪しいこと言われてもな……。」

「・・・・・・・・うっ。」

女性は自分に非があることは分かっているようで僅かに呻く。女性の動きにポニーテールが左右に揺られる。金髪碧眼。容姿も良く軍服に似た何かを着ている。

「・・・・・・・・。」

どうする。ここで時間を掛けるわけにはいかない。そうすれば厄介^マ事が近付いてくる。

「・・・・・・・・そんなじゃ。」

「あ、ちよっ！」

俺は一気に加速して屋根から勢いよく飛び降りる。常人なら何が起きたか分からずただ呆然とするだけだろう。俺は路地裏に着地すると通りから人の波に隠れてその場を後にした。



「響夜！」

宿の部屋の中。帰宅してきたマオは扉を開けると俺の名前を呼ぶ。

「何だ？」

俺は素知らぬ顔でマオに顔を向ける。

「・・・・・・・・。」

「・・・こ、こんにちは。」

マオの後ろにいる女性は申し訳なさそうに言う。俺は心の中で悟った。ああ、逃げてでも厄介事には無駄だったかと。

「響夜。我を置いていくとは何事じゃ。それにこの者は主に用があるというではないか。」

「・・・ハア。マオには負けたよ・・・うん。」

俺は今までにないほど疲れきった声で言う。

「うん？・・・そうかそうか！当たり前じゃ、響夜が我に勝てるわけなからう！」

俺はその言葉を聞いてさらに溜息を吐く。

「・・・はあ、アンタもそこで突っ立ってないで座れ。」

ここまで来たらもう逃げられないんだ。俺は空いているベッドに座るよう促す。

「・・・あ、うん。ありがとう。」

女性はぎこちない様子で座る。俺は女性が座ったのを確認すると机の上にあったポットの中に入っている紅茶を想像形成で創り出したティーカップに注ぐ。

「ほれ。」

俺はそれをマオと女性の二人に差し出した。二人はそれを貰うと口を付ける。

「……美味しい。」

「相変わらず響夜の入れる紅茶は美味しいのじゃ。」

「……紅茶？」

マオの言った言葉を聞いたことがなかったのか女性は首を傾げる。

「ああ……まあ何というか俺の故郷の物だ。」

間違っではない。地球は一応俺の故郷だ。女性はもう一口飲むと顔をほころばせる。

「……で、何だ聞きたいことって。」

俺は目の前にいる女性に聞く。

「ああ、はい。私の名前はエルザ・アルリッヒゲンといいます。エルザと読んでください。」

「ああ、戦乙女さんね。」

「うっ!？」

その言葉を聞いたエルザは再び呻く。頬を若干赤くしながらエルザはコホンと調子を整える。

「その・・・その二つ名は出来れば遠慮して欲しいってどうか・・・あの本当に私はそんな大層な呼び名で呼ばれるような者じゃないので・・・。」

・・・聞いた話と全然違うじゃねえか。凄くそわそわしてんぞ。マオはその名前を聞いたことがないのか首を傾げている。相変わらず世間に疎い奴である。

「・・・で、エルザは何で俺なんかに？初対面だと思うが？」

「あ、はい。その実はあの子に風船をあげてるのを見て・・・。」

ああ、丁度泣いていた時か・・・。

「今の紅茶もそうですが、あの時貴方が突然手から風船を出していました。あれは誰から教わったんですか？」

・・・そんなことのために俺は追い掛けられていたのか。

「あれは俺のスキルだ。」

「・・・スキル。ですか？」

「ああ、言っておくが余り言い触らすなよ？バレると面倒臭いからな。」

マオの話を聞いてもこんなスキルはほぼ有り得ないとのことだしな。見ればエルザは何か考え込んでいるのかブツブツと呟いている。

「何の話をしているのじゃ？」

今まで会話に置いてかれたからかマオは俺の袖を引っ張って聞いくる。美女がやる行動じゃねえな。世の中にはこれが良いと感じる奴もいるんだろうが残念ながら俺は特には感じん。強いて言えば切りたくなるだけだ。

「さあな。」

俺はその質問に首を傾げる。頬を膨らませるな、俺だって何のことなのか知らねえんだよ。

「結局何なんだ？」

俺はブツブツ言っているエルザに声を掛ける。するとエルザはハッとして俺達を見る。

「いえ、ただその能力と似たものを以前見たことがあるので・・・。

」

「あ？」

俺はその言葉に思わずマオを見る。どうやらマオも見たことはないらしく首を横に振った。

「あと、貴方からとてつもない量の魔力が漏れていたので気になってしまって・・・。」

「・・・・。」

え？魔力って漏れるの？

「俺のはマオから供給してるからな。そういうのはよく分からん。」

「供給って……。それには余程の魔力がないと出来ないんじゃないか……」

「それが出来るからやってんだ。」

「……………」

俺の言葉にエルザはマオを見る。まあ気持ちはわかる。此奴にそれだけの力があるとは思えないからな。現に今も頑張って美味しい紅茶を煎れられるように練習しているだけだし。

「でも一応魔力はある程度制御できるようにしたほうがいいですよ。でないとそれを狙って突然襲われることもあるかもしれません。」

「…………マジかあ。」

これ以上の面倒事とかマジ勘弁だ。俺の許容量は既に限界近いぜ？ 次何かあったら殺すかもしれないぜ？

「…………ええと、大丈夫ですか？」

俺は一度マオを見る。そしてエルザを見る。俺は交互に見る。決めた！

俺はエルザの手を強く握った。

「俺に魔力の使い方を教えてくれ！！」

マオに教わるとか無理！絶対碌なことにならない。エルザは突然のことに驚いたのか慌てる。

「頼む！お願い！この通り！！」

俺は頭を下げる。プライド？面倒事とプライド、どっちが重要だと思ふよ。

「え、ええと・・・。」

女性は頬を赤くしながら視線を泳がせる。

「・・・は、はい。私で良かったら。」

「マジで!?!」

俺はその言葉に思わず顔を上げる。まさかあって間もない奴の頼みを聞いてくれるとは・・・。俺は思わず感激した。殺人鬼が感激するものおかしいか。

よし、今から此奴は人だ！俺は心でそう決めた。

「あの・・・とりあえず手を・・・。」

「ああ、済まない。」

俺はエルザの言葉に手を離す。エルザは自分を落ち着かせるように深呼吸をすると真剣な表情をする。

「任せてください。貴方がきちんと魔力を制御できるよう私が手伝います。」

その顔を見て俺は何となく此奴が戦乙女と呼ばれる意味が分かった気がした。それと同時に此奴自身にも興味がわいた。

やっぱ人間は良いねえ。

俺はジト目で見えるマオを無視してエルザと予定を立てると挨拶をして別れた。

「……響夜。」

「何だ？」

「何故私を頼らない!!」

此奴がこういうことは大体分かっていた。いや此奴に教わってもいいが――

「お前だと絶対に何となくっていう答えだと思っただが。」

「……。」

プイツと顔を背けるマオ。やっぱりか。

「でも……少しは我を頼ってくれ。」

……本当、此奴は面倒臭い。俺はマオの頭を撫でる。

「……お前には何時も頼ってるよ。むしろ俺がお前を頼らない方が珍しいんだよ。」

「……そうなのか？」

マオは俺を見る。実際そうだ。魔力も知識も全部マオのものだ。此奴がいなかったら俺は何もできない無力な人間。この世界じゃ生きることなんて出来ないだろう。この街に来てからもそうだ、宿の時も竜の時も此奴がいたから俺は安心して戦えた。俺一人なら間違いなく無理だった。

「ああ。」

俺は優しい声で言う。俺は安心出来る奴にしか此処まで近づかない。マオも俺の声を聞いて安心したのか俺に体を預けるようにしてしだれかかる。

「響夜。」

「何だ？」

俺はマオを見る。マオは先程よりも強く押し付ける。

「何でもない。」

心無しかマオの声は先程よりも弾んでいるようだった。

「……………」

乙女心と秋の空とは言うが……殺人鬼にはよく理解出来ないものらしい。



朝日・・・太陽は相変わらずうざったいほど輝いている。普段ならそれを確認して起き上がるが今日は別だ・・・。

「・・・・響夜。」

マオが相変わらず俺に抱き着いている。気のせいか何時もより密着しているような・・・。

「・・・・。」

俺はマオの頭を撫でる。マオはくすぐったそうな顔をする。・・・・何だかマオの俺への依存度が上がった気がする。

「・・・・5時位か？」

時計はないからよく分からんが普段の癖と太陽の角度的にその位だろう。俺は再びマオへ視線を落とす。

「・・・・ん、・・・。」

よく考えれば俺はマオのことをよく知らない。此奴の生まれなどの素性を一切俺は知らない。

ま、俺も人のことは言えないが。

「・・・・・・本当に此奴は・・・。」

良くここまで無防備になれるな。俺だったら絶対に無理だぞ。俺は再びその髪を撫でていく。

「・・・・ん。」

撫でる。

「……………」

撫でる。

「……………」

「…………アホか俺は。」

今までで一番恥ずかしかったぞ今のは……。この世界に来て此奴と会ってから随分変わってんな俺。

昔の俺が見たら何て言うのか。嗤うのか侮蔑するのか。それとも祝福するのか……。いや、それは無いか。

「…………殺人衝動もそこまで起きないんだよな。」

相変わらず生命が輝いている瞬間は見たいが前のように進んで殺しに行くようには無くなっている。これは依頼で魔物と戦えるからか？俺がそんなことを考えているとマオがモゾモゾと動く。どうやらお目覚めらしい。

「……………」

「おはようさん。」

俺は取り敢えずマオにそう言おうとマオの頭を撫でる。

「…………ん。」

撫でられていくうちに頭も回転し出したのかマオは顔を真っ赤にし布団に潜る。

「・・・初なのかそうじゃないのかよく分かんねえな。」

取り敢えず起きたマオを引きはがすと俺は着替える。確かエルザとの待ち合わせが十時位。まだ時間に余裕はあるな。

俺はそう考えると今のうちに支度をして何時でも出掛けられるよう準備した。多分マオも一緒に来るんだろうな、などと考えながら。



街の中央通りの一角にある喫茶店。そこに俺達はいた。

「おはようございます。」

「おはようさん。」

「うむ、おはようなのじゃ。」

俺達はそう言ってエルザの対面に座る。

「人が凄いな。」

俺は思わずそう呟いた。周りからの好奇や嫉妬の視線。そんなものにはマオと一緒にいたから慣れていたが今は普段の何倍もの数を感じる。これが有名人パワーか。

「す、済みません。」

エルザも申し訳なさそうに言う。

「構いやしないさ。」

「全くじゃ。」

俺達がそう言うのとエルザは安堵した表情を浮かべる。

「そう言ってもらえると嬉しいです。」

その後他愛もない会話を続けているとやがてエルザは真剣な表情をした。

「それじゃあ、これから魔法の制御の練習をしたいと思います。」

「どんとこい。」

「バッチリじゃ。」

俺達はその言葉に頷く。それを見るとエルザは笑顔で言った。

「それじゃあ私と戦ってください。」

殺人鬼は魔王に影響されたようです（後書き）

感想、批判、意見がありましたらどうぞ送ってください。

今回どこで区切るか迷いましたが今回はここまでまた次回もよろしくお願いします。

変人が集まる殺人鬼の木（前書き）

「・・・・・・・・俺って何だっけ。」

b y 響夜

「!?!?」

b y マオ

変人が集まる殺人鬼の木

「……………は？」

喫茶店の一角。そこで響夜は間抜けな声を出して目の前にいるエルザを見る。

「いえ、私と戦っていたかどうか。」

響夜はその言葉に頭を悩ませる。

「（いや、まだ戦闘だと決まった訳じゃない。）」

きっと基礎的な体力とかだろう。

響夜はそう望みを懸ける。最も魔力と体力にそれ程の結び付きがあるのかを考えれば答えはすぐに出るだろう。それが思いつかないあたり余程テンパッていることが窺える。

「それでは周囲に被害が出ない場所に行きませんか。」

あ、これ終わった。

響夜はその言葉を聞いてそう悟った。

「（これは人選をミスったかもしれない。）」

響夜はそう思って他に頼りになりそうな人物を考える。

「（受付嬢……無理。ロシエル、後で何を頼まれるか分らん。爺・
ギルドマスター
……俺が何か嫌だ。）」

唯一頼りになりそうなマオは感覚とか言い放つだろう。

響夜はそこまで考えるとさらに頭が痛くなってくる。元々友人関係が狭いのは仕方がない。まだ来て二週間も経たないのだ。そこには目を瞑ろう。だが・・・

「（周りに碌な奴がいねえ。）」

本人が教わる側であるのにこの態度というのも自分が碌でもない奴の証拠なのではないだろうか。

現実から逃げようとする響夜にエルザは無慈悲にも現実を突き付ける。

「ほら行きましょう。」

「響夜？　どうしたのじゃ？」

女性陣二人は既に席を立っている。響夜はその姿をみると諦めたのか深いため息を吐いて二人を追い掛けた。



今三人は街の訓練場の中にいた。だがそこに立っている三人の顔には既に疲れた顔がありありと出ている。

「・・・・まさかあそこまでいるとは。」

「・・・・疲れたのじゃ。」

「あ、あはは。すみません。」

疲れきっている二人にエルザは苦笑しながらも申し訳なさそうに謝る。実際有名人と一緒に歩いたことのない二人にはあまりにもキツ過ぎた。歩く度に周囲からの視線を感じ、さらには追い掛けてくる者もいた。お陰で此処に来るために人を撒くのに随分時間が掛った。

「……ふー。」

エルザは一度深呼吸をすると真剣な顔をする。

「もう大丈夫ですか。」

「ああ。」

その顔を見た響夜も観念したらしく何時でも戦えるように心構えをする。マオは二人から離れ端で二人の戦いを見守る。

「この戦いでは魔力というものを感じてもらいます。」

「感じる？」

「はい、魔法を使う時に感じるものでなく、自分の体内に常にあるのを感じるんです。そしてそれを自分の意思で体内を巡らせて下さい。自分の血管や神経をイメージするといいですね。」

「……なるほど。」

先ほどまでは自分の間違いを悔やんでいたがその考えは180°変わった。

目の前にいるエルザの言い方は分かりやすく、彼女が教えなれているということが分かる。ならばそんな大きな間違いがあるということはないだろう。

「（一度の死闘は100の練習の価値があるというしな。）」

響夜はその言葉に納得し目の前にいるエルザを睨む。

「ではマオさん。開始の合図をお願いします。」

「うむ。任されたのじゃ。」

マオはそうとうと腕を振り上げる。

「では試合・・・開始！」

その言葉と共に振り下ろされる腕。

「はっ——————」

気が付けば彼女は目の前にいた。

「うお!？」

それに気が付いた響夜は振り下ろされる訓練用の剣を躲す。幾ら刃が潰されているとはいえ彼女のふる剣速で食らったら大怪我だろう。

響夜は魔神の観察眼を発動すると彼女の挙動を見逃さないようにする。

「ふ――」

「――」

彼女が動き目の前に現れた瞬間、響夜は自分が持つ剣で彼女の剣を防ぐ。それを見た彼女は僅かだが眉を上げる。

「やりますね。」

「そりゃどうも!!」

響夜は力任せに剣を振りエルザを弾き飛ばす。鬼神の武勇伝を持っている響夜は普段から常に身体能力が大幅に上がっているためオーガと素手で渡り合うだけの力を持っている。

当然それほどの力で弾かれたらどうなるか。エルザは響夜から引き離され数十mは飛ばされていた。

「只の冒険者ではないようですね。」

「いや、只の新米冒険者だよ。」

響夜の言葉にエルザは不敵な笑みを浮かべる。

「少し本気でいきますよ。」

瞬間エルザの姿がぶれる。

「はっ――」

「!?!」

響夜は背後からの一撃を防げないと判断すると危なげなく躲す。

「……やりづれえ。」

響夜はそう言うど手に持っている剣を捨て想像形成で一振りのナイフを取り出す———勿論刃は潰してあるものだ———と同時にエルザへ駆ける。

まさか剣を捨てるとは思わなかったのだろう。エルザは目を見開くがそれもすぐに真剣な顔になる。

「っ……らあ!!」

それはまるで踊っているかのようなだった。器用にナイフの持ち方を変えながら響夜は目にも止まらぬ速さで攻撃を繰り出す。それをエルザは時に防ぎ、時に宙を待って躲しながら一瞬の隙を突いて剣で攻撃する。

「っ、本当に……新米ですか!？」

「……ああ! 冒険者としては……新米だよお!!」

お互いは剣とナイフを衝突させながら視線を交す。それも一瞬二人は再び移動しながら剣とナイフをぶつけあう。

訓練場にはただ剣閃がぶつかりあう音だけが響く。既に百合は打ち合っただろうか状況は徐々に響夜の劣勢になっていた。

「……っち。」

響夜のナイフは直ぐ創れるがその分脆い。響夜のナイフはエルザの攻撃に耐え切れなく砕け散る。響夜は壊れた瞬間に新たにナイフを創りだすがその瞬間、響夜の意識は想像形成に向けられる。それによって響夜は徐々に追い込まれていった。

「・・・やりますね。」

エルザはそこで攻撃をやめる。響夜はそれを不審に思うが原因は直に分かった。

————パキン

エルザが持っていた剣が半ばから折れたのだ。

「・・・貴方の実力なら問題ありませんね。」

その言葉と同時にエルザの背後の空間が歪む。響夜はそれを見て警戒する。

「・・・雷鳴轟かす勝利の咆哮」
フリスト・ヒルド

現れたのは一本の剣。両刃の剣で片手剣だがその形状はレイピアのようにも見える。

そしてその剣は蒼い雷を纏っている。

「・・・本気ってことっすか。」

それを見た響夜は冷や汗が止まらなくなる。あの剣から感じる重圧を響夜は感じたことがある。

「――――神器。」

「私の愛剣。そして私の切り札です。」

エルザはその剣の切っ先を向ける。

「・・・頑張って戦ってくださいね。」

第三者からみれば綺麗な笑顔だが響夜から見たら死刑宣告としか感じられない。

「――――」

エルザの姿がぶれた瞬間響夜の腕に痛みが走る。みれば背後にいるのは剣を構えているエルザの姿。

「（速過ぎだろ。）」

その瞬間響夜から油断という言葉は消えた。

「（一度見られてはいるが・・・）」

「神殺しの鎖！」
グレイブニル

グレイブニル その言葉と共に響夜の背後そしてエルザを囲むようにして神殺しの鎖が出現する。

「な！神器！？」

これはあの時の一瞬ではわからなかったのだろう。エルザは驚きを露にする。

「く————」

神殺しの鎖はエルザへと向かうだが——

「・・・は？」

グレイプニルがエルザを縛ることはなくそのままエルザの体を突き抜けて行った。

「・・・これが私の神器の能力の一つ。自身を雷化し物質を透過します。」

「それ何てチート？」

思わず響夜はそう呟いてしまった。エルザはそんな響夜の隙を逃すことなく一瞬で接近すると袈裟切り。

「・・・っ。」

攻撃自体は響夜の悪魔の心臓で再生するがそれでも痛みは感じる。エルザはそれを見て再び驚愕する。

「・・・それも神器ですか。」

「・・・ああ、最低最悪のくそったれ神器だ。」

響夜は忌々しげに言う。

「そうですか。・・・これ以上怪我をする前に早く魔力を感じ取ってくださいね。」

響夜の顔を見たエルザは黙り込むとそれだけ言って剣を構える。

「（・・・魔力。）」

響夜は体内に意識を向ける。

「（マオの魔力は右手から供給されている。）」

ならば右手に何かが流れ込んでいるイメージをすればいいのか？
響夜は首を傾げながらも右手から水が流れ込んでいるようにイメージをしていく。

「・・・・っ。」

エルザの攻撃をなるべく防ぎながらも響夜はそのイメージを固めていく。

「（・・・何かが流れてる？）」

響夜は徐々にだが魔力の流れを感じ始めていた。

「（これが魔力か。・・・これを全身に流れているようにイメージしていく。）」

水路を作りそこに魔力という水を流すイメージをしながら響夜は徐々に魔力を動かしていく。

「……掴みましたか。」

魔力を感じ取ったのだろう。エルザは剣を振るのをやめ響夜をみる。

「（早い。）」

それが今の響夜への感想だった。常人は魔力の流れを感じ取るのにもう少しの時間を要するというのに目の前にいる青年はそれをものの数分で終わらせようとしている。

「（あのナイフ捌きといい、神器を所有していることといい。）」

エルザはこの青年が何者なのか少し気になった。これが終わったら聞いてみるかと考えていると響夜が魔力を張り巡らせたのを感じ取った。

「……体が軽いな。」

それが響夜の感想だった。驚くほどに今自分の体が軽く感じる。

「魔力を体に張り巡らせれば身体強化をすることが出来るんです。」

エルザはそういうと剣を握り締める。

「今から一度剣を振ります。それにそのナイフをぶつけてください。」

「……了解。」

響夜はエルザの挙動を見逃さないよう注意する。次の瞬間、エルザの手が動くのを捉えた。

「（・・・くる!）」

その瞬間、響夜は僅かに捉えた向かってくる剣にナイフを振るう。

————ガキン!!

金属がぶつかる音と何かが砕けた音がした。

「・・・・・・・・。」

響夜の手を持っていたナイフはボロボロに砕けちる。エルザは今の光景を見て驚いた後に笑う。

「お見事です。まさかぴったりで当ててくるとは思いませんでした。」

その言葉に響夜は肩を竦める。

「いや、ギリギリだったさ。お前の手が動く瞬間が見えなかったら無理だっただろうさ。」

「です十分凄いですよ。並の冒険者じゃ今の攻撃など見ることもすら出来ませんから。」

「褒め言葉として受け取っとく。」

「響夜！」

俺たちが話しているとマオが駆け寄ってくる。

「良くやったのじゃ！」

「あゝ、はいはい。」

飛びつこうとするマオを響夜は片手で押えながら投げやりに答える。

それを見たエルザは笑いだした。

「あ？」

「いえ、仲が良いんですね。」

「うむ！」

響夜の代わりにマオが声を上げて答える。

「では、次からはそれを無意識的に行えるようにしましょう。」

その言葉を聞いて響夜はまたこれをやるのかなあ。等と考えながらげんなりする。

「ああ、そうだな。」

「響夜！お腹が空いたのじゃー！」

「はあ？」

その言葉を聞いた響夜は眉を寄せる。

「お前殆ど何もしてないだろう。」

「む、失礼な。響夜を見守っていたじゃろう。」

それを聞いた響夜はマオに何を言っても無駄だということを悟る。

「ほれ、行くぞ。エルザも一緒にどうじゃ？」

マオの誘いを受けてエルザは少し考える仕草をすると快く返事する。

「はい、いいですよ。私も少しお腹が空きましたから。」

「では行くぞ!!」

その言葉と同時にマオは響夜とエルザの手を引いていく。

「（……もう殺人鬼のすることじゃねえなあ。）」

傍にいる二人の笑顔と今の自分を見て響夜はそんなことを考え苦笑する。

空には雲一つない青空が広がっていた。

変人が集まる殺人鬼の木（後書き）

感想、批判、意見がありましたらどうぞ送ってください。

殺人鬼は満足できないようです（前書き）

「……三人称は一マス開けるようにしています。」

b y h i m a

m e

「ここでの台詞で言うことじゃねえだろ。」

b V 響夜

殺人鬼は満足できないようです

「・・・・・・・・・・！」

街外れの訓練場。そこに二つの影があった。一方は白いYシャツと黒のジーンズの白髪青年。もう一方は黒い軍服のようなものを着た金髪にポニーテールが特徴の女性。響夜とエルザだ。

「ハア―――！」

振り下ろされるエルザの剣を響夜は手にしたナイフを滑らすようにして防ぐ。

「―――」

響夜はエルザの懷に潜り込むとナイフを一閃。だがその攻撃をエルザは僅かに体を反らして躲す。

エルザは追撃がくる前に素早く距離をとる。二人の距離は再び開き両者は睨みあう。無駄口などしない、そんなことをすれば瞬く間に相手の持つ武器が自分の首を刈り取る。

「グレイプニル！」

響夜は自らの神器を出現させるとエルザに向かわせると同時に自らも駆ける。

「雷鳴轟かす勝利の咆哮―――！」
フリスト・ヒルド

エルザは腰にある剣を抜くと共にその名を呼ぶ。すると剣に蒼い

雷が纏いエルザ自身にも雷が纏われる。

向かってくる神殺しの鎖をエルザは雷化によって回避し響夜へとまさしく雷速の速さで迫る。振り下ろされる剣を響夜は周囲に展開していた神殺しの鎖で防ぐ。如何に雷化といへど剣自体は雷化をしない。それを見抜いた響夜は神殺しの鎖による防御にでたのだ。

「（とはいえ、こっちも攻撃する方法がない。」

そう斬撃は防げるものの響夜はエルザへ攻撃する手段を持っていないのだ。

「（・・・想像・・・形成・・・）」

骸竜との戦いの際に創りだした魔道具。創りだすものは違えど響夜は再びそれを行おうとしているのだ。

「（・・・何を？」

響夜が膨大な魔力を集中させるのを感じたエルザはそれを危険と判断し響夜へと疾走する。

「——————心眼。」

その言葉と同時に響夜の手に現れるのは一つのペンダント。鎖に繋がれたペンダントはまるで目を思わせる様な形をしている。

「発動。」

その言葉にペンダントが碎ける。響夜はそれを確認するよりも早く目の前に迫っていたエルザへとナイフで一閃した。

交錯する二人。その結果は――

「――――」

響夜の右腕に走る痛みと僅かに焦げた臭い。だがその代償を払っても得たものは大きかった。

「――――」

茫然とした様子で自分の頬に手を触れるエルザ。その手には血が付いていた。

「……………どうやって私に攻撃を？」

エルザはそれを聞かずにはいらなかった。今まで同じクラウン以外の者―――ましてやクラウンでもほんの一部の者しか雷化をした自分に攻撃出来た者はいない。それをまだ魔力を感じ始めたばかりの者に破られる。これは彼女に大きな衝撃を与えただろう。

「……………俺のスキルだ。一度だけあんたに攻撃を届かせることが出来る。」

その言葉にエルザは響夜の手に見れたペンダントを思い出す。エルザは剣を鞘に戻すと響夜へ振り向く。その顔はとても生き生きとしたものだった。

「今日はこれで終わりです。私にとってもいい勉強になりました。」

そう言ってエルザは頭を下げる。

「いや、俺のほうがいい勉強になった。ありがとよ。」

響夜はそう言うのとエルザへと手を差し出す。それを見たエルザも笑顔で響夜の手を握り握手した。

「そんじゃ次も頼むわ。」

「はい。その時はまたお願いします。」

そう言うのとエルザは訓練場を出て行った。一人残った響夜は樽を創りだすとそれに座る。何故樽を創ったのかは簡単なもののほうが想像もしやすいからだろう。

「・・・・・・・・。」

響夜は空を見上げる。

「（・・・・・・・・やっぱり少し物足りないな。）」

決してエルザとの戦いがつまらない訳ではない。むしろ響夜としてはこうして戦えるのは大歓迎だ。ただ響夜は血が見たいだけなのだ。訓練では出血など殆どない。エルザが手加減をしているというのもあるのだろうが響夜自身エルザを殺す気などない。

ヒトに手は出しても人には手を出さない。

それが響夜の基本理念だ。自らが信用できる者、気に入った者は人として見るがそれ以外はヒト。理科の実験動物マウスと同じだ。殺しても特に何も感じない強いて言えばその時に感じる生命いのちの輝きを見ることが楽しみというだけだ。

「ギルドでも行くか。」

何か面白い依頼があれば行ってこよう。そう考え響夜は手を翳すと黒い穴を開けそこに樽を入れる。倉庫と呼ばれる空を使った魔法だ。生物は入れられないが自身の魔力によってその大きさは変わり中に様々なものを入れられる。マオから教わったこの世界のものだ。

「……………」

響夜は一度周囲を見回すとギルドへと足を運びに行った。



視線、視線、視線、街中を歩いている時も数こそ減ったもののギルド内でも響夜は視線を感じていた。

「（俺はパンダじゃねえんだよ。）」

その視線にうんざりしつつも響夜は進んでいく。こればかりは仕方がないと響夜自身思っているところもある。普段からマオという美女と一緒にい、つい先日はエルザも入れて三人でいる所を見られている。それによって響夜の顔を覚えている者は多くそれがこの視線である。

「よう。」

「あ、こんにちは。有名ですよ響夜さん。戦乙女と一緒

ヴァルキュリア

にいたって。

最早響夜とマオの専属と化してきている受付嬢から挨拶兼聞きたくない話を聞きながらも響夜は依頼を探す。

「そうそう、おめでとうございます響夜さん。Bランクになりましたよ。」

「・・・・・・は？」

響夜はその言葉に間抜けな顔をする。響夜はついこの前Dランクになったばかりだった。それが何時の間にかBランクなどとても信じられるものではない。

「いえ、つい先日エルザさんがいらしてDランクにしておくなんて勿体無いと。それを聞いたマスターもそう思っていたらしく、ならBランクに上げるかと。・・・・これは結構異例のことですよ。しかも戦乙女のお墨付き。」

そう言っ受付嬢は笑う。響夜にとっては堪ったものではない。また妙な視線が増えるのではないかと響夜は頭を抱えそうになった。

「・・・・・・畜生。」

こんな所で頭を抱えていたら余計に目立つ。響夜はそう考えるともう諦めて依頼に目を通していく。よく考えればBランクなら骨のある魔物と戦えるかもしれない。そう考えた響夜は一通り面白そうなものを取る。

アース・ドラゴン
・地竜討伐依頼

・古城調査

・遺跡探索

・ホワイト・ウルフ白銀狼討伐依頼

「……どれが良いかね。探索なら魔道具が手に入る確率があるし神器も有り得る。討伐は中々強そうな奴らだし。」

「白銀狼。行こうか。」

丁度Bランクがどれだけのもの七日を知っておきたいしな。響夜はそう考えると依頼書を受付嬢へと渡す。

「気を付けてくださいね。」

「ああ。」

響夜は受付嬢のそんな言葉を聞きながらギルドを出て行った。



かた・・・かた・・・

馬車に揺られながら響夜は今回の依頼の内容と白銀狼がどんな生物なのかを見ていた。

「……知能も優れている。注意すべきは氷魔法と脚力か。」

情報を見る限りだとこれ選んで正解だったかもな。

響夜はそう考えながらスキルを倉庫の中から幾つかの魔道具を取り出す。これを買うために響夜は今までなるべく報酬の高い物を選んで受けてきた。マオにも秘密にして・・・。

魔道具が放っている魔力はどれも一級品であった。幾ら報酬の高い依頼を受けてきたとは言ってもやはりE、Dランクでは限界がある。どうやってこれを手に入れたのかは無論秘密である。

「世界が変わっても人間の考えることは変わんないねえ。」

まあ、この世界では人間だけではないが。と内心で付け加えた。

「冒険者さん。着きましたよ」

やがて馬車が止まると声が聞こえる。響夜は馬車を降りると男に金を渡し礼を言う。

「しかしどんな依頼なんですか？」

「あ？・・・白銀狼だとさ。」

それを聞いた男は目を丸くすると乾いた笑いを漏らす。

「そ、そうですか。んじゃ私はこれで・・・。」

男はそう言うのと馬車をUターンさせてやがて見えなくなった。

響夜はそれを確認すると山の中へとはいっていく。

「・・・・・・・・・・。」

山に入ってすぐ異常が分かる。凍っているのだ木々や大地が。響

夜はそれを見ながら白銀狼の魔法を思い出す。

『氷魔法』複合魔法というもので氷なら大地と水の魔法を合わせることによって作りだされる魔法である。他にも雷ならば風と火の複合魔法という様に種類がある。因みにエルザはこの複合魔法の雷を得意としている。

響夜は凍っている葉に触れるとそれは砕け小さな欠片となって大地に落ちる。

「……………とんでもねえな。」

どうやって白銀狼に会うか。この凍った雪山では遭遇する前に凍え死ぬ。

「……………燃やすか。」

響夜はそう考え、巨大な火柱を放つ。それは周囲の氷を木ごと燃やしつくし響夜の視界は火の海になっていた。響夜は魔神の観察眼を発動すると周囲を確認する。

「—————」

響夜は草が揺れる音がすると同時に大きく飛び退く。すると先程まで立っていた場所に巨大な氷柱が突き刺さっていた。

飛ばされてきた方向をみるとそこにいるのは全身に毛並みの良い白銀の毛を生やし強靱な四肢で大地を踏みしめている巨大な狼。間違いない白銀狼である。

「—————!!!!!!」

咆哮。それは山中に響き渡る。
それを合図にして響夜と白銀狼の戦いが始まった。

殺人鬼は満足できないようです（後書き）

感想、批判、意見がありましたらどうぞ送ってください。

殺人鬼の怒り（前書き）

「・・・・・・・・優しく殺してやるよ。」

b y 響夜

※少しでもグロい(?)です。

殺人鬼の怒り

寒い。それが響夜の最初に感じたことだった。先程まで火の海だった大地が今では凍てつき始めている。

「……………」

響夜は自分の周囲に魔力を纏いそこに火の魔法を発動する。火は響夜の周囲を魔力を伝って響夜とその周りを温める。

「（魔力の使い方は学んどいて良かったな。）」

響夜はエルザに感謝しつつ目の前の白銀狼を見る。白銀狼も響夜の出方を窺っているのかその場から動かない。響夜はそれを確認すると懷からグロックとデザートイーグルを取り出す。

「派手に踊りな。」

響夜はその言葉と共に引金を引く。火薬の弾ける音共に放たれる銃弾と硝煙の臭い。銃弾は幾千もの針となって白銀狼を襲う。

「—————」

だが白銀狼はその全てを躲し響夜へと接近する。

「化物め！」

それを見た響夜は舌打ちをして後退する。その間も白銀狼へと狙いを定めるがその全てを尽く躲される。響夜から見たら竜と戦った

時と同じ悪夢のような光景だ。

「（零距离でないと当たらねえか。）」

そう判断した響夜は銃を倉庫へ入れナイフを取り出すと自らも白銀狼へ接近する。一瞬にして零になる二人の距離。白銀狼の攻撃をナイフで捌きつつ響夜は懐に入り込もうとするが白銀狼は氷柱を地中から突き出しそれ以上の接近を許さない。

「ふっ————」

次々に繰り出される氷柱を魔力による強化で弾き、躲す。だが響夜と白銀狼の距離が開いた瞬間、響夜は横からの衝撃に吹き飛ばされる。響夜はその衝撃によって驚く間もなく木に叩きつけられる。その衝撃に息を詰まらせるが痛みを無視して素早くその場から転がる。その瞬間先程までいた場所に次々に突き刺さる巨大な氷柱。

「燃やせ！」

響夜は炎の蛇を創ると白銀狼へと放つ。

「オオオオオン！！」

白銀狼が一声鳴くと激しい冷気が放たれる。それは炎の蛇を凍てつかせ蛇は粉々に砕け散った。直後白銀狼へと次々に炎弾が放たれる。それは大地へとぶつかり衝撃と爆風によって冷気を吹き飛ばす。

「燃え尽きろっつってんだろぅがあ！！！！」

響夜はその手に今までの比ではない程の炎弾を作りだす。それか

ら放たれる熱気だけで周囲の水が解け始める。

「ラァ———!!」

響夜が放った特大の炎弾を白銀狼は危険と判断したのかそれを躲そうとする。

「甘いんだよ!!」

放たれた炎弾は白銀狼へと迫る中突如爆発した。それによって再び巨大な火柱が立ち白銀狼はそれに飲み込まれた。

「断頭台」
ギロチン

響夜は周囲に断頭台の刃だけを創り出し展開する。その数三十以上。それは響夜が腕を振るったと共に火柱の中にいるであろう白銀狼へと殺到する。

「■■■■———!!!!」

それは断末魔の叫びだったのだろうか火柱の中から咆哮が轟く。響夜は火柱を警戒するように見ている時それは起こった。

ピキ・・・ピキピキ・・・

凍りだしたのだ。何百度という熱量を持っている巨大な火柱が。

「な———」

その光景に思わず響夜は目を疑った。それはマオから供給されて

いた魔力を一気に使用して放った一撃。今までの攻撃でも相当な威力を誇っている。

「・・・・・・・・。」

やがて火柱は巨大な氷柱へと変わり砕け散った。中から現れるのは全身に切り傷を負い血を流しながらも堂々と歩く氷で全身を覆った白銀の狼。

その姿は孤高であると同時に幻想的な雰囲気放っていた。

「・・・・・・・・。」

響夜はその光景に目を奪われていた。

・・・・美しい。

そう思わずにはいられなかった。その姿だけでなくあの業火と刃を食らってもなお立ち上がり、より一層と燃え上がらせているその闘志に。

「・・・・・・・・素晴らしい。」

響夜は一步白銀狼へと近づく。その顔には今までにない程の笑み。

「ああ・・・・・・・・いいぜえ。美しすぎる。美しすぎるお!!? 何だその生命はよお? ああ、ぞくぞくしやがる!! 待ってるよお? 今から、その全身を・・・・真っ赤な血で綺麗に飾ってやるからよお!!」

響夜は一本の長剣とナイフを両手に持ち白銀狼へ駆ける。

「■■■■！！！！」

白銀狼も迎え撃つ様にその氷によって強化された右腕を振るう。

「ヒyahははハハ！！！！！！」

その右腕を響夜は右手に持つ長剣でその右腕を防ぐ。そして冷氣によって響夜の手が凍る。

「こりゃあ良いなあ！お陰で剣を握らなくても済むぜえ！！！！」

響夜は更に高笑いをする。本能を表に出した響夜は今までにない程の戦闘に高揚していた。その実狂っている様に見えても危険と判断したものを本能で感じ取り躲し、防いでいく。

一閃。左手に持ったナイフは浅いものの白銀狼を切り裂いた。

「■■■■————」

白銀狼は今の響夜を危険と判断し距離を取ろうと飛び退こうとする。だが——

「おいおいおい？なあに離れようとしてんだよ。もっと楽しもうぜえ！！！！」

響夜はそれをさせまいと間合いを詰めていく。

「神殺しの鎖グレイブニル！！！！」

速度の差か響夜はこれ以上離されないよう白銀狼と自分の右腕を鎖で繋ぐ。

響夜もまたそれに対抗するように魔力を練り上げる。次の瞬間白銀狼は大きく口を開けそこから冷氣と氷の暴風が放たれる。

「火葬祭^{かそうさい}」

響夜の全身を覆う炎。それは響夜の体を焼き尽くし迫りくる暴風に拮抗する。

「■■■■■■■■■■!!!!!!」

「オオオオオオオオオ!!!!!!」

ぶつかりあう氷狼と炎の魔神。それは互いに拮抗していたが――

「オオ――!!!!!!」

その勢いを増し徐々に氷を飲み込んでいく炎。それはやがて白銀狼へと迫り飲み込んでいった。



焼け焦げ凍てついた矛盾した大地。そこに白銀狼は倒れ伏し響夜はその白銀狼の傍らに立っていた。

「.....」

「ひゅー.....ひゅー.....」

白銀狼はもはや虫の息だった。白銀狼は倒れ瀕死になろうとも響夜を睨み続ける。その瞳には隙を見せれば殺られると思わせるだけのものがあつた。

故に響夜は油断しない。何より響夜は目の前の白銀狼に敬意を覚えていた。だからこそここで殺す。

そう思い響夜がナイフで止めを刺そうとした瞬間。

――！！！！！！

目の前が白に染まった。

響夜はそれに飲み込まれ上空へ吹きとばされた。重力によって地上へと落下する響夜。

ゴキイ！

叩き落とされた彼からは嫌な音がした。

暫く彼は状況を整理すると倒れたまま僅かに辺りを見回す。そして聞こえてくる男達の声。

「しかし、確認する意味あるんすかねえ。あれだけの規模の魔法食らったんすよ？」

「念には念をだ。奴は白銀狼を倒したのだぞ。もしかしたら生きているかもしれない。」

聞こえてくる男達の声と足音から数は5。

「（……狙いは俺か。）」

「断頭台」

燃え移った炎に男は苦しみ叫ぶが響夜はその声を無視して掴んでいた男の両足を切り落とした。男は痛みを訴えるように叫ぶが誰もそれを助けられない。いや動くことが出来ないのだ。先程まで死んでいた男が立ち上がっているという事実には。

「神殺しの鎖」
グレイブニル

その言葉に一人の男は足を鎖で巻かれ何度も何度も地面に叩き付けられる。

「ぎゃ！ぶっ！・・・あ、が。くぶう！？・・・た、たすげえ！！？」

例え何を言っても響夜はその言葉に耳を貸すことなく更にその勢いを強くする。この男達が白銀狼に手を出した時点で助ける等という考えは露ほどもない。

響夜は目の前の二人に歩いていく。二人は仲間たちの突然の死に動揺しているが響夜へと武器を構える。

「ハ—————」

一人の男が魔法を発動する。放たれたのは水流。それは響夜へと当たるが————

「・・・・・・鋼鉄の処女」
アイアンメイデン

その男は後ろから出現した拷問器具に一瞬にして鋼鉄の処女の中へ引き込まれ、断末魔と血が流れた。

「・・・・え？」

その光景が信じられなかったのだろう。最後の一人は間拔けな声を上げ、それを理解すると共に尻もちを着く。

「あ・・・・ああ・・・・。」

男は歩いてくる響夜をみると顔を青ざめ逃げ出そうとする。

「神殺しの鎖」
グレイプニル

だが響夜はそんなことをさせはしない。男の四肢を鎖で繋ぐと空中に磔にする。

「ひ、ゆ、許してくれ!!」

男の目に映っているのは墨のように焼け焦げた仲間と未だに何度も地面に打ち付けられている仲間。それを見た男は涙を流し、その体を振るわせている。

「・・・・頭蓋骨粉碎機」

響夜の言葉と共に目の前の泣いている男の頭に器具が取り付けられる。ギリギリと締め付けていく器具。男はじわじわと締め付けられる恐怖に漏らす。

「い、嫌だ!死にたくない!頼む、頼むから助けて!!お、お願いだから!あ、ああ!」

男の声を無視して響夜は背を向ける。後ろから男の悲鳴が聞こえ

るが響夜はそれすらも無視して無表情のまま白銀狼に近寄り炎を消した。

「……………」

僅かだが白銀狼は生きていた。だがその体は力なくぐったりと倒れ目も瞑ったままだ。

「……………後味悪いだろうが。」

響夜は小さく舌打ちをすると想像形成を使う。

「勝手に死んでんじゃねえよ。」

響夜の手握られたのは小さな短剣。響夜はそれを白銀狼に刺すと魔力を流し込んだ。

「……………」

響夜の全身を疲労感が襲う。だが先程より白銀狼の息は少しだけ落ち着いていた。響夜はそれに少しだけ安堵しつつ。響夜は辺りを見回す。

「……………ゴミ共が。」

そう言って響夜は魔族達の死体を焼き尽くすと白銀狼を再び見る。

「お前もゆっくり休みたいもんな。」

響夜は白銀狼にそう言うのと神殺しの鎖を籠のようにして白銀狼を

持ち上げた。

「……形成。」

創り上げたのは小さな小屋。丁度白銀狼が入れる程度の余裕のある小屋である。響夜はそこに白銀狼を運ぶと自らもその小屋に入った。

「……ま……ず。」

響夜は立ち眩を起こす。先程の治療。魔力と一緒に響夜は生命力も流し込んでいた。如何に響夜が半不死といへど流石に生命力は不味かったのか。響夜は白銀狼を寝かせるとそのまま倒れるようにして眠りに落ちていった。

殺人鬼の怒り（後書き）

感想、批判、意見がありましたらどうぞ送ってください。

あ、あとこの作品のタイトルは今のところ仮タイトルなので何か思いついた方どうか送ってください。

殺人鬼は冷汗が止まらないそうです（前書き）

「・・・・・・・・・・眠いのじゃ。」

b y
マオ

殺人鬼は冷汗が止まらないそうです

「・・・・・・・・・・。」

おは・・・まだ太陽すら出ていなかった。畜生、恥ずかしいじゃねえか。

俺はそんなことを考えながら脳を覚醒させる。

「少し、無理しすぎたか。」

マオからの供給があるとはいえ白銀狼の戦いと汚物ゴミの処理に魔力を使いすぎたな。加えて生命力も削ったからな。

「まだ夜か。」

空には三日月が輝いている。気のせいか月は赤みを帯びている様に見える。

俺は月から目を離すと立ち上がろうとする。

「・・・・・・・・・・あ?」

だが俺が立ち上がろうとすると突然襟首を引っ張られ俺は尻もちをつく。

「・・・・・・・・・・。」

後ろを振り向けばそこにいるのは薄汚れているものの月の光を浴び幻想的な姿で座っている白銀狼。その瞳は俺を捉えていた。

「・・・はっ・・・はっ・・・」

「・・・・・・・・」

俺は再び立ち上がろうとする。だが俺の進行を遮る様に出される尻尾。

俺は右へ避けようとする。すると右へ振られる尻尾。

「・・・・・・・・」

俺はそれを左へ尻尾の下を潜り抜けて行こうとする。すると下に振り降ろされる尻尾。

それを何回か俺たちは繰り返し、俺は動くことを諦め白銀狼を見る。

「・・・わう。」

「・・・・・・・・ああ。」

何か良く分からんが俺は適当に答える。白銀狼は俺へと顔を近づけると頬を舐め、一声鳴く。

「・・・・・・・・」

やべ、何か懐かれた。

俺は白銀狼の姿を見てそう感じた。あの汚物が邪魔をした時点でもう此奴を殺す気など俺にはなくなっていた。

ただ此奴に懐かれるのは構わないが此奴を連れて俺が街に戻ったら危険だ。白銀狼討伐の依頼なのだから討伐対象の此奴を連れて行く訳にはいけないだろう。俺の信用にも関わってくる。

「…………どうすっかなあ。」

俺がこれからのことを考えていると突然目線が高くなる。白銀狼が俺の襟首を口で器用に咥えたのだ。

「…………おい。」

俺の声を無視——俺を咥えていて発音できないのかもしれないが——して小屋の扉を開けると歩いて行く。

え、ちょ、俺を離せ。

そんな俺のことなど露知らず。白銀狼はそのまま俺を咥えて森の中に入ってしまった。



「…………気持ち悪い。」

俺は今泉の近くでぐったりとしていた。白銀狼に咥えられていたがあいつ突然走り出しやがった。咥えられてるこっちは何も出来ねえから揺れる揺れる。この泉に着いた時には天と地がどっちか分んなくなっていた。

「くそ、自分だけ水浴びしやがって。」

俺は泉の中心で水浴びをしている白銀狼を睨む。

あゝ、気持ち悪い。…………おえ。

やがて吐き気が治まり調子も良くなってきた俺は上半身裸になると

泉に入る。外だし何時襲われるかも分からねえからこれが良いだろう。

「……お前はもう少し俺のことも考ろよ。」

俺は横にいる白銀狼の体を撫でながら言う。柔らけえなく。ふさふさぞおい。

俺はその毛に顔を埋める。

「……………」

何これ気持ちよすぎだろ。くそ、強敵だ。

俺は思わずそう考えながらもその毛の感触を楽しむ。

「……………」

俺は本来の用事である水浴びを思い出しハッとする。白銀狼は俺が離れると先に陸に上がり水を飛ばしている。俺はそれを見ながらも取り敢えずタオルを創りそれで体を拭く。

一通り体を拭き終わると俺は泉から出る。

「何やってやがる。」

俺は服を洗おうと取りに行くと俺の服と戯れている白銀狼。

……此奴の考えてることが俺には分からねえ。

「取り敢えず返せ。」

「・・・くゝん。」

俺は白銀狼から服を奪い取ると泉で洗う。止めろ、そんな泣き声出すな。俺が悪いみたいじゃねえか。

「最初の姿も見ろ影がないな。」

最初はあれだけの気迫を持っていたのに。

俺は思わず嘆いてしまった。俺は洗い終わった服を適当に創った棒にぶら下げ集めた枝に火をつける。

「・・・お前どうするかな。」

俺は一番の問題について考える。

恐らく此奴は街まで付いて来る。ならどうにかしないといけないだろう。

「お前どうにかして街に入れねえの？」

俺は無駄と分かっているが白銀狼に問いかける。白銀狼は僅かに首を傾げた。

「・・・どうするかなあ。お前が俺たちちみてえになればいいんだが。」

「ガウ！」

白銀狼は元気に返事をする。

「はいはい。」

俺はそれに適当に相槌を打っていると突然白銀狼に異常が起こる。
白銀狼が光りだしたのだ。

「……何か俺したっけ？」

俺はその現象に顔を引き攣らせる。これやばくね？と。

「……わん。」

やがて光が消えそこにいたのは可愛らしい声で犬の鳴き声の真似をする一人の少女。

「……お前白銀狼か？」

「……ん。」

俺の問いに少女は頷く。その動作で薄く水色がかっている銀髪が揺れる。

「人間の姿になれたのか？」

「ん。」

少女はまた短く答える。だが完全に人間になってはいない。少女には獣耳と尻尾がある。恐らく獣人と言った方が近いのだろう。

「……名前は何て言うんだ？」

「……ない。」

俺はその言葉に思案する。ふと目に入っただのは揺れている銀髪。

「……………よし、お前の名前は今からハクだ。」

俺はそう言って少女、ハクの頭を撫でる。ハクは気持ち良さそうに目を細めその尻尾はパタパタと揺れていた。

……………畜生、触りてえ。

「取り敢えずハク先ずは服を着るぞ。」

俺はハクにそう言う。

そう、ハクは今全裸で俺の目の前に座っているのだ。いや、俺は変態じゃねえから特に何も感じない。だが世間的には服はちゃんと着た方がいい。本人が良いと思って俺が凄い目で見られるから。

「……………これ。」

そう言ってハクが握るのは俺が着ている服。そう言えばさっきも俺の服で遊んでたな。

「まあ、別に構いやしないが。」

ハクのサイズに合う服なんてのは俺のスキルでも無理だ。その場合正確な寸法が必要になる。なら俺の服済ませられるならそれが良い。大きいから捲れば問題ないし、自分の服は幾らでも創れる。

俺は自分が着ていた服をハクに渡す。

……………パンツ一丁は結構寒いな。

「何か毛布でも創るか。」

俺は想像で大きめの毛布を創り包まる。一応ハクの分も創って渡しておいた。

「・・・・・・・・ん。」

俺が毛布に包まって温まっているとハクが入り込む。

「おい、お前の分は渡しただろうが。」

寒いんだ。

俺はハクにそう言うがハクはもう一枚の毛布を俺に渡す。

・・・・・・・・。

「二枚使えと？」

「・・・・・・・・。」

無言でハクが頷く。

「お前は良い奴だ。」

俺は二枚の毛布を繋ぎ合わせると包まる。大きくなったからかハクが入っても余裕がある。

「・・・・・・・・ぬくぬく。」

「全くだ。」

ハクの言葉に俺は頷く。俺たちがそのまま温まっているとノイズが

走る。

『・・・夜！響夜！！無事か！？』

「うお！？」

「・・・？」

その声量に俺は頭を押さえる。そ姿にハクは首を傾げている。
・・・マオか。

『響夜！聞こえているか！！』

「ああ、聞こえてる。」

これ以上騒がれたら堪らない。俺はその言葉に返事する。

『良かったあ。無事だったか。昨日魔力がどんどん使われていくし
帰ってこないしで心配したんだぞ！！』

「・・・悪いな。色々あったんだ。」

『心配させるでない！今からそちに転移する！！そこを動くでないぞ！！』

その言葉と同時に一方的に会話は切られた。

「転移って・・・。」

たしか証があれば問題ないとか言ってたが。

俺がそんなことを考えていると真上に方陣が展開される。

「おい、
・
・
・
・
まさか。」

俺が急いで立ち上がった時方陣からマオが落ちてきた。

「ぐ・ぼ・~~~~~!!!!」

マオは俺の腹に思い切り落ちる。それは丁度俺の腹にクリーンヒットしその痛みに俺は悶絶する。

「響夜！無事か！！」

マオは俺の姿を確認するとすぐさま近づいて来る。

たった今、エの所為で俺は死にかけたぞ！！

俺はそう言いたかったが痛みに声を出すことが出来ず低く唸る。

「
•
•
•
•
•
丈夫？」
」

恐らく大丈夫と言いたかつたのだろう。ハクがトコトコと歩いてきて声を掛ける。その姿を見たマオは俺を見る。般若の形相で。

「響夜？此奴は誰じゃ？」

$$\left[\begin{array}{c} \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \end{array} \right]_0$$

未だに腹の痛みに耐えている俺がそんなことを言える訳がない。その姿を見てハクがフオーを入れる。

「……私、この人一緒にいた。」

違うぞハク！？お前が入れるべきなのはフォローで決して油じゃないぞ！！？

その言葉を聞いたマオは今まで見たことがない程の笑顔を浮かべていた。

この時俺は人は怒りの沸点を超えると笑うのだということを知った。

「・・・そうか。主は我が心配している間ずっと女とおったのか・・・。ふふふ・・・。」

俺の幻覚だいいがマオから薄らと黒い何かが漏れている。それが見えたのかハクも何時の間にか離れている。

「死ねえ！！！！この馬鹿者がああああ！！！！！！！！！！」

「っ！お、ば、らああああああああ！！！！！！！！！！？」

マオが魔力を伴って放った拳は俺に直撃し吹き飛ばした。

この日今までにない程の痛みを感じ俺の意識はブラックアウトした。

殺人鬼は冷汗が止まらないそうです（後書き）

感想、批判、意見がありましたらどうぞ送ってください。

常識を考える殺人鬼は今までいたのだろうか（前書き）

「最近不幸多すぎじゃね？」

b y 響夜

「……………がおー。」

b y ハク

※今回は短いです。

常識を考える殺人鬼は今までいたのだろうか

太陽が丁度真上に昇っている頃俺は目を覚ました。

「……………手加減しろよ。」

俺は日射しで目を瞑りながら呟く。

「五月蠅い。主が悪いんじゃない。」

どうやら犯人は随分近くにいたらしい。

俺が今の呟きを聞かれたこと少し後悔していると太陽の光で塗りつぶされた視界に影が入る。

長く絹のような黒髪。そして綺麗な紫の瞳。

「……………少しやりすぎた。……………済まぬ。」

マオは少し顔を背けて言った。

「いや、別に。……………ここは？」

「馬車の中じゃ。運ぶのが大変じゃったぞ。」

「……………ま、お。キョーヤ起きたから……………どく。」

俺達が話していると近くから声がする。1

「・・・ハクか。」

俺の視界にもう一つ影が入り込む。

太陽に照らされて輝き儚いイメージを与えるマオとは正反対の薄い水色がかった白銀の髪。そしてその姿を更に幻想的にさせている金色の瞳。

その人物であるハクは髪をリボンで一つに束ねている。

「ん。」

名前が呼ばれたことが嬉しかったのかハクは尻尾をパタパタ振る。
俺はその様子を見てから頭を起こす。

「・・・・・・・・。」

ゆっくりと流れていく風景。ガタガタと馬車が揺れているがそれが心地よく感じる。

平和だ・・・。

俺はその心地良さに目を瞑る。

「・・・響夜？」

「?」

二人が俺に話しかけるが俺は目を瞑りやがて襲ってきた睡魔の誘惑に身を委ねる。

意識を落としたかけた俺が最後に感じたのは両脇から感じる温かな感覚だけだった。



「…………夜。響夜。」

「……………」

誰かが俺を呼ぶ声。俺はその声に意識を浮上させた。

「…………街に着いた。」

そう言って話し掛けるのはハク。街が楽しみなのか獣耳も尻尾も元気でよく動いている。

「熟睡など主にしては珍しいの？」

左隣にいたマオが心配そうに言う。

まあ、俺が隙だらけの状態で眠ることなんてないからな。

「お前等を信頼してるからな。」

俺は二人の頭にポンと手を置くと先に降りる。二人は少しの間茫然としているがその意味を理解すると二人は笑顔で俺の後を追いついてきた。

「響夜が優しくなったのじゃ。」

「キョーヤは最初から優しい。」

俺の隣で二人が話している。

「まずはハクの服が先だ。それじゃ歩きにくいだろ。」

俺はそう言うがハクは首を横に振る。

「や。響夜の服これが言い。」

ハクはそう言って難色を示す。

「止めなさい。」

俺とマオはそんなハクを半眼で見ながら言った。

先ず俺が変態だと誤解を受ける。さらにハクが変な発言をしたら俺は社会的に死ぬ。

今でさえ結構この状況はやばいというのにそんなことをされたら堪ったものではない。

状況がどう転がろうと世間的には俺の死しか待っていない。なんと
いう無理ゲー。クリア出来ないとか最近の子供は絶対にやらないだ
ろう。

先ずはハクにきちんとした常識を持たせよう。

……殺人鬼が常識を説く日が来るとは今まで思いもしな
かったな。

——只今教育中——

「……服買いに行くか。」

「……ん。」

きちんとした常識をハクに教えた俺とマオはそこで教育を終了し服を買いに行くことにする。気のせいかなハクの尻尾はショボーンという音がでそうな感じで下がっている。獣耳伏せていた。

「どんな物を買うのじゃ？」

「あゝ……。」

そうか俺そう言うのは全然分からねえんだよな。買い物はマオに任せるか。だが……

「その前にギルドに寄るぞ。」

生憎持ち金は魔導具に使っちゃったから食費位しかない。ハクからは討伐の証拠である牙を貰っておいた。他の魔物がどうか知らないが白銀狼の牙はまた生えてくるから問題がないらしい。

やはり長寿だとそういうものがあるのだろうか。

ギルドに着いた俺達は白銀狼討伐の証の牙を出しついでにハクのギルドへの登録も済ませておく。こうしておいたほうが後からまた来るよりは楽だからな。

受付嬢からも戻ってこないから心配された。いい奴だなあ。

「お前達は服を見てきて良いぞ。」

「響夜はどうするのじゃ？」

俺の言葉にマオは首を傾げる。

「俺はまだこっちに用があるからいい。」

「む、そうなのか。」

「キョーヤ来ないの。」

マオは納得したようにハクは少し悲しそうに言う。

やめろ。俺が悪いみたいじゃねえか。心なしか受付嬢からの視線が痛い。

「ほれ。後で何処か連れて行ってやるから。」

俺はそう言って名残惜しそうな二人を送る。

俺は二人が向うのを一瞥するギルドの食堂にあるテーブルに目を向ける。

「・・・・・・・・・・よう。」

「こ、こんにちは。」

「おう！初めましてだな。」

申し訳なさそうな顔をしているエルザと恰幅の良い上半身裸の男。

俺はついエルザを生暖かい目で見てしまった。エルザはその視線を見てないかというように顔を背けた。

「主がキョウヤという男か？」

俺がエルザへ説明を求める視線を送るよりも早く男は口を開いた。
一応話は通じるタイプのようなのだ。

「ああ。俺が響夜だ。」

俺の返事に男は笑う。何だろっ嫌な予感がする。

「俺の名前はガルラ・アルフレッドだ。まあ『千武』と言う奴もいるがガルラと呼んでくれ。」

その言葉で俺は思い出した。視察に来ていたのは二人だということに。

今の名前から此奴がもう一人なのだろう。

「で、俺に何の用だ。」

周りからの視線が多くなってきたから早めに頼む。

「なあに少しお前に興味があつてな。」

ガルラはそこで言葉を区切ると不敵に笑った。

「エルザに訓練とはいえ引き分けなった男がどれほどの者か見たかったのだ。」

「で？ 実際会ってどうよ？」

「良いな。お前からは強者の気配を感じる。人の皮を被った獣のようだ。」

面白いこと言うな此奴。

だがその感情とは正反対に嫌な予感が増していく。
あれ、おかしいな。汗がすげえや。

「ぜひ、俺とも戦ってほしいものだ。」

・ ・ ・ ・ ・俺の人生終了のお知らせですか？

俺はそんなことを考えながら此奴が———というか周りにいる奴が———碌でもない奴ばかりなのだということを悟った。

俺は最近急激気増してきた不幸をこれでもかというほど呪った。

常識を考える殺人鬼は今までいたのだろうか（後書き）

感想。批判、意見がありましたらどうか送ってください。

殺人鬼は連続エンカウトがしたいようです（前書き）

「殺人鬼は獲物を狙う獣と同じだ。」

b v 響夜

殺人鬼は連続エンカウンドがしたいようです

「勘弁してくれ。」

俺が目の中の『千武』——ガルラにしたのは拒否。今戦うことなんてのは出来ない。ハクへの生命力を受け渡した影響は未だに残っている。足がガクガクだ。

「だが断る。」

「巫山戯んな！」

俺はもういっぱいっぱい何だよ!!

「俺は帰る。」

「帰さん。」

「帰らせろ。」

「俺と戦ってくれるまでは帰さん。」

「デメエは餓鬼か!!」

言いいあう俺達。相手が何を言おうとも俺達には譲れぬものがあつた。

「帰せ！」

「帰さん！」

「帰せ!!」

「嫌だ!!」

そんな言いあい。傍で聞いているエルザも額に手を当てため息を吐いている。

周囲が呆れ返っている中俺とガルラの言い争いだけが響いていた。



「……………やってらんねえ。」

あの後俺は街を歩いていた。互いに一步譲らぬ戦いの結果、戦うのは五日後となった。

その間に俺がやるべきことは体調の回復と魔力の扱い方の訓練。そして——魔導具。もしくは神器の入手。

「神器の確保はほぼ無理。だとしたら魔導具の準備か。」

魔導具はピンからキリまであるがどれも中々の値段だ。ハクの牙で依頼達成の報酬を貰ったがそれも服代や宿代で半分近くは残しておかなくてはいけない。

「……………依頼貰って来たしそれで我慢するか。」

俺は手元にある三枚の用紙を見る。
・大鬼討伐依頼

・魔剣調査

・マンドラゴラ採取

「……………」

このうちの一枚は千武に戦う代わりにギルドを説得してもらい得た物だ。

オーガと戦えばそれだけ戦闘経験が豊富になる。千武との戦いでも役に立つ。

魔剣調査は危険と判断すれば破壊が目的。だが手に入るのなら俺が手に入れ札を増やしておける。

マンドラゴラは……興味と金から。それ以外特になし。

「大鬼からだな。」

俺はマオとハクに一言連絡を入れ街を出る。

二人とも着いて来たがっていたが今回は一人で行きたいと言い二人を諦めさせた。

街道に出て馬車を呼ぶと俺はそれに乗り。カタカタと揺さぶられながら目的地へ向かっていった。



鬱蒼とした森の中。木々が山肌を覆い草木がその土を潤しているその一角に小さな広場が出来ていた。

「ガアラアアアアアアアアアアア！……………」

齢百の大樹に及ぶ筋肉が凝縮された腕。長いボサボサの白髪は悪臭を放ち。その顔は二本の牙と額の一本を生やした鬼だった。左腕に持った巨大な木を振りまわしながら大鬼は叫ぶ。目の前にいる異

物を排除するために。

「断頭台^{ギロチン}!!」

相對していた白髪紅眼の男——響夜は大鬼の周囲に断頭台の刃を展開する。

「死刑執行。」

その言葉と共に放たれる十の凶器。大鬼はその全てを大樹で薙ぎ払い、躲す。

「オオオオ——!!」

その荒れ狂う大樹を躲し響夜は大鬼にナイフを振るう。

——ガキィ!

だがそのナイフは大鬼の体に傷を付けられず逆に怒りを買うだけ。ナイフは折れ、砕け散る。響夜の判断は迅速であった。

「ッ——」

迫りくる右拳を響夜は体を捻り躲す。そして創り出すは一本の長剣。

響夜はそれで大鬼の右腕を斬り付け突き刺した。

「グウラアアアアアア!!!!」

その痛みに大鬼は叫びその瞳に憤怒の激情を映らせていた。

響夜はその瞳を見て笑う。

「こいよ木偶の坊。遊んでやるよ。」

大鬼は走り出す。その速さは今までの動きの比ではない。

響夜は魔力が感じられないことから恐らくはスキルだと判断すると自らも魔力とスキルを併用し相対する。

駆け抜ける閃光と荒ぶる災害。その戦いは熟練の冒険者が見ても舌を巻くものであった。

大鬼を圧倒的速度で翻弄しその体を切り刻んでいく。大鬼は膝を地に着けることはしない。手に持っていた大樹を投げ捨て大鬼は自らの拳で反撃する。

「キヒヤヤヤヤや!!!!」

響夜の顔もまた愉悅に染まり、その唇を歪める。その太刀筋が揺らぐことなく逆に徐々に鮮烈され鋭さを増していく。

「グレア!!」

だが大鬼は自らの体を犠牲にして響夜の動きを止める。長剣は大鬼の体を貫くが剣を引き戻すことが出来ない。その一瞬の隙を逃さずに大鬼は響夜の体を殴りつける。

響夜が逃げ出す前に大鬼は響夜の手を掴み何度も殴る。

「—————」

だが響夜は決して大鬼から目を離さずに大鬼が拳を振り上げた瞬間

一閃

右手に創り出した薙刀で大鬼の眼を横一文字に切ったのだ。

「ガ！アゝアゝアゝ！！！！！！」

その激痛に眼を手で覆い叫ぶ大鬼。その隙に響夜は大鬼の懐に入り薙刀を太股に突き刺す。だがその一撃で終わりではない。

「—————」

連撃。一回限りの武器。響夜は次々に武器を創り出す。

長剣、大斧、槍、太刀、ナイフ

創り出された武器は次々に大鬼の体へと吸い込まれていく。そして響夜が新たに創り出すのは今まで創れなかったもの。

「我が軍勢よ」
レギオン

響夜の背後の空間が波紋を立て歪む。空の魔法を極限まで使い創造形成に組み込む。

現れるのは無数の黒き塊。無数の銃口。それは目の前の獲物を蜂の巣にしようと唸りを上げる。

ガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ！！！！！！

周囲を圧倒する悪魔の叫び。それは全てを蹂躪し何者も寄せ付けない破壊の証。

「オラオラオラ！！早く逃げねえと肉塊ミンチになっちまうぜえ！？もう遅いかもしれねえけどよオ！！」

その悪魔たちを従える一人の殺人鬼は嗤う。それに答える声など当然なく。そこにあるのはかつて大鬼だった物だった。

それを見た響夜の思考は一瞬で元に戻った。

「・・・なるほど。空の魔法で空間を歪めれば銃口のみを任意の空間に構えられるか。」

あとはその合図を（ひきがね）をするだけ。

そして用が終われば倉庫の中へと入れ使用時に空の魔法で再び展開。

「中々良い。」

だが違う。

響夜はそう言い放つ。確かに広範囲、高火力。充滿する硝煙ベクトルと弾ける生命かがやきは自分好みの物だ。だが自らが望むものとはまた方向が違ベクトルう。

響夜は展開されていた銃火器を倉庫へ仕舞うと歩きだす。

「魔剣・・・どれだけの物か。」

神器に匹敵するものであれば僥倖。そうでなくとも魔剣と呼ばれるほどの物なのだからそれなりの魔導具であろう。

響夜は街道に待たせてある馬車へと歩いて行った。その牙を磨きながら次なる獲物を狩るためにその獣は動き出した。



既に空には月が昇っていた。馬車から降り響夜は森の中を歩きながら自分のことについて考える。

「……魔剣。」

響夜はマオからある程度の知識は与えられていた。だがこの世界に来て約三週間。この間だけでも、マオから与えられた知識は全てではないことが分かる。さらにマオが知らないこともある。

不意に響夜はポケットから赤い欠片を取り出す。それはこの世界に来てゴブリンと初めてと戦ったときに手に入れたもの。マオの知識にもものっていない物だった。

「何処からこんなものが手に入るのか。」

この欠片に高密度の魔力が溜め込まれているのはわかる。今もこの欠片からは微弱だが僅かに魔力が放出されている。ただこれが元は何なのかが分からない。

「……?」

響夜はそのことに首を捻る。

「……魔力を放出する。」

響夜は何かを感じた。どこかで知っているような喉元まで上がっているのにそこで引掛り口からその言葉が^{こたえ}出ない。

「……。」

その不快感を消そうと響夜は自身の記憶を探るが答えは見つからない。

響夜はそのことに僅かな苛立ちを感じながらもそれ以上考えることを止める。今の目的は魔剣の入手なのだから。

「・・・とつとと行くか。」

響夜はこの不快感を消し去るように足早で森の中を歩いて行った。



魔剣はどうやら突き刺さっている物ではないようだ。

魔剣が封じられていた台座の残骸を見て響夜は思った。周囲の外壁も破壊され床も亀裂が走っている。

「・・・所有者がいたのか？」

それとも・・・。

響夜はそこまで考え、これ以上ここにおいても意味がないと動きだしながら近くの村から聞いた情報を思い出す。

数日前に響き渡った何かの叫び。その翌日から次第に発見された何十匹という化け物の惨殺死体。そしてこの現状・・・。

「・・・おもしれえ。」

響夜は自らの出した答えが合っている時のことを考え笑う。その瞳には僅かな警戒と敵意、そして愉悦。

殺人鬼は笑う。これだけの力を持つ者と渡り合えるのだと。

「マオ、ハク、エルザ、ガルラ・・・。ああ、この世界は良い。」

こんなにも俺を楽しませてくれるんだ。」

決して向こう側では味わえない感覚。うんざりもしていたがその
実彼はこの現状を楽しんでいた。だが心の何処かでこの平和な日々
を気に入っていた自分がいたのも事実。

彼は苦笑する。これは魔剣に失礼だろうと。魔剣という極上の獲
物と戦うのに巫抜けた自分では駄目なのだと。

瞬間、殺人鬼の顔からは表情が消えた。

「・・・・・・・・・・。」

今この場より殺人鬼の本領が発揮される。

殺人鬼と魔剣。今宵、一人と一本の闘争が幕開けた。

殺人鬼は連続エンカウンドがしたいようです（後書き）

感想、批判、ご意見がありましたらどうぞ送ってください。

今回少し文章を変えてみました。主に最後の方を。

少しずつではありますがお気に入りに登録してくれている方が増えてきて嬉しいです。おかげで自分の創作意欲も増してきています。まだ拙い文章かもしれませんがこれからもこの作品をお願いします。

殺人鬼と魔剣、二人だけの舞踏会（前書き）

「デメエは俺から逃げられねえ。」

b
Y
響夜

殺人鬼と魔剣、二人だけの舞踏会

深い闇に包まれた森の中。白髪の殺人鬼は疾走していた。

既に魔剣が封じられていた場所からは100？は離れているだろう。

彼が本来持つ人として異常なまでの能力値。神器——悪魔の心臓グリモア・ハートの

再生力による体力の回復。そしてスキルとして現れている二つのスキル。彼はその二つを最大限に発揮させていた。たとえ僅かな痕跡であろうともその観察眼から逃れられず、その鬼神のごとき身体能力を駆使して標的へと追いつがっていく。まるで血の臭いを嗅ぎ付けたハイエナのように。

「・・・・・・・・・・。」

ああ、臭う。臭うぞ。死の臭い、血の臭い、憎悪の臭い。ああ、心地良い香り。何よりも腐り果てた血潮と何よりも黒く染まった輝きだ。

響夜は獣のような獰猛な笑みを浮かべる。

この漆黒メツキを剥がせばどれ程の輝きが見えるのか。

そして殺人鬼はその違和感を見逃さなかった。

「・・・・・・・・・・。」

立ち止まる響夜。その視線の先にあるのは僅かに赤く染められた雑草。響夜の観察眼はその時間、方向さえも見抜いていく。

「・・・・・・・・・・見つけた。」

殺人鬼は標的の場所を把握する。そして再びの疾走。獲物を見つけた獣の勢いはもう止まらない。ただ目の前の獲物の首を食い千切

大剣を振るい破壊する。

「地獄車」

刺を生やす炎の車輪は魔剣へとぶつかるが素手で破壊される。

「火葬祭」
かそうさい

響夜の全身が炎で覆われ。その体を激痛が襲う。だが響夜にとつてその痛みは許容範囲内。より力を求めるのならば何かしらの代償を払う。対価のない無償の力などほばあり得ない。古今東西世界は何時だってそうだった。呪という属性はそれを如実に表していた。強さの代わりに自らも何らかの反動を受ける。ああ、確かに扱える者などほばいないのだらう。強くなりたいと願うほどにこれは自らを傷つけるのだから。

a a a a ! ! !
「L i i i i i i i h a a a a a a a a a a

その俺の姿を見て魔剣は笑う。そして次の瞬間には魔剣は高く振り上げられていた。神速で振り下ろされる魔剣。魔神の観察眼による恩恵によって響夜はその一撃に対応することが出来た。

振り下ろされる魔剣を響夜は右手で受け止める。

1000

その衝撃に響夜は顔を歪める。受け止められたものの、その衝撃は響夜の全身に響き渡った。

今の一撃で右腕の骨が砕けた。だがその痛みも一瞬、悪魔の心臓を植えつけられている響夜にとってはその程度の攻撃など何の意味

も持たない。

響夜はその剣を弾くと攻勢に出る。創り出すのは二本のナイフ。既に両者の距離は魔剣の間合いではなく響夜の間合い。次々に繰り出される連撃。その斬撃を魔剣は腕で弾き身体を反らし躲す。だがそれでもこの攻撃からは逃れられない。そのはずなのに

ガキーン！

響くのは鈍い音。斬り付けているナイフは魔剣の身体に傷を付けられず、逆にナイフが砕け散るさま。響夜は苦虫を噛み潰したような表情をする。

そしてその隙の逃さず魔剣は反撃を開始する。音速をも超える勢いで振られる大剣を何とか躲していくが徐々にその体に傷は増えていく。悪魔の心臓の方が再生は速いが防御が崩れればその再生スピードを上回る威力と速さの攻撃がくる。その攻撃に耐えながらも響夜は想像を開始していた。

強度が足りない。構成が甘い。一撃で破壊できるだけの力を、目の前の規格外と戦えるだけの強さを。ただそれのみを求めた想像を・・・！

響夜は自らの想像をより高みに昇らせていく。

「……………」

目の前にいる魔剣と同等の力を誇れるだけの想像。いや、自らの存在を魔剣と同等の存在だと想像する。それは徐々に形を伴ってこの世界に顕現していく。

「俺は喧嘩弱いからよ。」

凡人が強者へ勝ちたいと夢見ること。誰だって一度は夢見る。憧

きを止めた。

「……………もうお前は逃げられない。」

響夜は魔剣へと近づく。

「お前が俺に勝つことなどなく、俺がお前に負けることなどありはしない。」

響夜はその手にある魔剣へと手を伸ばし———掴んだ。

「俺の体、取れるものなら取ってみろ。」

ただし———

「取れなかったらテメエは俺の物だ。」

瞬間、響夜の全身を激痛と狂気が襲いかかった。

襲いかかる狂気の渦。今まで魔剣に吞まれてきた者達の悲鳴。断末魔。その全てが響夜へ手を伸ばす。

まだ！まだ死にたない！！

お母さん！！

何で俺が死ななくちゃいけないんだ！！？

誰か、たす・・・け・・・

いやあ！！

皆もう死ぬんだ！誰も助からない！！

次々に聞こえる叫びの中。響夜は亡者に全身を掴まれながらもその決して吞まれず寧ろ笑みを浮かべていた。

「くく、はははははははははは！！これが魔剣！？この程度か！」

響夜は笑い続けやがて高らかに言った。

「ああ、！！！」

亡者たちの叫びが木霊する中、響夜は嗤い続けていた。



突然、響夜の意識は覚醒した。そのことに特に驚く様子もなく響夜は自分の手の中にある物に目を向けた。そこにあるのは殺意と魔力が込められた掌ほどの漆黒の球体。響夜はそれが魔剣なのだと本能で理解していた。

「・・・・・・・・。」

響夜は魔神の観察眼を発動させその魔剣の情報を読み取っていく。そしてその情報を見た響夜はその顔に更なる愉悦を浮かべた。

「ああ、実に俺向きの得物だ。」

響夜はそのポケットの中から赤い欠片を取り出す。

「・・・・・・・・想像形成。」

その言葉と同時に黒い球体は赤い欠片を飲み込んでいく。欠片を

完全に飲み込んだ時、それは起こった。

・・・ドクン

何かが脈動する気配。見れば球体には赤い線ラインが浮き上がっていた。そして球体から放たれる魔力もまた先程よりも濃密なものとなっていた。

「・・・元があれば強化は可能。」

響夜はその球体を見てそう呟く。

材料を想像する際の基盤として固めておけばそれを基として新たに強化、進化させることが出来る。この結果に響夜は満足そうに頷く。

「切り札ジョーカーは手に入った。」

後はこれの使い方完璧にするだけ。

響夜は次の依頼の時にでも使ってみるかと思えると最後の依頼のマンドラゴラへと歩いていく。その姿は新しい玩具を手に入れた子供のようだった。

決闘開始まで残り三日

殺人鬼と魔剣、二人だけの舞踏会（後書き）

感想、批判、意見がありましたらどうぞ送ってください。

動きだす殺人鬼達の物語（前書き）

「……帰って来てこれは酷いと思う。」

b
v
響夜

動きだす殺人鬼達の物語

「耳がいてえ。」

俺は馬車の中で横になりながらぼやいていた。鳴き声が凄いというのは聞いていたがこれは酷い。耳元で聞いたから鼓膜が破れやがった。いや、再生するからいいけどよ。

「……………もうこの身体に慣れちゃったな。」

最初は毛嫌いしていたがもう慣れるとは、改めて自分の順応性の高さが恐ろしく感じる。

「形無き略奪者」
ジェロジニア

俺は魔剣を呼ぶ。この魔剣どうやら所有者の体内が鞘の代わりらしい。呼び出せば一瞬で出現する。中々従順な奴だ。

魔剣は剣の形状で現れるが此奴の能力で所有者の望む形になる。重さも所有者はほぼ変わらないから使い勝手がいい。後は血を飲んだ分だけ此奴の能力は上がる。今の状態でも戦闘特化の神器でなければある程度はやりあえるだろう。

「まあ、お前は切り札だからな。」

なるべくなら此奴は使いたくない。もしかしたら何かしらの対策を取られるかもしれないからな。

俺は魔剣をペンダントの形状にして弄る。

「取り敢えず暫く生活の方は大丈夫だよな。」

流石にBランク二つとAランク一つ受けたんだから問題ないだろう。

・・・・・・・・フラグじゃないよな？



街に戻ってきた俺は依頼達成の報告と証拠、金の受け取りを済ますと宿に向かった。

受付嬢がやけに含みのある目で見てきたが俺何かやったか？

「ああ、ガルラのことか。」

多分それだろう。あれだけ大勢の前で言い合ってたからな。

俺は久しぶりになる宿の前に着くと扉を開けた。

「あ、響夜さん！お久しぶりです！！」

俺が宿に入るとロシエルが笑顔で迎えた。

「・・・・ああ。久しぶりだ。」

何となくロシエルの笑顔が怖く感じた俺は早々に話を切り上げ部屋に向かおうとするが

「何で言ってくれなかったんですか？」

ロシエルが声をかけてくる。そんなことを言われても何のことか分

からない俺は首を傾げる。

「ハクちゃんのことですよ。」

「ハク？」

二人が何かやらかしたのか？

俺は疑問に思い席に座ると水で喉を潤しながらロシエルに聞く。

「だから言ってくれても良かったじゃないですか。」

「・・・いや、何が。」

「あんな可愛い娘がいたなんて。」

「ぶ！！！？」

俺は思わず含んでいた水を吹き出す。

「良い子ですね。少し口数が少ないですけどそこがまた可愛くて。」

「おい、ちょっと待て。何であいつが娘なんだ？」

俺は咽ながらも何とか言葉にする。

いったい俺の知らない間に何があった。もしかして受付嬢のあの目もこれが原因か？

「え？違うんですか？マオちゃんに聞いたら顔を真っ赤にしてたんですけど・・・。」

「そりゃ、あいつが初なだけだ。」

くそ、そこで何とかマオが誤解を解いてくれれば良かったものを・・。

俺はそのことに歯噛みするが過ぎてしまったことは性がない。
俺はこいつの誤解だけでも解いておくかと口を開こうとする。

「でも髪も響夜さんに似てますし。」

「それはあいつの髪がたまたま俺に似てただけだ。」

そんなことで娘などと言われたら堪ったものじゃない。俺はあいつの父親になる気もねえしそんな歳でもねえ。

「でも黙ってる時も響夜さんに似てますし。好奇心旺盛なところとかはマオちゃんに似てますよ?」

「だから違うっての。好奇心旺盛なのはあいつが街に来ることは殆ど無いからだろうよ。俺に似てるってのは俺のことを父親だと思ってるから似てるように見えるだけだろ。」

そうだ絶対にそうだ。異論は認めんし反論もさせん。断じて俺はあいつの父親ではないのだ。

その言葉を聞いてロシエルは思案顔をする。

「……どうしよう。皆に広めちゃった。」

「今直ぐ誤解を解いてきやがれ!!」

その言葉に俺は思わず勢いよく席を立ち叫んでしまった。
畜生。何で俺がいない間に俺の立場が凄いことになってるんだよ。
俺はそう嘆かずにはいられなかった。



ロシエルの誤解を解いた筈なのにそれ以上に疲れた俺は部屋に入ると直ぐにベッドに向かおうとし―――気付いた。

「そういや、二つとも占領されてたな。」

あいつらがそれぞれ寝てるのを思い出した俺は床をぱぱと掃除すると横になる。俺が良くても二人は嫌だろうから必然的に俺は床で寝るしかなくなる。

いっそのことケチ臭いこと言っただけでもう一つ一人部屋を取った方が良くもされない。

そんなことを考えながら俺は襲ってくる睡魔に身を委ねた。



・・・。

誰かが部屋に入ってくる音がするのが聞こえた。
その音で俺の意識が僅かに浮上する。

「・・・静かにすのじゃぞ。」

「・・・ん。」

帰って来たのか。俺は二人の声に目を開ける。

「む、起こしてしまったか。」

「・・・おはよう。」

俺が目を開けたのを見た二人は少し申し訳なさそうな顔をする。

「いや、大丈夫だ。・・・おはよう。」

俺がそう言うのと二人が微笑んだ。その顔を見て少しだけ俺の心も和らいだ気がする。

・・・殺人鬼がこんな感情を抱くのもおかしいか。
空に浮かんでいる月を見る限りまだ夜になったばかりか。

「悪いな。帰って来る時連絡入れんの忘れた。」

「問題ないのじゃ。流石に三つ連続は疲れたじやろう。ゆっくり休むといい。」

「キョーヤ、無理は駄目。」

疲れた俺に無理をさせないようにと二人は言ってくる。月の光に照らされて輝いている対照的な二人の髪。きつと誰もが女神と言うのだろう。それだけ二人の姿は幻想的だった。

「いや、もう十分寝たから問題ない。」

「む、本当なのか？」

「ああ、心配掛けて悪かったな。」

俺がそう言くと二人は少し驚きまた笑う。

「キョーヤ、優しい。」

「うむ、変わったのう。最初はもう少し無口で無愛想じゃったのに・。
」

「誰かさん達と一緒にいるからな。」

「「？」」

どうやら自覚はないらしい。首を傾げている二人に俺は思わず苦笑した。

「少し、外を歩いて来る。」

俺は二人にそれだけ言々と部屋の扉を開け宿を出た。

「そこまでじゃないな。」

この世界に四季があるのかは分からないが肌寒いというほどの気温でもない。

俺は宿を出ると当てもなくぶらぶらと通りを歩いていく。

「残り二日。」

決闘までもう時間は殆ど無いな。ギルドで依頼をこなしている暇などない。別にこの勝負は負けてもいいが相手はそれじゃ納得などしないだろう。手を抜いても恐らくあいつは分かるだろう。そしたら何度も戦うことになるかもしれない。

「面倒くさいな。」

俺は愚痴りながら路地裏へとはいっていき止まった。

「出て来いよ。」

俺がそう言うのと背後で足音が聞こえる。その音を聞いて振り返ればそこには上等な騎士装束を着た男が立っていた。

「キョウヤ・ナルカミだな。」

ああ、そう言えばこの世界じゃそう呼ぶんだっけか。

「違う・・・と言いたい所だが、見逃してくれないよな。」

「当たり前だ。貴様をここで逃すわけがないだろう。」

「あの魔族の関係者で？」

ハクとの戦いで処分したゴミを思い出す。別にあいつらを殺したのが悪いとは思わない。先に手を出したのは向こうだ。自業自得、それ以外に思うところなどない。

「・・・そうだ。」

「敵討・・・じゃねえよな。」

「それは油断した奴らが悪い。貴様を狙うのは・・・貴様が邪魔だからだ。」

そう言って目の前の騎士は剣を抜く。交渉は無理。敵意丸出しの奴にどうやって交渉を持ち掛けろと？ 対価は俺の命とかほざきそうな奴だぞ？

「……そうかよ。なら――」

俺の背後の空間が歪む。

「殺されても文句はねえよなあ！？」

俺の背後から火球が放たれ目の前の騎士に向かう。

「無駄だ。」

だが火球は騎士の目の前で突然消えた。

「な――」

それを見た俺は驚愕を浮かべる。その隙を逃さず騎士はその剣を横に一閃。

その攻撃を俺はギリギリで回避するが状況は此方が不利だ。俺の背後にあるのは壁。脱出するには目の前の騎士の攻撃をどうにかして掻い潜っていかなくてはいけない。

死にはしないが蹴り殺しは勘弁してほしい。

「くそ！ 神殺しの鎖グレイブニル！！」

俺は奴に向けて無数の鎖を放つ。その攻撃を奴は狭い路地裏の中で壁を利用して躲す。神殺しの鎖グレイブニルもこんな狭い所では十分な力を発揮

できない。迫りくる騎士。まさかもう出番が来るとは――

「形無き略奪者！」
ジャロジーア

瞬間、俺の手には魔剣が握られていた。俺はそれで騎士の攻撃を防ぐ。騎士は眉を顰め。嫌悪感をあらわにする。

「貴様のような人間如きが俺の一撃を防ぐなど。」

「人間如きに防がれる騎士様はよっぽど実力が低いんですねえ。」

「凶に乗るな。」

その一言で騎士は加速する。だがここは狭い路地裏、逃げ場などなく壁ももう使えないだろう。

「デメエがだよ。」

その言葉を合図に迫りくる騎士に向けて魔剣が伸びた。

「!?!」

その予想外の攻撃に騎士の身体は僅かに硬する。だがそれも一瞬、騎士はその攻撃を剣で受け止めると追撃を予想したのか小さく舌打ちし闇にまぎれて消えていった。

「.....」

突然襲ってきたり、いなくなったりと随分忙しい奴だ。

俺は形無き略奪者を体内に戻すと奴が消えていった方向を見る。

「たく、何だか面倒臭いことになってきやがった。」

俺はぼやきながら二人のいる宿へと戻っていく。どっかの馬鹿騎士の性でおちおち街も歩いてられねえ。

俺は深い溜息を吐きながら街道を歩いて行く。本当に面倒臭い。

空を見上げるとそこには俺の気持ちとは正反対に輝いている月が昇っていた。

決闘まで残り二日

動きだす殺人鬼達の物語（後書き）

感想、批判、意見がありましたらどうぞ送ってください。

殺人鬼は過ちをおかそうと考えるのか？（前書き）

「・・・・・・・・記憶消す神器ってねえのか？」

b v 響夜

殺人鬼は過ちをおかそうと考えるのか？

不審者——騎士かどうかよく分らないからだ——に襲われてから俺は念の為警戒し一睡もしなかった。お陰で目の下には隈が出来た。どうやら気持ち昂ぶっていない時は相当気が緩んでいるっぽい。絶対にここの奴らの所為だ。そう思いながら俺は眠っている二人を見る。呑気でいいなあ。などと平和なことを考えてみる。

「……ふあ。」

俺が椅子に座り魔力の扱い方の練習をしているとハクが眠い目を擦りながら起きた。

「……はよう。」

「おはよう。」

寝起きだからか舌足らずな感じだがハクは俺に挨拶をし————何故か俺の膝に座る。

「どうした？」

俺は座ったままのハクを見た。

「キョーヤ……眠ってない。」

「ま、色々あってな。」

俺がそう言っているとハクは俺の膝から退き手を引っ張る。

「?」

「寝ないと駄目。」

その言葉に首を傾げていた俺は納得する。
わざわざ俺に気を使うとは・・・。

「済まないな。」

折角俺のことを考えて言っているのに無下に扱うわけにもいけない
だろう。

俺は立ち上がると空いているベッドに向かうが服の袖を掴まれた。

「こっち。」

そうやってハクが指差すのはマオが寝ているベッド。・・・マジ
か。

「ハク、そっちはどう見てもマオが寝てるだろう。」

俺の言葉にハクは頷くが諦めず口を開く。

「・・・皆で寝たい。」

「・・・。。。」

・・・凄くハクにぴったりな考えだと思ったのは秘密だ。
だがそれで三人で寝る理由にはならん。というか三人で一つのベッ
ドは無理があるだろ。

「・・・・・・・・・・。」

止めろ。瞳を潤ませるな。泣きそうになるな。俺が泣かしてるみてえだろうが。

「・・・・・・・・きよーや。」

クソが。俺は悪くねえのに何でこんな罪悪感を感じなくちゃいけないんだよ。

「わーったよ。分かったから泣きそうな面すんな。」

俺はそう言ってハクの頭を撫でる。

「・・・・・・・・ん。」

ハクは満足そうに頷いてマオが眠っているベッドに飛び乗る。僅かにマオが呻くが起きる気配はない。余程深い眠りなのだろう。

ハクはマオの隣で横になるとマオが眠っている場所とは逆の場所をポンポンと叩く。それ以上煩くなってマオが起きるのも面倒なので俺はハクの右隣で横になる。

「・・・・・・・・おやすみ。」

「ああ・・・。」

正直、その言葉にちゃんと返せたかどうかは分からないが俺は直ぐに眠ってしまった。



ほんの数分か——体内時間としては————そこから起きた気がした。

「・・・・・・・・・・。」

丁度昼間だろうか。真上に昇った太陽の光の所為で眩しい。ふと腕が動かないことに気付いた俺が隣をみると————黒いのと白いのが枕にしてやがった。

この状態を表すなら川の字だな。てか、実際にそうだ。

「・・・・・・・・・・くそ。」

俺はすやすやと眠っている二人を見て悪態を吐く。腕が抜けねえ。

「・・・・・・・・・・そういえば人間じゃねえな。」

うん、片方は魔王でもう片方は獣人(?)だったな。人間の腕力で勝つのってほぼ無理じゃね?

まあ、この程度で俺が諦めるわけねえけどさ。

「・・・・・・・・・・っと。」

・・・・・・・・・・うん、無理。開始3秒で詰んだ。

今、腕の筋肉繊維が千切れる様な音したからな。此奴らどんだけガチの睡眠してんだよ。此奴らと寝る奴は間違はなく自殺志願者だな。

「・・・・・・・・・・腕千切るか?」

いや、多分返り血で起きるだろうから俺が無駄に痛みに悶えるだけか。……どうする。

「これで空の練習でもするか。」

扱う奴によっちゃ転移も出来るらしいからな。

俺はそう考えると魔力を集中させる。想像形成で創ればいいのかもしれないが想像形成での魔法は通常の魔法とは構成が違うから見る奴によっては気付かれるらしい。だったら少しでも多くこの世界の魔法を出来るようにしておくべきだろう。

「………転移。」

転移魔法の構成陣を描くと同時に魔法が発動する。……発動したが。

「………やっちゃった。」

ベッドに沈んじまった。多分、構成が甘いというのと初めて使うから座標もいろいろミスったのだろう。

気にせず俺はもう一度転移する。今度はさっきまでいた場所に転移した。

「……………」

「………」

俺の魔力に反応したのか二人が目覚めます。

「……おはよう。目え覚めたなら退けや。」

俺は目を覚ました二人に言う。冷たい？ いや、俺の負担はそれ以上だから。

二人はまだ頭が回らないのか暫くボーっとした様子で俺を見る。

「「・・・・・・・・・・。」」

俺は二人の視線を感じながらも再び転移魔法の構成陣を描く・・・。

「・・・・・・・・ん。」

ハクが抱きついてくるが無視。

今度はもう少し構成陣の魔力を多くするか・・・。

・・・・ふにゅ。

ハクが胸を押しつけてくるが無視。反応したら負けだ。

「きょーやー。」

今度はマオが抱きついてくる・・・無視。

もう少し座標も細かくした方がいいか？

・・・・ぽよん

マオ、テメエもか。

俺は左右からの刺客を無視して魔法を使う。

「・・・・・・・・転移。」

その言葉と共に俺の姿が消えベッドから少し離れた場所に現れる。どうやら一応成功したらしい。転移出来る範囲は3mという悲しい事実もあるが。

俺はベッドから脱出出来ただけマシだと結論付け椅子に座ろうとす

る。

「響く夜く!!」

「キョーヤ。」

がそれは無理らしい。二人が俺の肩を掴む。

「何だ? あんまり騒ぐな。」

俺の言葉に二人はむすつとする。

「その言い方は酷いのじゃ。」

「キョーヤは女の子への対応がなってない。」

腕引き抜くだけで筋肉線維が千切れる様な奴らを女の子とは言わん。ぐちぐち言ってくる二人に俺は溜息を吐き転移でドアの前へ移動し一回に降りた。

「響夜! 話は終わっていないぞ!!!」

「キョーヤひどい!」

二人は俺を追い掛けて降りてくる。

「静かにしろお前ら。」

俺は騒ぐ二人そう言うと言席に着いて注文をする。

「ロシエル！響夜が酷いのじゃ！！」

「キョーヤがひどい。」

ロシエルが来ると二人は先程の話をする。味方を増やしても現状は変わらないと思うんだがな・・・。
俺はそう思いながら注文の品が来るのを待っていた。



現状が変わらない。うん、そう信じてたんだがな。

「いいですか響夜さん。女の子は繊細で傷付き易いんです。ちゃんと優しく対応してあげないと駄目なんですよ？だいたい響夜さんは何時も二人に対して少し冷たいと思います。そのうえ女の子に恥じをかかせちゃ駄目ですよ！まったく二人はこんなに貴方のことを思っていてくれるというのに貴方は全くそれに応えようもしない。それはもう一人の男として駄目です！！それに・・・」

正直言おう。うぜえ。そして面倒臭い。何だ此奴は、まさか俺に飯すら食わせず床の上で説教とは。見る他の奴ら苦笑してるぞ。後ろの二人はロシエルに同意するように頷いている。

「————聞いていますか響夜さん！！」

「ああ。」

その言葉に俺は返事だけしておく。飯を食ってもいいんだがさつきそうしようとしたら三人が体の関節外しやがった。壊れたわけじゃねえからこれは治らない。強引に戻しといたが痛みは残っている。

正直少し涙目になった。関節を同時に三か所以上外されるのは死ぬ。

「分かりましたね響夜さん。」

「・・・・ああ。」

「よろしい。では今夜からでも二人には応えてあげてくださいね。」

そう笑顔で言い放つロシエル。

は？・・・・もしかして俺とんでもないことに返事した？やばくね、何、何に応えろと？くそ、聞いてなかった過去の俺をぶっ殺したい。

「・・・・・・。」

俺はとりあえず飯だけでも食おうと席に着・・・・

「飯がねえ。」

そう、テーブルにあった飯が消えてるのだ。

「それならさっき冷めてしまったのもう戻してしまいました。」

「・・・・・・。」

なんてこったい。説教の上に飯すらなくなるとは・・・・。流石にこれは辛いぞ。

「・・・・部屋戻ってる。」

俺はそう言うと席を立て部屋へと戻る。

ああ、もう眠りたい。

俺はそんなことを考えながら扉を開ける。さっきは気付かなかったがどうやらもう夜になっていたらしい。ロシエルの説教の長さ俺の現実逃避の長さに吃驚だ。

もうロシエルの説教は受けないと心に固く誓った俺は倉庫からベッドを取り出す。流石に今日は床に寝るのは勘弁してもらいたい。

幸いベッド三つでも余裕があったようだ。ギリギリだったらまた床で寝ることになる。

もう、二時間ほど経ったか俺はベッドの上で地図を広げている。

「……星の墓場、赤の国、^{ミュールス}神国」

大体近いのはここら辺か。

流石にこの街しか知らないというのも拙いだろう。仮にも旅人という設定なのだから。金が貯まったら他の国や街に行くのもいいかもしれない。

俺がそんなことを考えていると部屋の扉が開く。どうやら二人が帰って来たらしい。

「よう。遅かったな。」

俺がそう言う二人とも返事をするが何となくぎこちない。何かあったか？

「きよ、響夜。少しあっち向いていてくれ。」

マオがそう言うハクも同意するように頷く。

まあ、別にかまいやしないが、国名も覚えておきたいから退屈はし

ない。

・・・・・・・・しゅる・・・

暫くすると布が擦れる音が聞こえる。あいつら着替えてんのか？ だつたら外に出ろと言った方が良かっただろ。

俺はそう思いながらも地図を見る。大体の近くの国は分かったが山などの細かい地形はまだ頭に叩き込んでいない。

「きよーや、もう、いい。」

俺が地形を覚えるのに集中しているとハクの声が聞こえる。

「着替えるんだつたら外に出てろと言えば良かっただろう？」

俺はそう言って二人を見————てしまった。

「・・・・・・・・。」

顔を赤く染める二人。その姿はワンピースのようなものを着ているが見た目だけだ。よく見たら布を巻いただけの姿。

・・・・・・ロシエル、何吹き込んだ。

俺はあの馬鹿の顔を思い出す。

「あ、あの・・・・・・・・。」

俺が馬鹿^{ロシエル}への呪詛を心の中で吐いているとマオが口を開く。その格好の所為か二人とも凄い顔が赤い。恥ずかしいならやらなければいいだろうに。

「そ、その……。」

ハクも普段からあまり喋らないが今回は恥ずかしさの所為か余計に声が小さい。今にも？き消えそうだ。

「あゝ……お前らどうした？」

少なくともあの馬鹿が唆したということは分かる。

「え、……えっと……響夜。」

マオが口を開く。口調も普段と少し違うか？似非爺口調ではなく少女のような感じだ。

「そ……その……」

何か凄い、身の危険を感じる。今までの中でも相当危険な感じだ。神よ。もし貴方がいるのなら私を救いたまえ。救わないなら殺す。

「わ、私達と……寝て。」

「……ロシエル、テメエとは後で話ししなくちゃいけねえよ
うだ。」

決闘開始まで残り一日

殺人鬼は過ちをおかそうと考えるのか？（後書き）

感想、批判、意見がありましたらどうぞ送ってください。

人の感情とかは書くのが難しいですよ。他の方はよく書けるなあって何時も思います。

15禁の基準ってどれくらいなんですかね？それによって次回の話を変更する必要があるんですよ。

殺人鬼の悩みの種が増えました（前書き）

「・・・・・・・・助けてくれ。」

b y 響夜

今回短いです。そして何か・・・・・・・・うん。あれです。

殺人鬼の悩みの種が増えました

……。現実には実に残酷だ。俺は今その一部を体感している。

「……。きょうや。」

頬を仄かに赤く染めながらマオは甘い声色で俺の名前を呼ぶ。その黒髪は月の光に照らされよりより彼女を妖艶に魅せる。

俺はそれから目を逸らす。目を合わせたら駄目だと本能が感じ取ったからだ。

「……。きょう、や。」

だが悲しいかな。俺に逃げ場はなかったらしい。

左側には薄く青みがかった白銀の髪を揺らしたハクがいる。マオのように成熟した体つきではないが月明かりに照らされたその姿はより彼女を神秘的に魅せていた。

まずい、これは非常にまずい。肉体的にも精神的にも俺が死ぬ。世の男どもは喜んで飛び付くだろうが生憎俺はそこまで飢えてなどいない。腑抜けだ何だと言われようと俺は手を出さん。そうとなれば俺はこの状況から何とか逃げ出す方法を思い付かなければならない。

考えろ……。考えろ……。考えろ……

俺は今までにない程速く頭を回転させる。何とかこの状況から脱出できる方法を。

転移、無理だ。マオは証から転移出来るし、ハクは臭いで追ってこれる。

魔導具で無理やり気絶させるか？無理だ。どちらか一人はいけてももう一人は反応してくる。

「・・・きょうや。」

甘い声を発しながら近付いてくるマオとハク。俺は少し後退りする。

「・・・おね・・・がい。」

壁際^{ぜつばう}まで追い詰められた俺に二人はその距離を零へとした。

その事実には俺はその体を一瞬だが硬直させた。その隙を二人は逃さず

「・・・ん。」

触れる唇。その柔らかな感触が今の事実を伝えてくる。視界に映るのはマオの顔。そして俺の身体に感じられる二人分の重み。

「・・・。」

永遠にも感じられた刹那。離れる唇。目の前に映るマオの意気は荒くなっている。もう一つの視線を感じて俺は視線を下に移す。そこにいるのは白銀の髪の少女。

「・・・きょう・・・や。」

俺が反応する前に押しつけられる唇。引き離そうにも二人の体制的に引き離せない。

「……ん……はっ……」

息継ぎをしようとした瞬間ハクはその口内に舌を入れる。触れ合う唇の間からぬるりとした感触をともなって入り込む舌。それは俺の舌を絡みとり口内を蹂躪する。

「ん……ちゅむ……は……」

何度も絡み合いその動作は次第に激しくなっていく。

「……はむ……ん……ちゅ……は……む……きょうやあ。」

離れていく二人の唇の間にできる銀の糸をハクは妖艶に絡め取りながら甘い声で俺の名前を呼ぶ。

「……っ。」

これ以上は拙い。このままだと確実に俺の理性も崩壊する。

「……きょうや。」

その間にもマオは俺のズボンへと手をかけていた。

「ま、マオ。待て！」

俺は今までにないほどの焦りと共にマオを止める。ハクが迫ってくるがそれも片手で何とか止める。

「止めろ二人とも。」

俺は二人をギリギリで止めた。二人は息を荒くしその瞳を潤ませ俺を見る。思わず顔を背けそうになるが何とか踏み止まる。

「・・・いきなりどうした。」

何とか耐えている俺は二人からこの行動の理由を聞き出す。

「・・・響夜が・・・悪いんだよ。」

「きょう・・・やの所為。」

二人はそう言うのと再びその続きにもどろうとする。

「・・・っ。待てお前ら。」

たぶん、というかほぼ確実に今の二人は俺の制止など聞かない。なら・・・

「・・・。。。」

俺は簡単な魔法を発動させると二人に話しかける。

「それだって今でなくてもいいだろう？・・・俺も今は疲れてるんだ。」

正直苦しすぎる言い訳。現に二人も不満げに俺の顔を見ている。頑張れ俺。今を乗り切れば何とか対策も立てられる。俺はそう自分に言い聞かせ二人の耳元でそつと言う。

「・・・あとで、その時に続きをしてやるから。」

魔法による軽い意識の誘導。普段ならハクはともかくマオには絶対に効かないだろう。だが今マオの理性薄れている。この状態ならば効果がないわけがないだろう。

二人は顔を赤くしながらその言葉に頷く。

「・・・お前達が望む時に好きなだけやってやるから。」

正直これは俺にとっても危険な賭け。マオ達がこれを覚えていたら確実に俺は詰む。だがこの魔法で誘導しておけば今回のことを思い出さず、思い出しても夢だと思う・・・はずだ。

俺の言葉に二人は身を震わせるとその潤んだ瞳を向ける。

「それじゃ・・・」

「・・・最後に。」

二人はキスを要求するように目を閉じる。その行動に俺は内心で溜息を吐くが

何とかここで終わらせなければ

その一心の下俺は二人に口付をした。

ああ、もう二度とこんなことは起きないでくれ。



おはよう太陽。死ぬほどお前を八つ裂きにしたい。

俺はそう思いながら起き上る。左右には昨日と同じ姿をした二人の姿。何とか誤魔化して切り抜けたがあのと一緒に寝ようとしてきた——俺が拒否したが二人は断固として譲らなかった——結果、諦めた俺はもうどうにでもなれと二人と一緒に寝た。無論変なことは起きなかった。たぶん。

「眠い。」

ああ、そういえば今日が決闘だな。

俺は街の様子を見ながらそんなことを思い出す。正直ばっくれようとも思ったが魔剣の依頼はあいつの協力がなかったら出来なかったので付き合うことにした。たぶんそしたら俺の信用は一気に落ちる。俺は二人を起こさないようベッドから離れるとYシャツとジーパンに着替え下へ降りる。まだ朝早いからか客はほぼいない。俺はそれでも受付にいるロシエルの下へ行くと告げる。

「よくもやってくれたな？」

「何のことですか？」

笑顔で堂々としらをきるロシエル。そられてなおその行動とはある意味勇者だ。

「マオ達に余計なこと言いやがって……。」

「昨晚は楽しめましたか？」

此奴認めやがった。

「で、お前に話があるんだが。」

「？」

「実は今誰かを殴りたいんだ。だが、今回のことを他言無用、本人たちにも言わないと約束できれば逆にこの宿への代金を増やしてもいいと思って「是非とも協力しましょう。」……………」

此奴は……………」

俺はその変わり身の早さに深い溜息を吐く。

「いいな。もし破れば宿代ただ……………そしてお前に地獄を見せる。」

俺は今きつと天使ともいえる表情をしていることだろう。ロシエルの顔から血の気が引き冷や汗が流れているのが分かる。

殺人鬼が天使の笑顔……………おえ。

俺はそれだけを言うと言文をし空いている席に座る。ロシエルは未だ挙動不審で俺におびえているがどうせすぐに調子を取り戻すだろう。

そんなことを考えながら時間が過ぎ去っていきマオとハクが降りてくるのが分かる。

降りてきた二人はロシエルに笑顔で挨拶をする。ロシエルももう先程の様子とは違い笑っている。

「……………おはよう。」

「おはよう……………なのじゃ。」

俺の下へ来る二人だがその顔を真っ赤に染めている。
……………

「昨日の。」

俺がそう言うのと二人は煙が出るのではと思うほどに赤くなり俺から目を背ける。

・・・此奴ら完全に昨日のことを覚えてやがる。

俺はその事実絶望しながら何も聞いていない知っていないというそぶりを見せるがそんなものは無駄だったらしい。

「・・・頑張つて。」

「・・・決闘が終わった後・・・。」

・・・は？もしかして今日？対策も出来てないのに？

俺はその台詞に血の気が引くのを感じる。まさかロシエルへ行ったことがこんな形で帰ってくるとは・・・。

思わず俺は逃げ出そうかと考えるが諦める。そんなことは出来やしない。

しかし、誘導もしてなるべく記憶の片隅へと追いやったのにそれでも覚えているとは・・・。

その事実俺は落胆する。・・・こんなときに使えないとは。

「・・・楽しみにしてるから。」

「は・・・ははは・・・。」

その言葉に俺はもう乾いた笑いしか出せなかった。

決闘開始まで残り4時間

殺人鬼の悩みの種が増えました（後書き）

感想、批判、意見がありましたらどうぞ送ってください。

難しい。難しすぎる。どうやって描写すればいいんだ。そんなことを考えながら書いておりました。今回短いのは最初で頭がオーバーヒートしてしまったからです。次からは戦闘・・・かな？

あと性描写（？）とかもうまく書けるようにしておきたいなあ。な
どと考えております。

殺人鬼の決闘そして加速する物語（前書き）

「……勝手に決めてんじゃねえよ。」

b y 響夜

今回長いです。恐らく過去最高の長さです。

殺人鬼の決闘そして加速する物語

「・・・・・・・・。」

人混みのなかを歩かないというのは実に素晴らしい。お陰で殺人衝動も何時もより控え目だ。

まあ、それ以外の問題があるんだが・・。

俺は左右にいる二人を一瞥する。

「どうしたのじゃ？」

「・・・・？」

「いや、何でも。」

首を傾げる二人に俺はそう言って溜息を吐く。

さて、どうするか。決闘のこともあるがその後が一番の問題だ。どうやって逃げるかを考えておかないといけないからな。

「・・・・・・・・やってられん。」

そう呟きながら歩いて行くと何時もの訓練場の前でエルザが立っていた。

「あ、おはようございます。」

「ああ。」

「おはようなのじゃ。」

「・・・おはよう。」

笑顔で挨拶をしてくるエルザに俺達はそれぞれ挨拶をする。

「どうしたんだ。」

待つなら訓練場の中でもいいはずだが・・・。

「あ、いえ。ガルラが暴れるのに訓練場では狭いと言ってあの中に・・・。」

そう言ってエルザが見るのは何やらドーム状に結界が張られた訓練場より一回りでかい建物。

「ギルドと軍が共同で管理している中で一番大きい闘技場ですよ。」

軍、というのは国の為に戦っているものだ。地球とそう変わらないな。ただ軍は国の為に戦っていることに誇りを持ち自分のことしか考えていないギルドを嫌っている奴が多いらしい。エルザも軍の一員だがギルドのことを悪くは思っていない。むしろ友好的だ。

「私はそれを伝えようと思って待ってたんですよ。」

野郎勝手なことを・・・。

「お陰で訓練していた方がぜひとも・・・見学しようとしてます。」

「・・・・・・・・マジでぶっ殺そうかな。」

エルザの言葉で俺の殺意が増す。三人は俺の表情を見て苦笑する。
俺今どんな顔してるんだ？

「・・・なら早く行くぞ。これ以上見学人が増えるとか言ったら洒落にならねえ。」

俺は三人に言うのと早くも重い足取りでガルラのいる闘技場へと向かって行った。



「・・・・・・・・・・。」

闘技場、と言うよりも外と言った方がピッタリだろう。より実戦に近いようにするためかなには植林がされた森のような景色が広がっている。他にも様々な場所が造られていたがあいつが何故こんな場所を選んだのかはよく分らない。・・・いや、見学人から見えないから俺には中々良い場所だが。

その中を中央に向かって歩いて行くと直径が200m程の石造りの円形の舞台そこにガルラがいた。フィールド両手に無骨な巨斧を持ち目を瞑っている。

「・・・・来たか。」

まるで嵐の前の静けさとも言うべき声色。その決して大きくない声は嫌に響いた。そして感じる巨大な殺意の塊。ガルラは両目を開けると巨斧を片手で持ち上げ俺に突き付ける。

「いっへ来い。」

「……。」

・・・本気か。

俺は舞台に上がり奴の目の前で止まる。

「よくぞ応じてくれた。」

この前からでは考えられないほどの真剣な表情。その顔は正しく武人の表情^{かお}。面白い。

「いや、俺の方こそあんたみてえな奴と戦えるんだ。感謝するのは俺の方だ。」

俺の言葉にガルラはニヤリと不敵に笑った。

「ならば共に全力で戦おう！！」

ガルラは巨斧を振り上げる。

「ああ、俺を楽しませてくれよオ！！」

俺は全身に魔力を巡らせ奴へと駆けた。



一言で言うなら嵐。それが響夜がガルラの攻撃を見て感じたことだった。荒れ狂う嵐のように周囲にある物を例外なく破壊する。その中を響夜は前へ進んでいく。後ろに下がってはいけない。何故かは分からない。ただ本能が下がることを拒否している。

「オオオッ——！！！」

ガルラが振り下ろした巨斧による一撃。それは響夜を確実に捉え粉砕する筈だった一撃。

「だ……ラァ！！」

その一撃を響夜は自分魔力を纏った拳で無理矢理軌道を変える。弾き飛ばされた斧は響夜の傍の地面を砕き衝撃は響夜を巻き込んで周囲にあるものを吹き飛ばす。

「（……何本かやられたな。）」

響夜は軽く舌打ちをする。だがそれも直ぐに治っていく。ガルラは僅かに眉を動かすが特に何か言う気はないらしく再び構える。

「（……気付いたか。）」

自身の魔力を持たない響夜だけが持つ異常性。悪魔の心臓グリモア・ハートは常に稼働し決して所有者を殺させない地獄の神器。

そして再び響くのは破壊音と互いの得物ぶきが交り合う音。それは響く毎に闘技場を破壊し嵐が通ったかの如き跡が残るのみ。

それはたった二人の人間によって起こされた破壊。そしてその二人の均衡は揺らいでいた。

「がっ……！？」

振り下ろした巨斧の一撃を囿にし響夜の腹へ強烈な一撃放つガルラ。そこでその手を止めることなくガルラは神速ともいえる一撃を

次々と放っていく。響夜はその連撃を紙一重で躲していく。

周囲の目が多少とはいえあるここでは響夜は想像形成を使うことは出来ない。頼れるのはこの世界の魔法と予め創っておいた武器そして――

「形無き略奪者^{ジェロジャー}!!」

響夜の現在最強たる武器――魔剣の名を呼ぶ。

「!？」

それは一瞬。ガルラが響夜へその巨斧を振り下ろそうとした瞬間響夜の胸から紅蓮の如き輝きを放った槍が放たれる。

その一撃はガルラを確実に貫ける威力をもったモノ。故に食らえばただでは済まない。

「ハアッ――!!!!」

振り下ろしていた巨斧の軌道を変え槍へぶつける。そして巻き起こる爆風。それは両者を飲み込み爆発した。

「……それがお前の切り札か。」

「ああ。これが俺の切り札だ。」

響夜は形無き略奪者^{ジェロジャー}を薄く霧状に展開する。

「……む？」

「これでもう俺達の戦いは誰にも見られない。」

響夜の背後の空間が揺らぐ。

「さあ、存分に戦え。我が軍勢^{レギオン}よ。」

その空間から現れるのは無数の銃口。ガルラはこの武器を知らないだろう。当たり前だこの世界に科学など無いに等しいのだから。

「目の前にある障害を汝等の手によって灰塵へ変えよ。」

そして銃口が赤く染まっていく。放たれるのは無数の呪いが掛けられた弾丸。それは一切の抵抗を許さずに蹂躪していく。

「暴風に潜むし獅子の牙^{シュトゥルムヴァイント・シュトースツアー}!!」

「閃光纏いし爆音^{ブリッツ・レウム}!!」

俺の詠唱と同時に魔法は発動しガルラもまたこれを危険と判断したのだろうその巨斧に光が集まる。そして銃弾が放たれた瞬間ガルラは地面にその巨斧を叩きつける。



ドオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!

今までの比で無い程の爆発音。そして世界が揺れたかのような衝撃。それは霧の外にいる見学人達にも及んでいた。

「……………」

「凄いですね。」

「・・・うん。」

それは当然三人も感じていた。目の前にある霧とそこから放たれる魔力によって透視の魔法も狂わされ中を覗き見ることは許されなく。何が起こっているのかは見当もつかなかった。

「・・・？マオ？」

「どうしたんですか？」

先程から黙り込み他の見学人がいる席を見ているマオに二人は首を傾げ尋ねる。

「・・・え？あつ、ううん。何でもないのじゃ！」

マオは二人の声に慌てて答える。二人はそれに首を傾げるが本人が何でもないと言うのならと霧へと目を向けた。

「・・・。。。」

その中をマオは只一人何かに耐えるように目を伏せていた。



「死に晒せえ！！！！」

響夜は空中に断頭台ギロチンの刃を展開する。その数四十。その全てが敵を斬り裂かんと殺意を剥き出しにして襲いかかる。

「笑止!!」

その牙をガルラは手に持つ巨斧で薙ぎ払う。その斧は刃を光輝かせ一撃の下次々に刃を砕いていく。

「神殺しの鎖グレイブニル!!」

響夜の（あるじ）の声に応えるように神器である魔狼を縛る鎖はガルラへと疾走する。

「神器だと!?!」

その内包されている魔力を感じたガルラは避けることに集中する。襲いかかる鎖を躲し、弾く。だがそれは縛られる時を遅らせるだけ次第に鎖は獲物を縛り付ける。

「————ッ」

ガルラは拘束されて尚鎖を破壊しようともがく。

「無駄だ。」 ¥

神器は神器でしか破壊できない。それは決して覆されないこの世界の真理。響夜はガルラへとグロックの照準を合わせる。

「死ねや。」

その言葉と共に放たれる銃弾。だが——

「死ぬのはお前だろ。」

ガルラの言葉と共に響夜の真上に七つの光の輪が出現する。

「七しちてんこうりん天光輪」

直後、光輪は響夜へと飛来する。

「ちい——！！！」

響夜はそれに気付くと照準を光輪へと合わせ放つ。僅かだが意識が逸れたことによって神殺しの鎖グレイブニルの拘束は緩む。その一瞬を逃さずにガルラは拘束から抜け出し響夜へと疾走する。

「舐めるんじゃねえ！！！」

響夜は空間からパンツァーファウストを呼び出しガルラへと放つ。それは目の前の地面へと直撃しガルラは爆風に飲み込まれる前にそこから飛び退く。

そして響夜もまた目の前に迫っていた光輪の幾つかを破壊すると霧状に展開していた魔剣を大剣へと変え残りの光輪を破壊する。

「「——！！！」」

ぶつかりあう巨斧と大剣。最早言葉を出す暇すらない。ただ目の前の敵を破壊する。ふたつの力による衝撃で既に周囲は無残な姿へとなり果てていた。

「づ……オオオツ——！！！」

振り下ろされた一撃を響夜は大剣を盾代わりにすることで防ぐ。そのまま響夜は巨斧を押し返した。それによってガルラは仰け反り響夜はそこへ大剣を振り下ろす。

「汝が纏いし聖なる羽衣。それを持ちて我が身を護る盾となれ！」

ガルラの身体が淡く光り、大剣がぶつかる。

硬い。それが響夜が感じたことだった。まるでコンクリートの壁を鉄パイプで殴ったかのような衝撃が走り手が僅かに痺れる。

「ハアッ！！」

振り下ろされる右腕。響夜は衝撃によつてそれを躲せず殴り飛ばされた。

「があ！！」

吹き飛ばされた響夜はすぐさま起き上り体制を整える。両社はすでに息も絶え絶えになり足元もフラフラと覚束無くなっている。

$$\left[\begin{array}{c} \angle \\ \angle \\ \angle \\ - \\ - \end{array} \right]$$

「ふかかか——」

[illegible]

笑い。この状況になろうとも二人は戦いを楽しんでいる。

「よう、強いじゃねえか。」

「そう言う貴様こそ。中々強いな。これまでお前の噂を何故聞かなかったのかが不思議に思える。」

笑いあう二人は。既にもう殆ど体力は残っていない。なら――――

「一撃で終わらせてやるよ。」

「倒れるのは貴様だな。」

互いの武器に集中する魔力。それは大気を震わせ見学人達も目を剥かせた。

「死ね。」

「お前がな。」

互いに振り下ろされる一撃。正しく自らの全て込めた一撃。その結果は――――



二人を覆っていた霧が消える少し前。三人にも動きがあった。

「……。」

「マオ、どうしたの？」

「何でもないのじゃ。……少し忘れ物してしまったから一回宿に戻るぞ。」

問いかけるハクにマオは笑って言い席を立ちあがった。その表情には僅かに影が差していたがハクが付いていくと言うと。

「大丈夫。」

と言い。闘技場から出ていった。

「……………」

誰もいない通路。そこでマオは二人がいる場所を見る。

「……それで、何の用じゃ。」

マオがそう言う通路の陰から一人の男が現れる。

「お探ししました。魔王様。」

その男は一礼するとマオを見る。上等な騎士服を着その姿はまさしく忠義ある騎士の姿だった。

「……用件は？」

「城にお戻りください。」

目の前の騎士の言葉にマオは溜息を吐く。

「断る。我はあのような退屈な場所にいたくはないのじゃ。」

マオはそれを断るが騎士も引く気などない。

「聖王が勇者を引き連れ進攻してきます。」

その言葉にマオは驚愕を露わにした。

「なんじゃと！？そのようなことは聞いておらぬぞ！！」

「今回のことは内密に進めてきたようで、異界の地の者を呼び出したようです。」

騎士はただ淡々と真実だけを告げていく。だがその瞳は事の重大さを伝えている。

「魔王様。城へお戻りください。我らには魔王様が必要なのです。」

その言葉にマオは俯く。だがやがて意を決し――

「分かった。」



同時刻、ぶつかりあった二つの力も終わりを見せた。

「……化け物じゃねえの？」

「……その歳でここまでの力を持つお前に言われたくはないな。」

膝を着き荒い息で話す二人。マオから魔力供給のある響夜は魔力で無理矢理戦うことは出来るが肉体はほぼ限界。ガルラもまた気力で戦い抜くことは出来るだろうが魔力はほぼ無いと言っても過言でない。

「……引き分け……いや、」

「決着は持ち越しつつうことで……。」

響夜とガルラは互いを見る。考えは同じだった。

引き分けなど認めない。

ただ互いに目の前にいる男と引き分けたと認めたくないだけの子供だ。だがそれでも構わなかった。再びこうして戦えるのなら……。

「疲れちゃったよ。」

「全くだ。だが……いいのか？」

ガルラの言っている言葉の意味が分からず響夜は首を傾げた。

「俺達が認めないとはいえお前は俺と互角に戦った男だぞ？」

その言葉に響夜の頬が引き攣る。

「見るがいい。見学人はお前に興味津津だ。」

響夜は魔剣を霧状から大剣へと変えてしまったことを思い出す。

それはつまり外界にいる見学人からは丸見えになったということだ。
・・・

「逃げるなら今のうちだぞ。」

その言葉が終わる前に響夜は走り出していた。動かぬ体に鞭を打ち必死に走っていく。それをみたガルラは苦笑を浮かべていた。

「・・・まだまだ若いな。」

「・・・ええ、彼は若いのにあれだけの實力を持っている。」

何時の間に隣に移動していたのかエルザが立っていた。

「まさかあれほどの剣・・・そして神器も持っているとは思わなかったぞ？」

「ええ、私も初めて見た時は驚きました。」

エルザは笑う。

「まあ、今は奴が見学人に捕まらないのを祈るか。」

二人は逃げて行った青年の姿を思い出し苦笑した。



「ああ！鬱陶しい！！」

響夜は今屋根の上を昇り走っていた。既に闘技場からは随分離れて

いた。流石にもう追ってこないと判断した響夜は速度を下げる。

「……………しつこすぎだ。」

空は曇り、小雨が降っていた。

『……………響夜。』

宿へと足を向けていた響夜に声が届く。

「……………マオか。どうした？」

マオとの契約の証。それにはマオとの念話の機能もあった。

『……………響夜、あの……………』

何というか何時もより元気がない。

そう感じた響夜はマオの名前を呼ぶ。

「マオ？」

『……………今まで楽しかったのじゃ。響夜と会って、……………その色々あったけど一緒に依頼を受けたり、ロシエルも交えて話して、ハクとも友達になれて……………』

たくさん笑って、毎日が夢のような日々だった。凄く楽しくて凄く充実してた。』

マオは少しまるで泣くのを我慢しているかのような声色になっている。

響夜はそれを聞きながら考えていた。

「・・・・・・・・。」

それではまるで、いなくなってしまうかのようなではないか。

『・・・・・・・・何より響夜と一緒にいる時間はとても楽しかったのじゃ。』

「おい、マオ。」

『・・・・・・・・今日の約束は忘れて。・・・今まで楽しかったよ。』

「おい、聞いているのか！マオ！！」

自然と響夜の走る速度は上がっていた。

『・・・・・・・・ハクにもごめんって言うておいて。』

「マオ！！」

『さようなら、響夜。』

気が付けばもう響夜は宿の前に着いていた。響夜は宿の扉を開けると返事もせずに借りていた宿の部屋へと飛び込む。

「・・・・・・・・。」

何もない部屋。置いてあるのは最初からこの部屋にあったベッドと椅子、そして机。

響夜は部屋に入ると部屋を見回す。見れば机の上に一枚の紙が置

いてあった。

「・・・・・・・・。」

響夜はその手紙を手取る。

書かれているのは謝罪の文と今までのこと。楽しかったという言葉とごめんという言葉。

その文面に響夜は俯き手紙を握りつぶしていた。

「・・・・・・・・馬鹿野郎が。」

外はただ暗雲と土砂降りの雨が広がっているだけだった。

殺人鬼の決闘そして加速する物語（後書き）

感想、批判、意見がありましたらどうぞ送ってください。

はい、今回凄いいいです。あと今までの文でこれからグレイプニルも神殺しの鎖と神器等の名前も統一しようと思います。

殺人鬼は勝ち逃げなど許さない（前書き）

「ストーカーも不審者も人として結構終わってるよな。殺人鬼？・・・普通だろ。」

b y 響夜

殺人鬼は勝ち逃げなど許さない

「…………鬱陶しい。」

俺は目の前にいたゴブリンの頭をデザートイーグルで吹き飛ばす。
ゴブリンは短く断末魔の叫びを上げると倒れ地面を赤く染めた。

「……依頼は完了か。」

「…………キョーヤ。」

俺がゴブリンの死体を見ているとハクがやって来る。どうやら向こうも依頼が終わったらしい。

それを確認すると俺達は依頼完了の証を剥ぎ取り街へと戻って行った。



マオがいなくなって既に四日が経とうとしている。最初はハクも泣き出しそうになるしエルザも混乱していて落ち着かせるのが大変だった。今では落ち着いているが必死にマオの居場所を探そうとしている。

…………そして俺は

「で? どうじゃったんじゃ?」

ガルーラ
馬鹿に誘拐されている。

「どうもこうもねえよ。今までと同じようにはいかねえんだから苦勞してる。」

マオがいなくなった日。あの後マオから供給されていた魔力がなくなった。証自体は消えていないがもう力も感じず今の俺は魔力のないちょっと強い人間だ。この世界だと魔力が無いのは致命的なんだから。

「まあそっちもだが、連れの方はどうなった。」

また、それか。

俺は小さく舌打ちをして言う。

「あいつが自分で望んで消えたんだ。俺が引きとめる理由もないだろう。」

「まあそうだが。今まであれだけ楽しんで突然消えるのも妙だと思うぞ?」

考えられるとしたらあの不審者騎士だがそしたらあいつは魔王の関係者か何かということになる。

「・・・何にしてもあいつの場所が分からねえんだから仕方ねえだろ。」

まあ、嘘は言ってねえ。実際あいつが今何処にいるのかは分からねえんだから。

「お前がそういうなら俺は何も言わないがな。」

「そうかよ。じゃあな俺はもう行くぞ。」

俺は席を立つとガルラに背を向けて歩き出す。
まさかあいつにまで言われるとは……。



通りに出た俺は今宿へと向かっている。宿に戻ってもロシエルが煩
いがある所しか帰る場所が無いのだからしょうがない。……
俺が家無き子のように思えてくるから不思議だ。
いや、でもあいつしつこいだろうからな……。

「……………どうすっかな。」

……金は問題ない。だが宿に帰ればロシエルからマオのことに
ついて聞かれる。まじでどうするか……。

「……………あ？」

俺はふと後ろを振り向く。

……なるほど。

「前世はストーカーかなんかなのかね。」

俺は思わずそう呟いて前を向く。

ああ、丁度いいところに獲物が来やがった。

俺は思わず嗤いそうになるのを抑える。お客様には丁重な御持て成
しをしなくては……。

「ああ、なら———。」

最上級の御持て成しをしようか。
俺は宿へ向けていた足を街の門へ向けた。



街の外に出た俺は今街道を逸れ森の中を歩いている。

「・・・・・・・・。」

街からは大分離れたか・・・。
俺はそこで足を止め後ろを振り返る。

「よう、ストーカー騎士。追いつけるなら女の尻にでもしとけよ。」

俺は木の後ろに隠れているであろう男に話しかける。男もバレているという事には気付いていたのだろう少しの間をおき出してくる。

「・・・・・・・・。」

無言で俺を睨み付け男は腰に下げてある剣を抜く。

「・・・随分嫌われたもんだ。」

俺は騎士の様子を見て肩を竦める。まったく、人の話を聞かない奴らが多すぎる。

「————死ね。」

男の姿がぶれ一瞬で俺の目の前に現れる。

速い！？

俺はスキルである魔神の観察眼を発動させその攻撃を躲していく。
鬼神の武勇伝と魔神の観察眼は魔力が無くとも発動できる。恐らく
これは俺の元々の特技と能力だからだろう。

「デメエが死ね。」

俺は手に持ったナイフを騎士の眉間へと投げる。

「————ッ」

その攻撃を騎士は仰向きに倒れ込むようにして躲す。その隙に俺は
騎士の首目掛けてナイフを投げる。そのナイフはあと僅かというところ
で見えない壁のような物に弾かれた。

「なら————」

俺は懷からデザートイーグルを取り出し銃口を向ける。弾も残り少ない
がケチ臭いことは言ってられねえ。

「こいつでどうだ！！」

俺は騎士に向けその引金を引く放たれた銃弾を追うように発砲音が
鳴る。だが続く断末魔は聞こえず血飛沫も上がらない。

「………終わりだ。」

俺の背後で剣を振り下ろそうとしている騎士。その頬には浅く傷がつ
っていた。

「っ!?!? くそ!?!」

俺は咄嗟にナイフで剣を防ごうとするがナイフは一瞬で両断され――俺の身体は真っ二つに切り裂かれた。血飛沫を上げながら倒れる俺が見たのは此方に手を向け魔力をためている騎士の姿だった。

「消えろ。」

「……形無き略奪者^{ジェロシニア}」

魔力が無いことも忘れ思わず俺は魔剣の名を呼んだ。
その瞬間光が俺を飲み込んだ。



私は丁度、喫茶店の中にいた。周りからは相変わらずの羨望や嫉妬が入り混じった視線。

「………はあ。」

思わず溜息を吐く。戦乙女^{ヴァルキュリア}と呼ばれていようと私だって一応人間なのだ疲れだって感じる。

「……マオちゃん大丈夫かな。」

私はあの日のことを思い出す。もしあそこで私やハクちゃんと一緒に着いていけば……。そんなありえないifの物語を考えてしまう。私は自分に叱咤する。今更そんなことを考えてもしょうがないのだ。

「・・・・・・・・。」

よく考えれば三人は私を普通の視線で見ている。世に名が広まれば皆私のことを普通の人としては見てくれなくなる。覚悟していたけれどやはり少し寂しい。ガルラや他のクラウン達の有名人は私と対等に接してくれるけど正直他の一般人の人は私のことを対等な目で見えてはくれなかった。

「そう考えると友達なんてあの子達だけかも・・・・。」

・・・約一名捻くれているけれど。そんなことを考えて思わずクスリと笑う。

「よし、マオちゃんを探さないで。」

私が席を立つとうとすると丁度通りに見覚えのある白髪青年――――響夜君がいる。

噂をすればなんとやら・・・。

私は青年から話を聞こうと会計を済まし店を出た。

「とはいえ・・・・どこにいったのかな。」

青年を追い掛けたは良いけど見失ってしまった。門を出て行ったのは見えたけど・・・・。

「魔物に会ったら大変なのに・・・・。」

響夜君——本人は君を付けるなど言うけど——はマオちゃんから魔力を供給してもらっていると言っていた。今は魔力の供給がないと聞いていたのに厄介な魔物に出会ったらどうするつもりなのか。・・・これはマオちゃんが帰ってきたらハクちゃんも入れてお説教しなくては。

「・・・でも本当に何処だろう？」

引き返そうにもやはり心配だし・・・でも何処にいるか分からないし・・・。

「・・・どうしよう。」

私は頭を悩ませる。・・・本当にどうしよう。そんなことを考える
と森の中から突然巨大な
魔力の反応を感じ取った。そして続くもう一つの巨大な魔力。

「・・・響夜君!？」

思わず私は叫んでいた。彼は魔力が無いと言っていたのに・・・。
私はその魔力の感じた場所へと向かった。

「・・・くっ。」

早く・・・早く・・・。

私は歯噛みする。コンマ一秒でも遅く感じてしまう。そんな感情を抱きながらも私は全力で駆けて行った。



俺は目の前に広がっていた光景に茫然とした。

「……………どういことだ。」

俺に放たれた光は目の前に広がっている円状の盾にそれ以上の侵攻を阻まれていた。

何よりもその盾は……………

「……………形無き略奪者^{ジェロジャー}」

咄嗟に名前を呼んだとはいえ魔力のない俺が出現させられる訳がない。なら何故……………

「……………!?」

驚愕から落ち着いてきていた俺に襲いかかる激痛。くそ、そういや切り裂かれたんだったな。

「……………切り裂かれた？」

おかしい。どうして傷が塞がらない？悪魔^{グリモア・ハート}の心臓は俺への魔力供給が無くとも勝手に動いていた。魔剣が出てきたのと関係してるのか？……………まさか。

「……………っ。」

俺がある結論を出そうとしていると激痛と共に視界がぼやける。……………くそ、思考が回らねえ。
俺が意識を失いかけているからか、形無き略奪者^{ジェロジャー}の形も朧気になっ
ていく。

「――」

まずい。そう思いながらも体はその意思に反し俺はうつ伏せに倒れる。徐々に地面には赤い血溜りができていく。

「響夜君!!」

・・・俺は地面に倒れ薄れゆく意識のなかそんな声を聞いた気がした。



・・・目が覚めた俺の目に映る身に覚えのある天井。どうやら自室にいるようだ。俺は周囲に目線に移す。

「・・・・・・・・」

目が覚めたら知り合いが斧を振りかぶってるってどう思います？

「死ねええええええええええい!!!!!!」

「ふざけんなあああああああああああ!!!!!!」

俺は起き上るとすぐさまベッドから抜け出す。そして振り落とされた斧。見事ベッドは破壊されそこにはベッドと呼べるような物は無くなっていた。

「・・・・・・・・それだけ元気なら問題あるまい。」

「デメェに問題がありまくりだボケェ!!!!」

やりきったような顔で頷くガルラを俺は蹴り飛ばす。普通病人に斧を振り下ろす奴がいるか！

「どうしたの（んですか）！？」

その音を聞きつけハクとエルザがドアを開けて入って来る。ハクがここまで心配していることに少し驚いた。

俺は無言で立ち上がっているガルラを指差す。二人はそれを見ると笑顔で魔法を放つ。顔は笑っているのに目が笑ってねえ。てか此処室内なんだが……。

「……おい、落ち着けお前ら。」

俺はガルラを蹴っている二人に若干気圧されながらも言う。二人はまだ多少の不満はあるのか渋々といった様子で離れる。

「……怪我、大丈夫？」

ハクに言われ俺は自分の体に目を向ける。傷はもう完治している。どうやら悪魔の心臓が^{グリモア・ハート}今度は機能しているようだ。

「ああ、大丈夫だ。……誰が俺を助けたんだ？」

俺はその人物について聞く。もし他人だったら色々と面倒臭いことになる。

「それは私です。貴方と別の魔力を感じたので……。」

「そこにもう一人騎士っぽい奴はいなかったか？」

その言葉にエルザは少しの間をおいて答える。

「・・・いしましたが、逃げられました。幸いあの人物の魔力は覚え
ましたのである程度の追跡は可能です。」

魔力の追跡とか・・・俺達三人は驚愕に満ち溢れた目でエルザを
見る。

「・・・私一応クラウンの一人なんですけど。」

部屋の隅でエルザは体育座りをし「の」の字を書き出す。俺達はそ
んなエルザを視界に入れないよう体をずらして話しあう。

「その騎士・・・どうしたの？」

「あの似非騎士。もしかしたらマオの関係者かもな。」

最初はガルラやエルザの可能性もあったがエルザはそんなことをす
る奴ではない。ガルラも考えていたが決闘が終わった後に戦いを挑
むのもおかしい。殺したら決着もつかない。

「ホント!？」

珍しくハクが声を大にして言う。

「ああ。と言っても多分だが・・・。」

「で、お前は行くのか？」

ガルラはニヤニヤしながら俺に聞く。うぜえ。

「……行くわけねえだろ。」

俺は二人に背を向けドアに手をかける。

「……ほう。」

「……勝てないから逃げるのか（んですね）。」

背後の二人の声に俺は後ろを向く。

「ああ？」

そこにいるのは何時の間に復帰したのかエルザとガルラ。

「勝ち逃げされてもしようがないですよね？」

「魔力が無いと何も出来ないからな？」

分かりやすい程の挑発。

「勝手に言ってろ。」

俺はそう言ってドアノブを回し下へと降りて行く。

「響夜さん！怪我は大丈夫なんですか？」

また面倒臭いのが。俺は心配してくるロシエルに適当に返事をし席へと向かう。

「何でここにいんだ爺？」

のんびりと飯を食っている爺ギルドマスターに話しかける。此奴はこんな所には来ねえ筈だが。

「主に用がの。」

そう言って渡されるのは一枚の依頼書。俺は爺の顔を一度見ると依頼書に目を通す。

「……………」

「これは立派な依頼。それに主当ての依頼だから何も心配することなどない。好きなだけやってくるといい。」

その言葉に俺が爺を見ると爺は不敵な笑みを浮かべる。

「…………主も男なら勝ち逃げなど許せんじゃろ？」

「どうなっても知らねえぞ？」

「クソ餓鬼の世話位ということはないわ。」

爺は豪快に笑う。見ればロシエルもその小悪魔っぽい笑みを浮かべている。

「…………きよーや。」

俺達が笑っているとハクが降りて来た。その姿からは沈んだ様子が感じられる。

「丁度いいところに来たな。」

俺はそう言って先程渡された依頼書を見せる。

「案内はエルザにでもさせる。準備しとけ。」

その依頼の内容を見たハクは先程から一転その顔を輝かせる。

「・・・うん！」

急いで準備をしに行くハクを見ながらも一度爺を見る。

「悪かったな。あんたに責任押しつけちゃって。」

「構わんよ。儂とガルラ達の権限を使えば問題ない。どうせ主もそこを気にしていると思ってたしの。」

「まさか、俺はこのまま放つところと思ってたしな。」

「そういうことしておくかのう。」

俺の言葉に爺は愉快そうに笑う。そんなことをしていると既にハクが降りてきていた。早いなおい。どうやらエルザも連れて来たらしく早く早くと催促している。

「んじゃ行ってくるわ。」

俺は隣に座っている爺にそう言うのとハク達の下へと歩く。

そんじゃ、ちつとばかり驕をしに行きますかね。

依頼書

依頼先 キョウヤ・ナルカミ

・マオ・オメテオトル・ヘーラーとの再会
・報酬金 ــــــــ

依頼主 ロシエル・ブレンダー

殺人鬼は勝ち逃げなど許さない（後書き）

感想、批判、ご意見がありましたらどうぞ送ってください。

ようやくてすどが終わり四日五日ぶりの投稿です。もうすぐ一部・一章？もうすぐ終わりますので頑張りたいと思います。クリスマスまでには・・・なんとか。

殺人鬼達の殴りこみ（前書き）

「想像・形成・」

b
V
響夜

殺人鬼達の殴りこみ

「・・・やってられねえ」

俺はそう愚痴る。だがそれも仕方ないだろう。

「少ししつこくありませんか」

街を出てから馬車で移動しているのだが――

「・・・あの野盗殺して良い？」

そう先程からずっと馬車の近くで野盗が何か叫んでいるのだ。よくこの馬車襲おうと思ったな。俺なら絶対襲いたくねえよ。

「・・・あゝ、何匹か残しておけよ？」

少し実験したいしな。丁度いいといえば丁度いいか。

「・・・ん」

ハクは一度こくりと頷くと馬車の外に出る。

「そーいや戦う時どうすんだ？」

俺はふと疑問に思っていたことを声に出す。いや、気にならないか？見た目獣人だがあいつは白銀狼だぞ？

俺は疑問を解消する為に馬車の外を見る。

「……こんな美術館は嫌だな」

外を見た俺は苦笑する。野盗も可哀そうに。そこには何人もの男の水像があった。脚が砕け散った物、逃げ出そうとしている物と様々だ。俺的にはもう少し赤の染料と生々しさが欲しいな……。

俺はそれを確認すると馬車から降りる。ハクは人間の姿をしたままだ。

「……きょーや」

「気分の方はどうだ？」

「少しだけ……満足」

ハクはそう言うとき残りの奴らを見る。全員脚を凍らされ動くことが出来ないようだ。俺達のことを化け物でも見るかのような目で見ている。失礼な奴らだなおい。

「あれ、どうするの？」

「ん？……まあ実験だな」

グリモア・ハート
悪魔の心臓のこともあるしな。俺はハクにそう言うときまだ生きている残りの男達に近寄る。

「ひっ！く、来るんじゃないっ！！」

「酷くないか？俺だって傷付くんぞぞ？」

まあ、別に実験動物に何言われても大体のことは平気だけだよ。

「逃がしてやってもいいぞ？」

俺の言葉に男達は顔を上げる。どんな奴だって死にたいとは思わないだろう。そう思う奴は自分じゃ何も出来ない屑だ。

「俺が今からお前らにあることをする。それでもお前達が一人でも正気を保てたら全員の傷を治して逃がしてやるよ」

男達は若干怯えながらも頷く。よし此奴らは承諾した……。

「……それじゃ始めようか」

自分でも嗤うのを抑えることが出来ない。此奴らは自分達は何をしたのか分かっていない。ああ、そこまで酷いことじゃない。ただ――

「……壊してやるだけだからよ」



「おいおいおい、逃げんなよ」

俺は走って逃げている男の頭を掴み地面に叩きつける。何か呻くがそんなもんは関係ない。

「手間掛けさせるんじゃないっつうの」

俺は手に持ったナイフを男に突き付ける。

「そんじゃ・・・派手にぶちまけろや」

瞬間、男の体が膨れ上がり爆発した。

「・・・微妙」

俺は降り注ぐ血の雨と臓器、肉塊を見ながら呟く。門を開ける時に少しはしゃぎ過ぎたかこの程度では満足出来ない。

「そーいや今のが最後か」

俺は来た道を振り返る。そこには頭が、腕が、脚が、臓器が、血痕があった。それらの男達の死体が来た道を教える道標のようになっていた。

「・・・今度どこかで暴れるか」

俺はそう考えると血まみれになった服と体を拭きながら二人の下へ戻る。少し遊びすぎたな。



「少し時間をかけ過ぎですよ」

馬車に戻った俺への一言は予想通りのものだった。ハクも何も言わないがその目がエルザと同じことを伝えてきている。

「悪かった」

俺は一言言々と馬車に乗る。なんというか・・・

「意外だな」

「何がですか？」

「お前みたいな真面目な奴はてっきり何か言うと思ったんだが」

俺がそう言っているとエルザはきょとし、苦笑した。

「クラウンにもそういう特殊な人はいますからね。むしろそういう人の集りのような物ですから」

「そうかよ」

とんでもないことを聞いた気がするが気のせいだろう。

「・・・マオの臭い」

俺達がそんなことを言っているとハクがぼつりと呟く。

「・・・そうか」

俺達はその言葉を聞くと同時に馬車から降りる。

「でも、すぐそこで消えてる」

「あの時の騎士の魔力もここで消えていますね。・・・いえ、これは別の空間に入って行きましたかね」

ハクの言葉にエルザも同意する。

「・・・星の墓場ねえ」

俺達がいた街からは飛ばして三日程かかる距離。まあ今回は急ぎだから馬にも無理させまくったが。
俺達の目の前には雪原と幾つもの巨大な結晶が広がっている。

「・・・・・・・・どうするの？」

「エルザ、お前何とか出来ねえの？」

俺の言葉にエルザは思案する。

「一応出来るには出来ますが・・・・。強引に挟み開けるので危険ですよ？」

「構わねえ」

俺の言葉に同意するようにハクも頷く。それを見たエルザは腰に帯剣している騎士剣を抜く。

「雷鳴轟かす勝利の咆哮」
フリスト・ヒルド

その言葉と同時に響く雷鳴。エルザは蒼い雷を纏い剣を構えた。その姿からは今迄にない程の魔力を感じる。

「—————」

神速。視認することの出来ない程の速度でエルザは剣を振る。その

一撃は周囲にあった結晶を粉碎し辺り一帯を陥没させた。

「————っ」

その衝撃に俺は目を瞑る。どれだけの破壊力だったのかは想像に難くない。俺は改めてエルザがどれほどの手加減をしているのかを悟った。戦えば恐らく俺はエルザに一太刀浴びせる前に斬り伏せられるだろう。

「……………」

俺達が目を開けるとそこには変わり果てた大地と罅割れ裂けた黒い空間。

「何、やったの？」

ハクも疑問に思ったのだろうエルザに問い掛ける。

「いえ、少しばかり空間を切り裂いただけです」

「……………」

簡単に言うがそれってありえないだろ。それともクラウンは皆そんなことが出来るのか？俺達はその言葉があまりにも現実離れしている目の前の現象を信じる事が出来ず茫然としていた。

「さ、行きましょう」

俺達はエルザの言葉に躊躇いながらも頷くとその後を追って黒い空間の中へと入って行く。

「……すごい」

空間の中は外とはまるで違う世界だった。夜空が広がり星が輝いている。地面はまるで水の上に立っているようで空から星が落ちてくる度に水面が揺れる様に波紋が広がる。

「……ここは何処なんだ？」

俺は前にいるエルザに問い掛ける。

「空の魔法と似ていますが恐らく此処は一種の別世界ですね。魔法と違い自然現象で此処は生まれたんだと思いますよ」

世界ってのはとんでもない存在らしい。この世界ともいえる規模の空間を創るとは……。

「それで？行くんでしょう」

俺達の先、そこには城があった。最も巨大であるために城壁だけにとんでもなくでかいんだがな。

「ああ、どれだけ問題を起こそうがお前らの責任になるだけだからな」

「……お手柔らかにお願いします」

俺の言葉にエルザが苦笑する。

「どうやって入るの？」

「決まってる」

下手な小細工は必要ないただ

「障害は破壊するだけだ」

俺の言葉に二人が苦笑する。だが二人とも悪い気はしないらしく笑顔だ。

「・・・任せて」

ハクは聳え立つ城壁に手を向ける。

「凍てつく氷河よ その牙をもって獲物を蹂躪せよ」

荒ぶる魔力の奔流はやがて巨大な氷柱へと変わる。

「穿て」

放たれる氷柱。その数は実に三十を超え城壁を破壊せんとその牙を??く。

——ドガアアアアン!!!!

その氷柱は城壁を易く破壊し城へと攻め込んだ。

「やるねえ」

破壊された城壁を見て俺は口笛を吹く。

「そんじゃ、行きますか」

俺達はそう言う騒がしくなってきた城へと歩いて行った。



「ハハハこりゃあ良いなおい!!」

闇に染まった城の廊下。今そこは戦場と化していた。

「おらあ、次はどいつだァ!？」

その戦場の中を響夜は走っていた。

「賊があ!」

近付いてくる魔族の一人。響夜はその魔族に手を向ける。

「断頭台」
ギロチン

次の瞬間現れた断頭台は魔族の首を刎ね飛ばす。だがその光景は異常だろう。何故なら魔法、響夜は魔法を使ったのだ。本来ならマオからの魔力供給がない響夜が魔法を使うことなど出来はしない。だが響夜は魔法を使ったのだ。

「――」

響夜の脇腹を槍が掠める。その一突きは響夜の脇腹を貫いた。流れ出す血を無視して響夜は背後の敵を燃やす。再び響夜は戦場の中

を走るがその傷は治らない。そう治らないのだ。

グリモア・ハート

これが響夜が導き出した結論。悪魔の心臓、たとえ魔力供給が無くとも動き続けていた神器はある構造をしていた。無限再生能力、それは永久的に魔力を生み出す魔力機関でもあった。常時膨大な魔力を生み出しそれによって半不死的な再生能力とも思わせる回復行い不老であるために老化を止める。想像形成によって響夜はその回路にその為のスイッチを創ったのだ。再生を止める代わりに生み出される魔力を自身のものとして扱う。故に傷が癒えない代わりに無限の魔力を得る。

「我が軍勢よ」
レギオン

響夜は自身の軍勢の牙を呼び出し魔族たちへ向ける。

「殺れ」

瞬間、その場が火薬が弾ける音と硝煙で染められる。だが響夜の顔はどこか不満げだった。

「・・・感謝しろよ？半殺し程度で済ましてやったんだからよ」

見れば魔族たちは何とか生きていた。ただその体も無事で無く死に体だ。

元々魔族たちは魔力だけでなく身体能力も上位の種族である。この状態でも気力さえあれば何とか回復できるだろう。

「あゝ・・・やってらんねえ」

ここにマオがいる。つまり此奴らはマオの配下なのだろう。ならば殺すのはなるべく控えなくてはいけない。響夜は面倒臭そうに倒れ

ている魔族たちの中を歩いて行く。

「・・・中庭か」

廊下の先には中庭があった。地面には草花が月明かりに照らされながら生えている。

「・・・侵入者が」

声がした方を見ればそこにはあの時の騎士。その姿を視認した響夜の口が弧を描く。

「よう、こんにちは。いやあ、ようやく出て来てくれたかあ。ったくよオ、手間掛せんじゃねえよ」

「やはり殺しておくべきだったか」

既に響夜の傷は全て癒えている。その魔力の流れを響夜は自身へと変えた。突然の魔力の反応に騎士の顔に僅かな驚愕が見える。

「馬鹿な、貴様の魔力はマオ様から供給されていた筈・・・」

「おいクソ騎士」

響夜の空間が歪んでいく。そこから見える無数の銃口と鎖の群れ。

「見せてやるよ！人間の力って奴をよお！！！！」

放たれた銃弾と共に二人の戦いが始まった。

殺人鬼達の殴りこみ（後書き）

感想、批判、意見がありましたらどうぞ送ってください。

初めて感想が来ました！！思わずテンションが上がり少々うざくなった作者です。感想ありがとうございます！皆さんも誤字の指摘、普通の感想などどんどん送ってきてください！主に作者のやる気がみなぎってきます。批判？どんと来い！！・・・やっぱあんまり責めないで下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7170y/>

殺人鬼は異世界に来てしまったようです

2011年12月17日19時52分発行